

紀伊風土記の丘研究紀要 第 11 号

【論 考】

和歌山県における経塚（上）

中村 浩（浩道）・・・ 1

【研究ノート】

宮田啓二『昭和二七年秋冬 岩橋千塚古墳群 調』一大日山地区編①－

石丸 彩・金澤 舞・瀬谷今日子・富永里菜・中西瑠花・仲原知之・馬場彩加・・・ 11

紀北の岩橋型横穴式石室における埋葬行為－棺体配置・屍床構造について－

上村 緑・・・ 21

湯浅町天神山古墳の研究－巽三郎氏収集資料と関連資料から－

田中元浩・中原七菜子・・・ 28

【資料紹介】

紀の川市黒土古墳の再検討－紀ノ川中流域古墳の出土品 1－

金澤 舞・河内一浩・・・ 39

柳川コレクション資料目録（4）－商い具・生活用具を中心に－

蘇理剛志・・・ 45

和歌山県立紀伊風土記の丘の万葉植物園の現状について

松下 太・・・ 49

【活動報告・シンポジウム開催記録】

シンポジウム「紀伊半島をめぐる海の道と文化交流」講演記録

川島秀一・中園成生・穂積裕昌・寺前直人・蘇理剛志・萩野谷正宏・・・ 53

執筆者一覧

中村 浩（浩道）	和歌山県立紀伊風土記の丘 館長	考古学
萩野谷正宏	和歌山県立紀伊風土記の丘 主任学芸員	考古学
蘇理剛志	和歌山県立紀伊風土記の丘 主査学芸員	民俗学
田中元浩	和歌山県立紀伊風土記の丘 主査学芸員	考古学
金澤 舞	和歌山県立紀伊風土記の丘 学芸員	考古学
上村 緑	和歌山県立紀伊風土記の丘 学芸員	考古学
松下 太	和歌山県立紀伊風土記の丘 園内植物管理員	植物学

<外部執筆者 五十音順>

石丸 彩	和歌山県教育庁生涯学習局文化遺産課 技師	考古学
河内一浩	日本考古学協会 会員	考古学
川島秀一	東北大学災害科学国際研究所 シニア研究員	民俗学
瀬谷今日子	和歌山県教育庁生涯学習局文化遺産課 主任	考古学
寺前直人	駒沢大学 教授	考古学
富永里菜	和歌山市産業交流局文化スポーツ部文化振興課 主査	考古学
中園成生	平戸市生月町博物館・島の館 学芸員	民俗学
中西瑠花	有田市教育委員会 主事	考古学
仲原知之	公益財団法人和歌山県文化財センター埋蔵文化財課 主任	考古学
馬場彩加	田辺市教育委員会生涯学習課 事務員	考古学
穂積裕昌	三重県埋蔵文化財センター調査課 課長	考古学

和歌山県における経塚（上）

中村 浩（浩道）

はじめに

経塚とは平安時代の後半、末法思想の流布に伴い、仏教書等の保存のため、經典などを地下に埋納する習慣が中央貴族を中心に行われた。日本での経塚造営は、寛弘4年（1007）、藤原道長が大和国金峰山山頂に造営した金峰山経塚が最古で、はじめは貴族層が末法の危機感から弥勒下生に備え、經典を後代に伝えようとする意図があったと考えられている（三宅 1983）。当初は京都を中心とする貴族階層で流行したが、やがて中世には廻国聖が諸国で納経活動を行って庶民の間で広まり、現世利益や追善供養の意味が付加され、全国各地へと拡大していったと考えられている。

和歌山県内では高野、熊野参詣道が世界遺産に登録されて以来、当該地域の信仰形態が注目され、種々研究が行われている。とりわけ熊野三社を中心に造営されてきた経塚に対しても熱い視

線が集まりつつある。

しかし、和歌山県内の経塚関連遺跡は、表に示したように、熊野地域以外にも分布しているが、必ずしもよく知られていない（第1表）。

本稿では、和歌山県内の経塚についての現状を明らかにすることを目的として、調査・研究史およびその分布状況について記述するものである（第1図）。

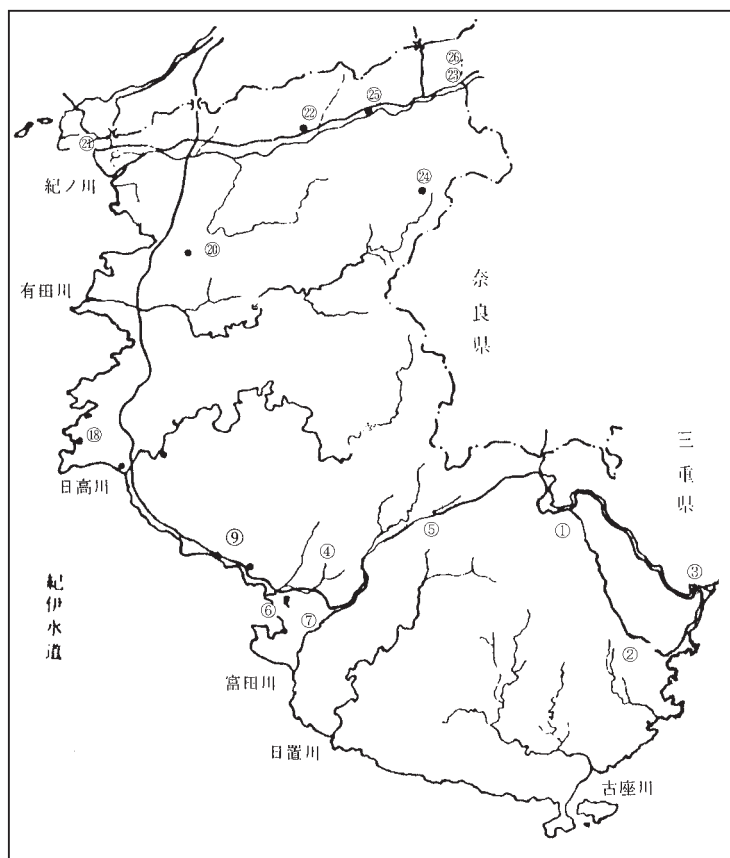
1. 県内の経塚調査研究史

和歌山県内では、熊野三山及び高野山奥の院では早くから経塚の埋納が開始されており、すでに江戸時代後半にはそれらの発見報告が見られる。

すなわち、文政8年（1825）社地の石垣を修復するため石材を採取した時、崩落した砂礫の中から経筒が出土したという熊野本宮経塚は、その最初である。埋納品は、銅製経筒、陶器製外容器、

第1表 和歌山県内の経塚

①	本宮備崎経塚群	田辺市本宮町備崎	王子にも経塚あり
②	那智山経塚群	東牟婁郡那智勝浦町那智山	
③	新宮経塚群	新宮市新宮	礫石経塚
④	高尾山経塚	田辺市上秋津高尾山	
⑤	飯盛山経塚	田辺市中辺路町栗栖川	
⑥	仮庵山経塚	田辺市湊（關鷄神社境内）	
⑦	松ヶ谷経塚	田辺市松ヶ谷	
⑧	熊岡経塚	日高郡南部川村熊岡、灰坂	
⑨	西岩代経塚	日高郡印南町岩代	
⑩	古井経塚	日高郡印南町吉井（永福寺境内）	
⑪	古屋経塚	日高郡印南町古屋（八幡神社境内）	
⑫	広井原経塚	日高郡龍神村広井原仮屋	
⑬	上山路経塚	日高郡龍神村（上山路）東	
⑭	土居経塚	日高郡美山村寒川土居（寒川神社境内）	
⑮	平ノ壇経塚	日高郡美山村猪ノ谷	
⑯	小山経塚	日高郡川辺町平川（雄ノ山蔵王権現社址）	
⑰	吉原経塚	日高郡美浜町吉原	
⑱	比井経塚	日高郡日高町比井	
⑲	柏経塚	日高郡日高町柏	
⑳	願成寺経塚	海南市別所	
㉑	木ノ本経塚	和歌山市木ノ本（大安寺址）	
㉒	粉河寺経塚（粉河産土神社経塚）	那賀郡粉河町（粉河寺）	
㉓	隅田八幡神社経塚	橋本市隅田（隅田八幡神社境内）	
㉔	高野山奥の院遺跡群	伊都郡高野町高野山	埋経・納骨
㉕	大藪経塚	伊都郡かつらぎ町大藪（慶勝寺境内）	
㉖	小峰寺遺跡	橋本市境原	礫石経塚



第1図 和歌山県下経塚分布図
(和歌山県立博物館 1980 から補訂して引用)

仏像が各1と、銀器残欠若干である。このうち経筒は高さ31.6cm、径33cmで、現存する経筒の中で最大の容積を持つ。蓋は緩やかに甲盛りのある

被せ蓋で、その頂に突起状の紐をつけている。筒身は太く大きな銅板製の円筒である。陶製外容器は、高さ39cm、径41cm、であり、次の銘文7行61文字が外側に線刻されている。この銘文から保安2年(1121)大般若経600巻を50巻ずつ12分して埋納されたことがわかる。銘文は以下のごとくである(阪田2002、第2図)。

(陶製外筒 筒身刻銘)

熊野山如法経 銘文

大般若経一部六 百巻

白瓷箱十二合

箱別五十巻

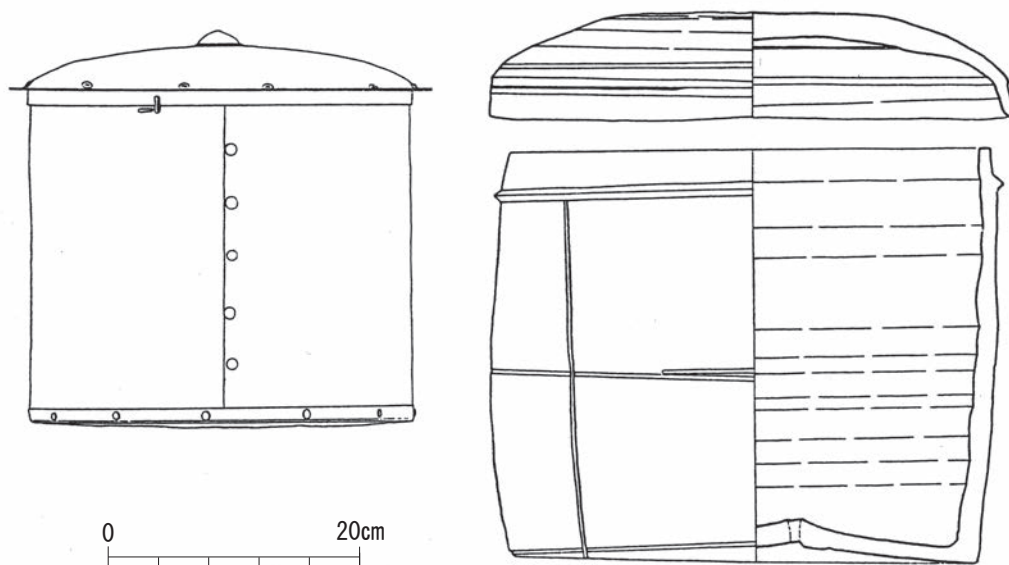
保安二年 歳次辛丑十月日

願主沙門良 勝

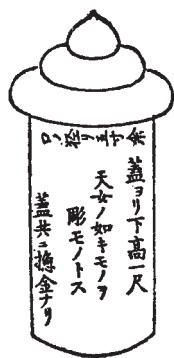
檀越 散位 秦親任

当該遺物については、曲亭馬琴『兎園小説』にみられるものと同一であり、馬琴によるコメントがあり、彼は、この奇異な報告について銘文にみられる名前から氏族の出自や系譜について考察を行っている。しかし秦氏と長宗我部氏との関連など無理がある内容と考える。

ちなみに馬琴のコメントは以下のごとくである。



第2図 東京国立博物館保管本宮出土経筒及び外容器(奈良国立博物館 1977 より)



第3図 曲亭馬琴「兎園小説」に図示された経筒
(『日本随筆大成』1973より)

解按ずるに、保安二年は鳥羽院の御宇にて、藤原忠通公関白の時の事也。文政八年乙酉まで七百霊七年をへたり。当時秦氏の人には高位のもの聞こえず。散位の事はさまざまな説あれども位の高卑に拘らず。冠位ありて官職なきを散位といふと。予は思いおり。猶職事家にたづねべし。秦氏は忌寸の姓にて秦始皇の後なるよし。姓氏禄諸蕃の譜に見えたり。親任といふ名につきて思うに、土佐の長宗我部などの上祖にはあらぬか、されば口なる証を得ざれば、何ともいひがたし。当時熊野の別当はいきほいあるものよし聞ゆ。熊野の別当増が為葦の甥になりしは、これより少し後の事なり。良勝はいつくの沙門や、これも熊野の別当か、なお考ふべし。とあり、馬琴はこの奇異な遺物報告で、その遺物に見られる名前から氏族の系譜などについて考察を加えている。しかしそれらの考察は当を得ているとは考え難く、問題が残る（第3図）。

このほかに江戸時代に知られた経塚は、『紀伊続風土記』に見える宝暦7年（1757）に若一神社社殿修理中に発見された比井経塚がある。

『紀伊続風土記』によると、

比井浦

(中略)

若一王子社、境内森山周三町四十四周

本社方一間 末社二社春日社、住吉社

拝殿 絵馬堂 長床

村の東北の端にあり、中古熊野より勧請すといふ。本宮新宮に祀る跡の内五座を相殿に祀るといふ。

宝暦七年社修理の時、境内にて焼物壺を掘出せり。高径共に一尺一寸二分口径七寸中に唐金の筒あり、高八寸一分径四寸一分の筒なり蓋は径四寸五分

法華經八卷を納む。奥書に「保元三戌寅十月廿三日奉埋王子之上」とあり、頓写と見候て文字正しからず小字に書たり。

旧社なる事知るべし、境内も広く大社なるをおもふに、此地旧熊野の神領なりしより勧請せしなからんか（以下略）とある。

なお、比井経塚は、昭和37年に出土地点確認のため、拝殿の南50mにある基壇状遺構の一部を発掘調査した結果、外容器を抜き取った痕跡と思われる石組遺構と、壺甕片が検出されたという。

また、明治末年に偶然に発見されたと伝えられ出土遺物は願成寺に保管されている願成寺経塚など偶然に遺物などが発見され、以降、本格的な調査が行われていない例がみられる（巽ほか1953）。

上山路経塚は、大正4年（1915）、丹生神社社殿は背後地ならし工事中に発見されたが、遺構は明確ではない（和歌山県1983）。

広井原経塚は、大正5年、同地の八幡神社仮尾の石地藏祠修復のため、基壇を移動したところ、下層から和鏡4面、青白磁合子数点、刀子の破片などが出土したと伝わる（和歌山県史編さん委員会1983）。

那智山経塚は、大正7年3月11日熊野三所権現の一つである夫須美神社の西約5町のところにある郷社飛瀧神社への参詣道路の左側に俗称沾池の付近の保安林が解除され、銅仏、仏具など150点余りが出土、採集された。第2回目の発掘は、大正7年3月17日である。第1回の発掘において仏像仏具などを得たことから、さらに多くのものが埋納されている可能性を持って、多くの新たな参加者を得て掘り出したものである。この時には経筒61個分など106点が採集された。第3回は大正13年3月に飛瀧神社境外、所有地において岩窟内から三鈕素文鏡、白磁香炉、陶製碗の3点を採集した。以上の那智山経塚各回の採集品は東京国立博物館に寄贈され、調査研究が行われ、

報告、出版されている（石田 1928）。

さらに那智山経塚では、昭和 5 年の発見がある。この年には 2 回にわたって発見があり、第 1 回は、郷社飛瀧神社参道清掃のため地均し中に偶然遺物を発見したもので、保元元年銘および建久 3 年銘などの経筒 43 点他、観音菩薩像など 3 体などが出土した。第 2 回は同一地域においてさらに、古銭 7 点、合計 6 点が出土した。さらに昭和 39 年には飛瀧神社境内で碎石中に経筒片、同蓋、古銭、高台付き銅器片などが出土している。

やがて昭和 39 年から 40 年にかけて青岸渡寺防災道路工事に伴う緊急調査として和歌山県教育委員会が発掘調査を実施した。遺物の散布状況から 27 箇所の遺構の存在が推定されている。出土遺物は甚大な量に及び、特に山茶碗、小皿が全体の 80% を占めている。昭和 43 年、44 年には 3 回にわたって那智大社が主体となり、國學院大學の大場磐雄を団長とし、発掘調査が行われた。第 1 回は、昭和 43 年 8 月 20 日から 27 日まで、第 2 回は同年 10 月 9 日から 20 日まで、第 3 回は昭和 44 年 8 月 1 日から 15 日まで行われた。調査は参道入口から約 60 m の間にわたる両側の地域で行われた。（大場・小山 1970）

新宮経塚は、新宮市千穂ヶ峯を主峰とする権現山にあり、神倉山、庵主池、如法堂経塚群に分かれる。いずれも熊野速玉大社を中心に造営された経塚群で、古来、聖地として信仰の対象となっていた。幸い破壊される以前に発掘調査をすることが出来た点、那智山経塚とはやや趣を異にする。昭和 31 年 5 月、速玉神社摂社神倉神社境内地の改修工事を行うことになり、とくに「ことびき岩」付近の石垣の修築は大々的に念入りに行われた。この工事中に洞窟状の旧社殿址（第 1 経塚該当地区）と、その北側岩陰付近（第 2 経塚該当地区）、および新社殿裏側（第 3 経塚該当地区）の 3 か所で多数の遺物を発見、これらを神倉山経塚として、整理報告されている。

昭和 31 年秋、権現山の大神社所有地の庵主池近くの丘尾の南斜面において仏像が採集された。大社ではかねてからこの山に植林を計画していたこ

ともあって、昭和 31 年 11 月にこの地を庵主池経塚と名付けて遺物の採集、出土地点の復元的計測を行った。

また、昭和 31 年 1 月、権現山東北山麓の社有地丘鞍部にある如法堂址の岩盤が崩壊し、山麓民家に転落の危険が生じたことから大社では対応をはかった。これに伴い転落の恐れのある岩石を移動させたところ岩陰の間隙を利用していくつかの経塚が発見された。これらを如法堂経塚と呼称し、遺物採集及び遺構実測を実施した。出土品の中には、銘品として建治元年（1276）、弘安 4 年（1281）の 2 例の在銘銅製経筒がある。平安時代の在銘資料は発見されていないが、ゴトビキ磐で知られた神倉山 3 号経塚をはじめ、庵主池 1、2 号経塚、如法堂 2～6 号経塚などの出土品に平安期のものが多く、平安時代の造営と考えて大過ないだろう。ただ、新宮にはなお多くの未発見経塚があると推察されるので、造営年代は那智山経塚と大差を認めがたい（上野・巽 1963、和歌山県史編さん委員会 1983）。

なお、神倉山、庵主池、如法堂の経塚造営地から、多くの御正躰が出土しているが、これらは修験道の儀式的な埋納によるものと、明治末年の神仏分離のとき埋納されたもので、経塚造営とは関係はないとされている。

粉河産土神社経塚は、昭和 34 年 4 月、標高 80 m の雑木林で植林中に石の下から経筒を、同年 7 月に経塚付近を整備中再び 2 基の経塚および井戸を発見し、それらの調査が行われた。これらは偶然発見された経塚ではあったが、その際に調査が実施されたもの、あるいは後日に調査が行われた例の遺跡である（羯磨・藤井 1959、和歌山県史編さん委員会 1983）。

高野山奥之院遺跡（石田ほか 1975）は、昭和 40 年が弘法大師開創 1150 年に当たり、その記念事業として御廟前の灯籠堂改築と御廟の端垣修理、植樹を行った。この時多数の遺物が出土したので調査委員会によって調査が行われた（和歌山県史編さん委員会 1983）。灯籠堂地区とする地域では、昭和 37 年 6 月、新灯籠堂の基礎工事に

多数の納骨器と一石五輪塔などが出土した。しかし工事を急いだためか、工事完了後になってようやく散乱した遺物を収集し、層位を一部確認する程度に終わったのは残念であった。

出土遺物は陶磁製納骨器があり、国産では瀬戸窯（灰釉三耳壺、仏花瓶、小壺、茶入れ、水滴など）、常滑窯（灰釉四耳壺）、土師器（正中三年蓋付小壺、燈明皿）、瓦質小壺など、中国製陶磁では南宋白磁四耳壺、水注、北宋の青白磁合子、皿などがある。金属製納骨器には、筒形納骨器、同小型形納骨器、同蓮弁形納骨器があり、ほかに竹製納骨器が出土している。

御廟内地区は、奥之院御廟地域が該当し、空海入定の地として弘法大師信仰の中心であり、禁足の霊地でもある。このため遺物の出場体は不明であるが、御廟内の表土下で集中的に発見された。ここでは多数の納骨器と共に経筒も出土した。ここで埋経が行われたことは、高野山を弥勒浄土とする信仰があり、経塚が営まれたのである。しかし一方では高野山を極楽浄土とする信仰もあって、これは鎌倉時代以降、多くの念仏聖によって盛んに回国唱導され、高野山奥の院は、念仏と納骨を中心とする聖地となって今日に至っている。奥の院遺跡にみられる納骨用容器、経塚遺物がきわめて類似している点については今後両者の関係が究明されなければならないだろう。

御廟は小馬蹄形の台地上に営まれているが、昭和52年には御廟台地東側の低地から、翌年には東側前方部にある石田三成奉納の経蔵礎石の下から、南宋白磁壺、瀬戸、備前、渥美窯系の納骨壺などが発見された。なおこれらについては『高野山奥之院の地宝』にまとめられている。

また、偶然の発見ではあったが、それに対応して調査が計画され、実施された経塚としては、昭和32年に田辺市教育委員会が発掘調査を行った^{かりほやま}仮庵山経塚がある（伊勢田1958、和歌山県史編さん委員会1983）。

大藪経塚は、昭和48年9月、墓地拡張中に経塚が発見され、墓地拡張を担当した慶勝寺総代から出土状態を聴取している（和歌山県史編さん委

員会1983）。

高尾山経塚は、田辺湾の東北方7kmにある高尾山中腹、標高300mの地点にあり、平安時代後期の建立と推定される高尾山廃寺の背後に該当する。昭和6年、貴族の所持品と考えられる高雅な遺物が多数出土して注目されたが、経塚の構造や出土状態は不明とされてきた。近年、中山利助の発掘記録が見つかり、これにより、昭和50年2月に田辺市上秋津文化財保存会が発掘調査を実施し、3基の経塚が丘陵傾斜地に並んでいることを確認、昭和6年調査と一致した（伊勢田1974、和歌山県史編さん委員会1983）。

平成元年12月から平成2年2月下旬に実施した熊野本宮備埼経塚群がある。当該経塚は本格的に知られたのは、平成元年12月から平成2年2月下旬に実施した、国庫補助事業・東牟婁地方広域遺跡群詳細分布調査によって得られた成果が最初である（黒石1990）。この調査でA、B両地点に経塚の可能性のある遺構の分布が確認され、特にA地点は標高158mの頂上付近に位置し、約10m余りの平坦地が見られる。さらに周辺には20～30cmの川原石が散乱し、須恵器の破片なども採集されたことから、備宿の建物跡の可能性も考えられている。C地点からは瓦質の経筒或いは外容器などが採集された。また大黒石と呼ばれる巨大な洞窟の割れ目からは瓦質の土器が採集され、修験関係の修法場と推定されている。また同時に丘陵の高所で、平坦面が確認され、備宿の可能性も指摘した。その後、当該地域が世界遺産登録のコアゾーンに含まれることから、本格的な調査が行われることとなった。平成13年12月11日から14年2月15日の間、大谷女子大学（現在の大阪大谷大学）によって調査を実施し、第一地点で32遺構、及び第三地点7遺構以上、少なくとも39カ所の経塚遺構を確認した（中村浩ほか2002）。

さらに近時、報告される橋本市隅田所在の隅田八幡宮経塚がある。隅田八幡神社経塚は、平成9年度の隅田八幡宮正遷宮に伴って境内整備事業が行われた際、多くを破損した経筒1点が偶然発見

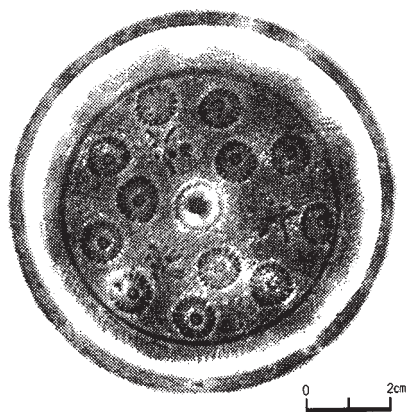
された。その報を受けて、市教育委員会は、県教育委員会と連絡を取るとともに関係者間で対応を協議し、まずは緊急調査により記録保存を図った。

しかし複数の経塚の存在が明らかとなり、さらに1基が良好な保存状態を保っていたことなどから、緊急調査では対応しきれなくなったため、平成10年度において本調査を実施することとなった（大岡1990）。本調査は平成10年10月12日から実施された。なお最終的にこの経塚は少なくとも4つの画期があったと考えられている。

2. 経塚各説

（1）大藪経塚 伊都郡かつらぎ町大藪

紀の川の右岸、和泉山脈から派生する一支脈の突端で、標高約75mに位置する。現在は墓地になっているが、昭和48年9月墓地拡張中に経塚が発見され、県教育委員会が調査を行った（和歌山県史編さん委員会1983）。既に削平されていた事から埋納状態は不明である。当時墓地拡張を担当した慶勝寺総代から出土状態を聴取した。それによると、慶勝寺に隣接する墓地を拡張するため、椎の大木の根を1mほど掘り下げていたところ、表土より約40cmの深さから、径約10cmの平らな河原石十数個、一重におかれた状態で出土した。その下部から約15cm×20cmの平らな河原石と、これよりやや大きな片岩が1枚上下に重なって見つかった。2枚の岩石の下は約40cmの空洞であった。外容器の甕は、積年の外圧によって随所にひび割れが生じ、その割れ目に椎の根が侵入



第4図 大藪経塚出土和鏡拓影
（和歌山県史編さん委員会1983より）

していた。この中に経筒が径約15cmの円形の平らな石の上に安置された状態であり、その横に和鏡が埋納されていたとのことである。

出土遺物を見ると、須恵質外容器は、口径41.4cm、胴部最大径53.7cm、器高52.5cmの壺である。口縁部は体部との接合部から大きく外反しており、口縁端部は多少垂れ下がりぎみである。胴部は最大幅が中央部よりやや上方にあるが、底部が丸底であるため球形に近い形状である。体部の全面に細い叩き目が施され青海波文がみられる。瓦製経筒は器高23.2cmの身に器高7cmの蓋が乗り、器高で28.9cmをはかる。身は径9.2cmをはかり、粘土板を棒状のものに巻き付け円筒状にしたもので、粘土紐を内側から当て、約7.4cmの口縁及び立あがり部を作っている。底部は円筒内に粘土の円板を作って埋め込んで作っている。蓋は径8.7cmを測り、背の高い宝珠形のつまみがつく。肩の部分下方に沈線2本で区切られた間に櫛による刺突文が施されている。菊花飛鳥鏡は、径9.3cm、菊座鈕直角式中高縁の和鏡である。宋銭は『元祐通宝』で出土状況については不詳であるが、和鏡などと共に経典の伴納品として、奉養的な意味から埋納されたと考えられる（第4図）。

（2）粉河産土神社経塚 那賀郡粉河町粉河

昭和34年4月、^{こかわうぶすな}粉河産土神社は、粉河寺本堂裏にある風猛山南斜面、標高80mの雑木林で植林中に石の下から経筒を発見した。同年7月に経塚付近を整備中再び2基の経塚および井戸を発見、それらを第2号、第3号経塚とし、最初に発見したものを第1号経塚とした。各経塚の位置は第1号の北東6mに第2号が、第3号は第2の東に接しており、井戸は第2号の南5.6m位置にあった。

第1号経塚は、天治2年（1125）のもので、発見時の状態は、陶製経筒の蓋にしていた自然石が地表に出ており、枯葉や腐蝕土が薄く覆っていた。陶製外容器は口縁部を除き割れていたが、ほとんど旧態を保っていた。それ以外には何の伴出物、また外部施設もなかった。出土状態から見てまず外容器に入れる程度に地面を掘り下げ、外容器とともに経筒を入れ、その上に自然石で蓋をしたき

わめて簡単なもので、蓋石は和泉砂岩のほぼ三角形の自然石が、42 cmの一边を南側に向け、裏面をほぼ水平に据えてあった。他から移され再納されたと考えられるほど簡素なものであった。

陶製外容器は、高さ 34 cm、口径 18 cm、最大径 19 cm、中太の円筒で、底部は故意に欠いており、厚さ 2 cm、口縁部に向かって薄くなっている。口縁部の下に 0.5 cmの突帯があり、胴の上、中、下の 3 か所には簡単な 2 本の刻線が巡っている。胎土は白灰色、内側に凹凸があり、輪積み法で作られた痕跡を残している。自然釉が見られるが、厚くて釉のかかった部分は剥離して素地をみせている。常滑系のもので本来経筒を入れる経筒として製作されたものであろう。蓋の一部が近くから出土している。

銅製経筒は被蓋式である。蓋は宝珠形のつまみをもった傘形で径 15.5 cm、高さ 4.6 cm、傘の一部に 2 条の突帯を巡らせ、口縁部はわずかに上に反転している。縁部で厚さ 0.4 cm、上部に破損はあるがほとんど変色していない。内部は鋳造後に轆轤で削った跡がある。筒部は高さ 25 cm、径 12 cm、厚さ 0.2 cm、鋳造の円筒で底部の一部は腐蝕ひどく破損している。筒の外側には口縁 1.8 cmの下に 9 行の銘文がある。経筒の上部と蓋の台部の三方に径 0.3 cmの孔をあけ、その一つを鉄釘でとめてあったものと考えられる。

経筒銘文は陰刻で次のように記している（関 1985）。

奉納妙法蓮華經一部八卷

天治二年九月五日癸酉助教清原

願尊良忍

勝聞堅俊

信俊勸進六口大法師

忍昭

聞覚

四七日間、於芹生別所如法
如説奉書写畢。是依靈驗、

所奉埋粉川宝前也。願以此

善根、生兜率内院、血縁衆相

共、値遇慈氏尊、法界衆生

平等利益。敬白

なお、『本朝新修往生伝』によれば、信俊は如

法経を書写して名山霊寺に送ったとあり、本例以外にも鞍馬寺経筒(国宝)にも彼が保安元年(1129)に追善供養の目的をもって埋納している。

経巻は、普通見られるように八曜星の形に入られていたが、各巻とも上部は腐蝕して細くなっている。紙本経で、経巻の径は 2 ～ 2.3 cm、経軸は長さ 24.9 cmの竹を幅 0.2 cm、厚さ 0.1 cmに割ったもので発装の軸も細い割竹を使用している。

銅製留金(露)は小さい釘様のもので、腐蝕して経巻内にくい込んでいる。各巻とも腐蝕はなはだしかったが、開巻することができた。それぞれ幅 25 cm、長さ約 10 mである。各巻ともに初め 3 分の 1 程度は破損がひどいが、終りの 3 分の 1 くらいはほとんど完全に残っていた。第 1 巻の巻末には、「仏子蓮覚」とあり、第 2 巻から第 7 巻までの 6 巻はそれぞれ筆者を異にしている。経筒の銘文にある 6 人の大法師(願尊、良忍、忍昭、勝聞、堅俊、聞覚)が各巻をそれぞれ分担して書写した 1 巻経であり、最後の 8 巻は 6 人の僧侶と蓮覚が合作して出来た書継経であることが知られる(第 1 号経塚出土遺物は現在奈良国立博物館に保管されている。)

第 2 号経塚は、第 1 号経塚の北東約 6 mにある鎌倉時代初期のものである。深さ 50 cm、経 45 cmほどの穴を掘り、口部のまわりには人頭大の自然石をならべて、西 1.4 m、南北 1.6 mの方形の囲いを作っていた。この穴の底に陶室の片口鉢を蓋にした常滑壺が置かれ、中には経筒が収められてあり、外には鉄刀子 2 点、鉄鈴 1 点、鉄鋏 1 点、鉄鎌 1 点、鉄製提子 1 点、瓦器椀 1 点が埋納されていた。さらに穴の中には木炭が多量に詰めであった。

経筒の外容器である常滑壺は、高さ 39 cm、底部径 23.5 cmの赤褐色の壺で、口縁部は大きく開き肩が張っている。口縁部の上部に自然釉が残っているが、胴部は釉が剥落して薄鼠色の地色が出ている。内部は赤褐色で巻き上げ手法作られており、凹凸のへら痕がある。正面、裏面に「×」の窯印がある。片口鉢は、灰色の陶質の日用品である。うつぶせにして常滑壺にかぶせ蓋に用いられ

ていた。経筒は黒色瓦製で、筒身は高さ 21 cm、径 15 cm の手づくね手法で製作されたものである。それに中空の蓋がかぶさっており、身と蓋には縦横に暗文が施されている。埋納品には鉄刀子 2 点、鉄鈴 1 点、鉄鋏 1 点、火打ち鎌などがある。瓦器碗は径 14 cm、高さ 5 cm の黒色瓦製品で、中に暗文がある。経巻は見当たらなかった。

第 3 号経塚は、第 2 号経塚の東側に隣接し、第 2 号経塚とほぼ同じ構造と思われるが、すでに石櫛内はひどく破壊攪乱されていた。遺物は上下に重なっていたが、下部から古瓦と多数の木炭に混じって常滑壺片多数、刀子 1 点、鏡 3 点、鏡片多数、鉄製鍋、瓦器碗片が散在していた。上部からは瓦質の壺片多数と陶室壺底が出土した。出土遺物には常滑壺と黒色球形の瓦質三耳壺がある。後者は、口縁部近くに 3 つの半環状耳がついていて、体部全面に叩き目があり、経巻を入れたものであろう。須恵器壺底は、瓦質三耳壺の蓋に用いたものと思われる。山吹双雀鏡、山吹若松双鳥鏡は径 11 cm であり、鋳型が磨滅して文様のはっきりしていない。

そのほか素文六花鏡片、素文八花鏡片、飛雀鏡片、文様不明鏡片などが出土した。これらの鏡片は平安時代から鎌倉時代にかけてのものである。青磁片は薄緑色で、連弁文の碗形のものである。井戸は緑泥片岩、和泉砂岩、平瓦などが井戸枠として使用されており、蓋石で閉ざされていた。構築の時期は不明であるため、経塚に伴うかどうかは明確ではない。

(3) 丹生神社（上山路）経塚 日高郡龍神村東

大正 4 年（1915）、丹生神社社殿は背後地ならし工事中に発見されたが、遺構は明確ではない。出土遺物は、刀子 12 点、和鏡 6 点のみである。山吹双雀鏡、水波千鳥鏡、桜花飛鳥鏡 2 面、松鶴鏡の計 5 面は東京国立博物館の蔵品となっている（和歌山県史編さん委員会 1983）。

(4) 広井原経塚 日高郡龍神村広井原仮屋

大正 5 年（1916）、同地の八幡神社仮尾の石地藏祠修復のため、基壇を移動したところ、下層から和鏡 4 面、青白磁合子数点、刀子の破片などが

出土したと伝える。鏡のうち水草双雀鏡、菊花双雀鏡、松鶴鏡の 3 面は東京国立博物館の蔵品となっている（和歌山県史編さん委員会 1983）。

(5) 吉原経塚 日高郡美浜町吉原

松原小学校校庭の弥生土器出土地点から東へ 50 m、大和籜遺跡敷地内の砂層で高台付きの碗と水波文の和鏡が発見されたことから、平安後期に埋納された経塚と推定される。

(6) 比井経塚 日高郡日高町比井

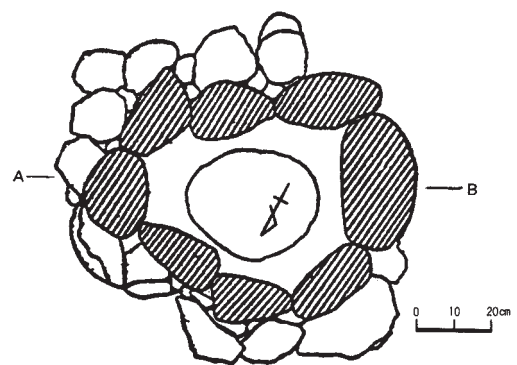
『紀伊続風土記』によると宝暦 7 年（1757）に若一神社社殿を修理中に発見された。昭和 37 年、出土地点確認のため、拝殿の南 50 m にある基壇状遺構の一部を発掘調査した結果、外容器を抜き取った痕跡と思われる石組遺構と、壺甕片が検出された。石組は径 0.9 m、深さ 0.35 m の土壇の周囲に丸みのある細長い石を立て。環状に並べて石櫛をつくったもので、床には礫を敷いている。ここに経筒を納めていたのだろう（第 5 図）。

出土遺物うち外容器は常滑焼の壺で、高さ 37 cm あり、銅製経筒は、蓋を含めて高さ 24.5 cm で素文である。その中には法華経 8 巻が納められており、書写の経典は朱書と墨書 2 種がある。その後の調査で外容器の蓋の一部が検出されている。

(7) 願成寺経塚 海南市願成寺

願成寺の裏山は標高 210 m 衣笠山でその頂上部に経塚が形成されていた（巽三郎ほか 1953）。

経塚は明治末年に偶然に発見されたと伝えられ出土遺物は願成寺に保管されている。遺構は約 2 m 四方片岩で 2 段積にされていたようで一部残



第 5 図 比井経塚石組遺構実測図
（和歌山県史編さん委員会 1983 より）

存している。出土遺物は合子 10 点、和鏡 2 面、刀子片、瓦器 3 点である。ちなみに願成寺は、久安元年（1145）僧湛慶により建立されたという。この地には別所という地名が残っており、別所聖によって築造された経塚の可能性が濃い。

門前の道が有田郡に越える峠道であることも考慮すると、熊野街道の藤白峠と藤白王子の关系到近似している。

（８）高尾山経塚 田辺市上秋原

田辺湾の東北方 7 km にある高尾山中腹、標高 300 m の地点にあり、平安時代後期の建立と推定される高尾山廃寺の背後に該当する（伊勢田 1974）。昭和 6 年、貴族の所持品と考えられる高雅な遺物が多数出土して注目されたが、経塚の構造や出土状態は不明とされてきた。近年、中山利助の発掘記録が見つかり、これにより、昭和 50 年 2 月に田辺市上秋津文化財保存会が発掘調査を実施し、3 基の経塚が丘陵傾斜地に並んでいることを確認、昭和 6 年調査と一致した。経塚は、東から第 3 号、第 1 号、第 2 号と一列に並んでいる。

第 3 号経塚は土壌の床に床石を据え、その上に経筒をのせて外容器の甕をかぶせ、さらに蓋石を乗せた比較的簡単な構造であったとみられる。土壌は一辺 0.4 m の方形、深さ 0.7 m、底は砂岩質の地山を 10 cm 掘り込んでいた。蓋に釣り環を付けた経筒は、下部が腐蝕して底部はなく、筒内の経巻もすでに朽ちて、経軸木が残っていたにすぎない。なお土壌内から出土した埋納品は、銅板製用筒 1 点、常滑焼外容器 1 点、経軸木一括、付近からも外容器片、壺型白磁合子 1 点、硯 2 点、瓦製経筒片（紐）備前焼骨壺、勾玉 1 点が出土。

第 1 号経塚は、第 3 号経塚の中心から西 0.91 m にあり、土壌に割石積みの石室づくり床に床石据えた上に経をのせ、外容器の甕をかぶせている。土壌、深さ 20.9 cm で、底部には第 3 号経塚と同様砂岩質の地山を楕円形に 10 ～ 15 cm 掘りくぼめている。土壌上の口径は 1.12 ～ 1.23 m、下部口径は 1 m で、その中に深さ 0.6 m、内法 0.55 m 平方の割石積みの石室を設けたものと推定される。内部の状態は明らかではないが石室内の間隙

には木炭片を詰めていたと思われる。

出土した埋納品には、銅板製経筒 1 点、常滑焼外容器 1 点、和鏡片 5 面、鉄刀子一括、平形青白磁合子 6 点、壺型青白磁合子がある。

第 2 号経塚は第 1 号経塚の中心から 2.75 m 西南にあり、径約 0.6 m、深さ 1.6 m 円筒状に土壌を掘りうがち、その底近くに床石を置いた上に外容器甕を伏せて蓋石をのせている。この経塚が前二者と異なるのは表土下 0.3 m にある砂質の地山を径約 0.6 m、深さ 0.76 m の円筒状に掘下げ、石室の代わりにしている点にある。土壌内の底近くには経筒はなく、多くの埋納品は床石の下、土壌底部に鏡、櫛、黛などの化粧品類を並べ、その周囲に合子 15 個が置かれ、それらを囲むように刀子 11 点、鉄鏃が納められていたという。そのほか、土壌の蓋石上に鏡 2 面と古銭 2 点が置かれていた。

出土した埋納品は、外容器 1 点、和鏡 9 面、鏡筥 1 点、鉄刀子 11 点、鉄鏃 2 点、平形青白磁合子 2 点、壺型青白磁合子 2 点、数珠親玉 1 点、水晶製丸玉 8 点、ガラス製小玉 3 点、ガラス製吹玉 2 点、水晶製露玉 1 点、櫛 3 点、黛 2 点、扇残欠 2 点、古銭 4 点、青白磁片 1 点であった。

第 1 号経塚出土の鉄刀残欠は、数量や寸法などは不明であるが、刀身と鞘の一部と考えられる部分が調査で出土した現存長 10 cm の鞘の石突部で、表面に薄く黒漆が塗られている。また地元民の採集品には冑の飾り金具環、菊花文の目貫金具、毛抜き金具、鞘の責め金具につけた小さい葛葉形飾り金具などがある。いずれも金銅製で太刀の拵えを知るうえで重要な資料である。

経筒は青銅の打物製で、蓋は現存しないが、類例の少ない釣り環鈕であった。現存高 23.8 cm、筒径 11.3 cm 内部の上部から 5 cm のところに経巻残欠がわずかに付着し、納入状況や料紙幅が約 23 cm であることが想定できる。筒身の下部は変色し、水に浸っていたことがわかる。底部は欠失している。

第 2 号経塚出土の鏡筥残欠は、身の部分である。木製の曲げ物で木地に砥の粉の下地をつけ、

立ち上がりとその周辺に布張りをして、薄く漆を塗っている。現存部分は高さ 1.7 cm、径 12.7 cm に過ぎないが、剥落した漆片を集めて立派に復元されている。蓋表面には平座に蝶の金蒔絵散らし文様あり、蓋の裏には銀蒔絵で蝶が描かれている。

鏡管の中には松枝双鶴鏡（径 11.2 cm）、山吹双鳥鏡（径 8.6 cm）の 2 面が納められていた。なお鏡管の中には金切箔をちりばめた雲母引き敷き紙と思われる紙塊があったと記録されている。櫛残欠は黄楊製、横長の爪形場挽櫛で、長さ 7.2 cm、幅 3.1 cm である。

合子は、青白磁の宋代景德鎮窯系といわれる青白磁合子であり、形は平形と壺型に分けられる。平形は 19 合あり、大きさは平均径 6 cm、高さ 3.5 cm で、蓋凹面の文様には草花文、菊花文、果実文が多い。ただ 1 合であるが、珍しい兎草文の合子も見られ、現在熊野速玉大社の所蔵となっている。

壺型合子は 6 合あり、大きさは平均して、径、高さともに 5 cm、蓋表面の文様は中央に菊花を配した花形文が普通であるが、草花文を浮かせた 1 合は形も肩衝風で肩に連弁文を配し身の周りに唐草文、いわゆる連続波状瑞雲文をめぐるさせている。

扇残欠は、細骨の蝙蝠といわれる夏扇の骨 5 本と、桧扇の一部である夏扇の骨は木製で、断面は半円形をなし、黒漆上塗りしているらしく、黒褐色呈する。

要は上端を欠失しており、地紙は雲母引きで、金銀の切り箔を散りばめた上に、定かではないが、1 本樹幹と散り松葉が描かれている。地紙を折りたたんだ幅は約 2 cm ある。5 本骨の扇と思われる。

刀子残欠はいずれも腐蝕が著しいが、うち 1 点は完全に残っており、銀製の責め金具をつけており、長さ 36.5 cm の腰刀風である。責め金具は身についたもの 6 点とほかに 3 点がある。

【以下次号】

【参考文献】

石田茂作 1920「紀伊比井王子神社蔵の経塚遺物」『考古学雑誌』

石田茂作 1928『那智発掘仏教遺物の研究』皇室博物館学報 6
東京国立博物館 1985

石田茂作ほか 1975『高野山奥之院の地宝』和歌山県文化財学
術調査報告書 第 6 冊 和歌山県教育委員会・高野山文化
財保存会

伊勢田進 1953「關鷄神社仮庵山経塚遺跡」『田辺文化財』2
田辺市教育委員会

伊勢田進 1974「高尾山経塚群」『田辺の指定文化財』1 田辺
市教育委員会

上野元・巽三郎 1963『熊野新宮経塚の研究』熊野神宝館
大岡康之 1990『橋本市隅田八幡宮経塚発掘調査概報』橋本市
教育委員会

大場警雄・小山修三・1970『那智山経塚』那智大社

羯磨正信・壺井公彦 1959『粉河産土神社経塚について』

黒石哲夫 1990『国庫補助事業・東牟婁地方広域遺跡群詳細分
布調査報告』和歌山県教育委員会

阪田宗彦 2002「東京国立博物館収蔵の本宮経塚出土品の語る
もの」『熊野本宮備前経塚発掘調査報告書』大阪大谷大学博
物館報告書第 20 冊 大阪大谷大学博物館

巽三郎ほか 1953『願成寺発掘調査報告 1』願成寺

東京国立博物館 1977『経塚遺宝』、東京国立博物館

中村浩ほか 2002『熊野本宮備前経塚発掘調査報告書』大阪大
谷大学博物館報告書第 20 冊 大阪大谷大学博物館

中村浩 2004「熊野本宮備前経塚について一兎園小説兎園小説
所記載記事の検討一」『堀田啓一先生古稀記念献呈論文集』
同作成委員会

奈良国立博物館 1977『経塚遺宝』

仁井田好古 1910『紀伊続風土記』第 2 輯

三宅敏之 1983『経塚論巧』雄山閣出版

吉川弘文館 1973「曲亭馬琴 兎園小説」『日本随筆集成』第
2 期 第 1 巻 吉川弘文館

和歌山県史編さん委員会 1983「那智山経塚」「新宮経塚」「高
野山奥之院遺跡」「丹生神社経塚」「広井原経塚」「吉原経塚」
「高尾山経塚群」「比井経塚」「願成寺経塚」「丹生神社経塚」
「仮庵山経塚」『和歌山県史』考古資料 同刊行会

和歌山県立博物館 1980 特別展『那智経塚』

宮田啓二『昭和二七年秋冬 岩橋千塚古墳群 調』
－大日山地区編①－

石丸 彩・金澤 舞・瀬谷今日子・富永里菜・中西瑠花・仲原知之・馬場彩加

はじめに

『昭和二七年秋冬 岩橋千塚古墳群 調』(以下、「当資料」という。)は、和歌山県の郷土史家である宮田啓二氏が昭和 26 ～ 29 年 (1951 ～ 1954) に岩橋千塚古墳群などの踏査や聞き取りの記録を書き留めたものである。当時やそれ以前の岩橋千塚古墳群などの状況を知ることができる大変貴重な資料であることから、有志で令和 2 年度には花山地区、令和 3 年度には大谷山地区の書き起こしと考察を行った (石丸ほか 2021・2022)。

本稿では、現在の大日山地区の一部、当資料の大日山第Ⅰ稜と第Ⅲ稜について記載している 69・70、87 ～ 96、102 ～ 109、121、133 頁の書き起こしを掲載し、若干の考察を行う。なお、編集は金澤が行った。

書き起こしは、およそ各頁数に分けて掲載し、旧字やくずし字¹⁾、誤字もすべて原文のままとした。文字が判別できないものは、『□』と表記している。また、補足が必要と思われる箇所には、注記《* 》を付記した。今回掲載できなかった残りの頁の書き起こしについては、来年度以降の

『和歌山県立紀伊風土記の丘研究紀要』で公開予定である。

なお、当資料に記載されている古墳番号は、現在の古墳番号 (和歌山県教育委員会 2019) と異なっている。記載内容をわかりやすくするため、現在の大日山地区と当資料の古墳番号との対応関係を先に示し (第 1 図・第 1 表)、書き起こしにも注記する。ただし、全ての対応をとることは難しかったため、確定的でないものについては? を付記している。



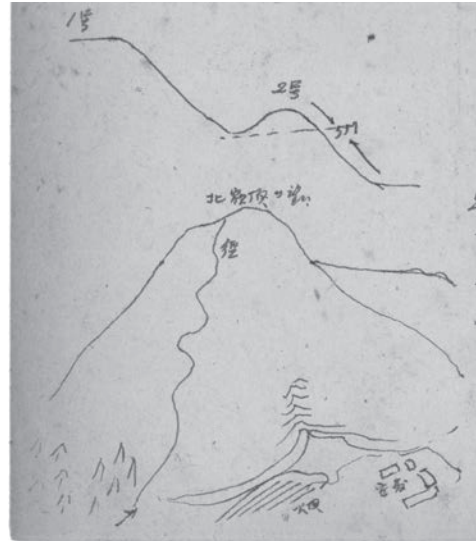
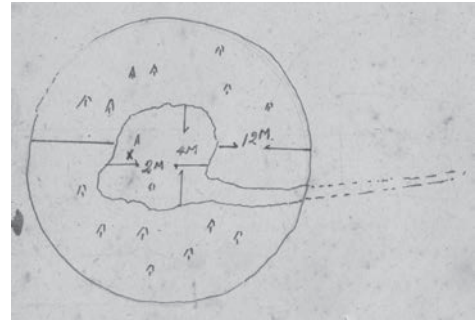
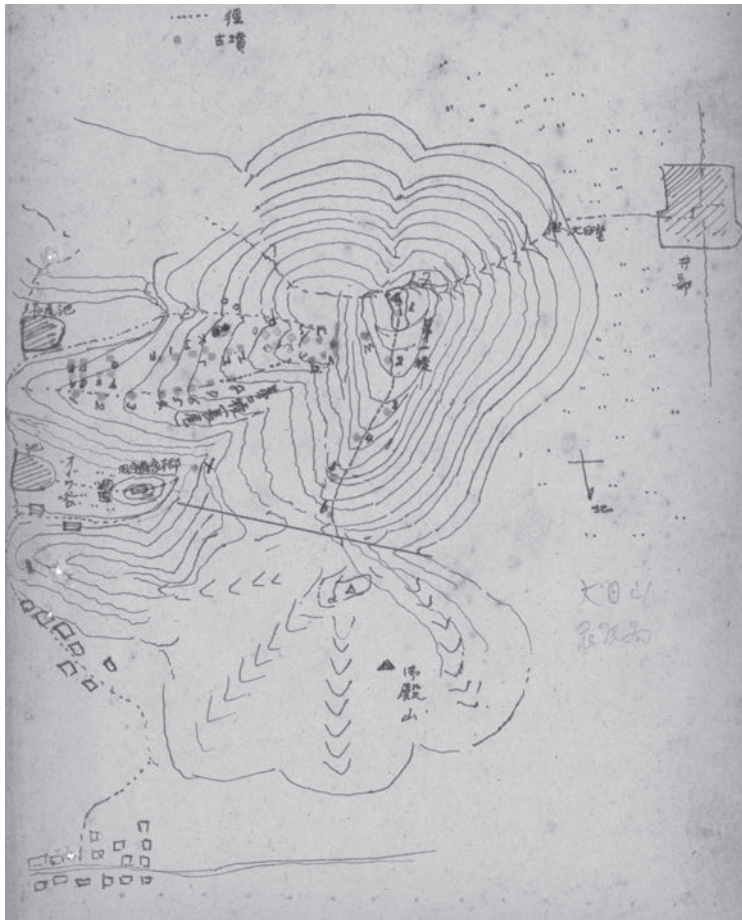
第1図 現在の大日山地区古墳分布図
(和歌山県教育委員会 2019) ※番号は古墳番号を示す

第1表 大日山地区の古墳対応関係

当資料番号	現古墳番号	当資料記載概要	備考
第Ⅰ稜 1 号墳	大日山 35 号墳	長さ 50 余りの前方後円墳のように見える 2 つの古墳。南北主軸。欄 2 枚、梁 1 本もつ横穴式石室あり。奥壁付近に海岸の玉石集積。墳丘から埴輪出土。俗称チャウス塚?	
第Ⅰ稜 2 号墳	大日山 75 号墳?	径 12m の円墳。頂上中央に長さ 4m、幅 2m の凹みや掘割あり。墳頂に長さ 50cm の結晶片岩 1 枚あり。	
第Ⅰ稜 3 号墳	大日山 20 号墳?	—	分布位置から推測。
第Ⅰ稜 4 号墳	大日山 22 号墳?	—	分布位置から推測。
第Ⅰ稜 5 号墳	大日山 25 号墳?	—	分布位置から推測。
第Ⅰ稜 6 号墳	大日山 76 号墳?	—	分布位置から推測。
第Ⅲ稜 1 号墳	大日山 8 号墳	石室残存。	H18 石室簡易実測。分布位置から判断。
第Ⅲ稜Ⅱ号墳	大日山 3 号墳	横穴式石室あり。大半埋没。石室長 2.5m、幅 1.5m。	
第Ⅲ稜Ⅲ号墳	大日山 4 号墳	円墳。石室あり。長さ 2.3m、幅 1.7m、深さ 0.5m で、北壁のみ石積残存。	
第Ⅲ稜Ⅳ号墳	大日山 5 号墳	小墳。石室あり。右壁の一部残存、大半埋没。第Ⅲ稜Ⅲに東接する。	
第Ⅲ稜 5 号墳	大日山 7 号墳	古墳 (第Ⅲ稜Ⅳ) の園路を挟んで北側に位置。	分布位置から判断。
第Ⅲ稜 6 号墳	大日山 2 号墳	径 10 m の円墳。横穴式石室あり。玄室長 3m、幅 2.12m、高さ 2.5m。両袖式。石棚 1 枚あり。玄室床面に川石あり。墳丘斜面に長さ 1.3m、幅 0.7m の結晶片岩 1 枚あり。	
第Ⅲ稜 7 号墳	大日山 67 号墳	径 10m の円墳。横穴式石室あり。玄室長 1.8m、幅 1.75m、高さ 1.4m。両袖式。羨道面は破壊。	
第Ⅲ稜 8 号墳	大日山 1 号墳	篠密生。小墳で径 1 m、深 0.5m の凹みあり。	
第Ⅲ稜 9 号墳		円墳。墳丘に東西に幅 0.9 m、長さ 5m、深さ 1.5m の掘割あり。	
第Ⅲ稜 10 号墳	大日山 79 号墳	盛土 0.5m の小墳。縦穴式石室。長さ 1.25m、幅 0.45 m、深さ 0.6m。	

1. 宮田啓二『昭和二七年秋冬 岩橋千塚古墳群調』
書き起こし

【69 項】



石槨はすでに痕跡をとどめない 一見羨道の如く東方斜面を降下する掘割の頂端が玄室の趾に達しているがこれを以て羨道の方面とするのはどうかと

【70 頁】

大日山南嶺

昭和 26. 12. 24・・・第Ⅰ稜及頂上墳調査
大日堂ヨリ登り、大日堂ニ自転車預ケ昼食
當日第4号《*大日山 22 号墳?》迄調査完了

【102 頁】

大日山南嶺 第Ⅰ稜調査

第2号墳《*大日山 75 号墳?》

大日山南嶺頂上墳正北下に位置し頂上線上を通ずる径が オイワ谷西角に下る路辺右側にある。南嶺北斜面中腹少々上の位置。

塚上よりは西方に和歌山市を望み 北は北嶺に遮断され、東北に高橋神社及び河北遠望、高積山、近く 旧安藤家下邸を瞰下する地点

思う。

この付近頂上或は山稜山腹至るところ、経《*径》3 尺許の円穴或いはこの墳塚にみる様な掘割のあるのは昭和 20 年 5、6 月の頃より本土決戦、近畿沿海にアメリカ軍上陸に備えて陣地構築に動員され 我々方ノ岡崎上方 西和佐 前山南頂斜面に同様の壕、構築を為した當時、この方面に動員された一隊の所作に因る。

恐らく當時迄は 羨道の如く見られる。東向掘割のなかったものと見るのが正しい。

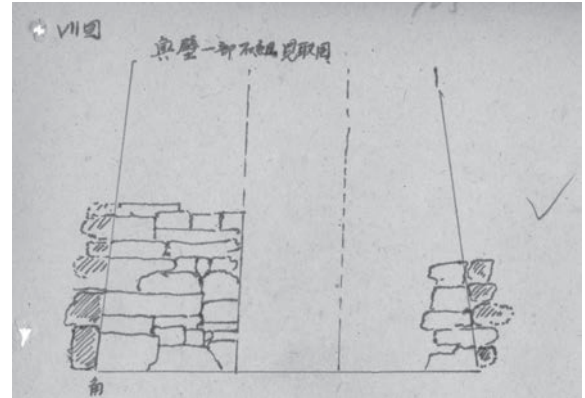
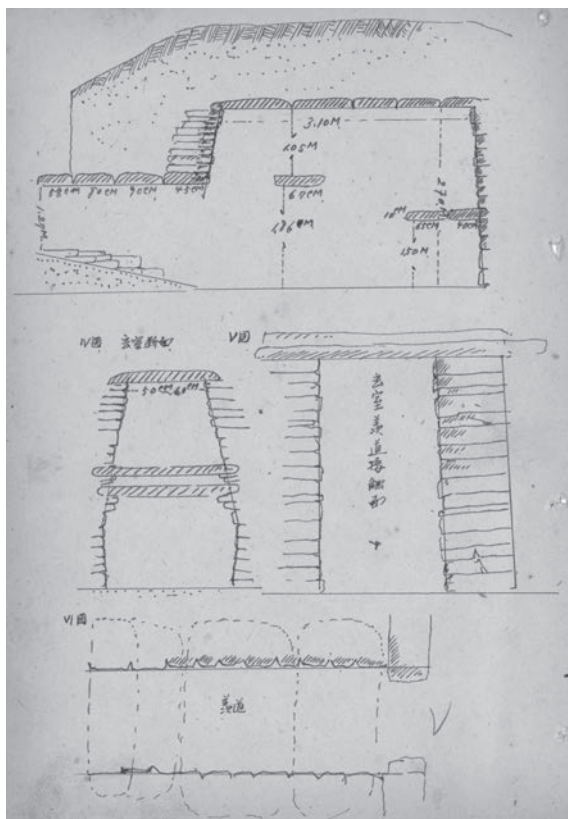
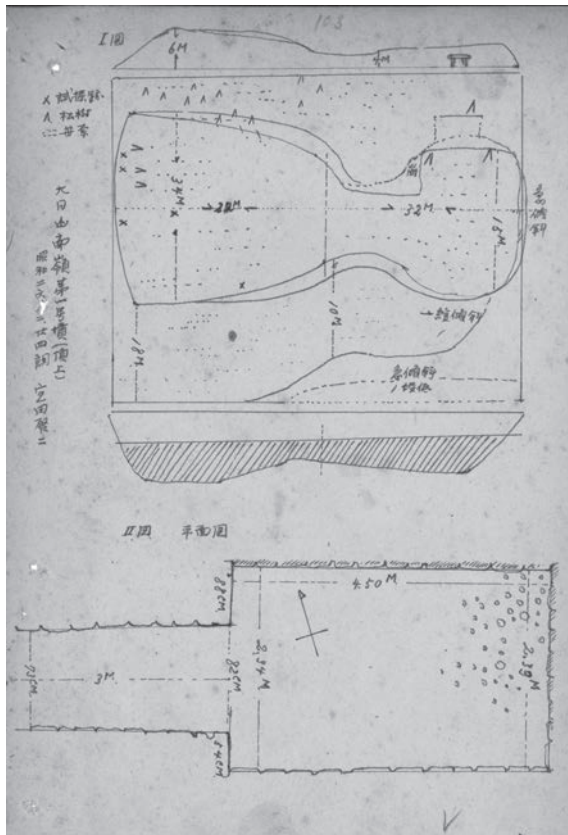
×印に 50CM 許の青き板石一箇とどむるのみ

【103 ～ 109 頁】

大日山南嶺第一号墳（頂上）《*大日山 35 号墳》
昭和二六. 〇二. 廿四調 宮田啓二
昭和 26. 12. 24 午後実調 大日山頂上墳《*大

日山 35 号墳》

大日山頂上（142 m）にある、第 1 号墳《*大日山 35 号墳》である。南北を主軸として長径 50



M 餘の封土を持つ最大墳である。

この地点からは北嶺山頂古墳《*大谷山 22 号墳》と同様和歌山市を一眸に収め 眞直ぐ西に四國沖イ島を望み、紀の川口に対する。和歌浦、関戸古墳ある蛸頭子山は 其の三角頂を見せ正北に大日北嶺の草山に對し 紀の川を隔て、直川を望む 神崎山の彼方に名草山があり西南角にあたる。本日は小春日和の様に暖かく大氣澄明の為四國淡路まで寸眸直ちに収めて、実に美しい眺望であつた。

すぐ目の下に見える一団の部落は忌部（井辺）で忌部氏の持つ環境に最も近接してこの古墳がある。

第一図に示す様に 本墳は前方後円を模したものと思はれ 井辺から大日堂裏手に道をとればその方形部と思はれる西南角に出で 徑は古墳の中央を北に通じ又 右に折れて西和佐岩橋古墳の山頂に導く。この方角にはいくつかの山脈が相口う。西和佐の平地の東限に高積山があり河北は一眸の裏に聚る。

山頂は一帶の笹原で 古墳の南側西側は実測するには相當な状態であるが東側は古墳の側面を露呈してをり、少々胴張りを持った方形を意図している 7 は東南、西南角を見れば明瞭である。勿論山頂利用の古墳であるが東側面山腹を平坦としそこに幅 18 m、長さ 30 m の矩形状をつくり古墳の基礎をそこに置いている（西側面は少々狭い）から 本古墳築造にあたってその土を封土に盛り上げた 7 は明らかであり 一見平地より望んで山頂に不自然のあるのもそのためである。こうした形は山腹古墳にも大なり小なり見られる共通点であるが、北嶺山頂墳（ 号）、花山中央南西墳（第 号）

の三つに於て、最も顕著である。

この平坦部より測ると前方部南辺に於て6M、後円部で4m～5mで墳丘断面図（第1図）に図示する様に後円部は低く、現状に於ては中央くびれた部分より両端に高くなり、直ちに山丘急傾斜に移る形をとり南端の如きは東西山脚の谷をなす中央に封土をすべらせた形になつてゐる。

若しこの古墳を、前方後円墳と決定づけられるなら、後円部の前方部に比し高いのが古墳主体の表象として普通であり、古墳築造の末期となるにしたがつてその意義が忘却され、こうした形をとる Γ 、平地古墳の場合に於てもある Γ であり時代基準の據所ともなうと思うが、この場合、山頂の原形がすでにこうした形に置かれていたとするなら、自から、一般類型を以てのみ律することも出来ない。それにしてもこの工事は可成の大工事である。少くとも南峯の主墳であり、後円部を高くする意図があるなら、方位を転置する Γ 乃至封土を加減する Γ も出来た筈である。私は調査にあたつて、最初は高さ方を主墳と假定し、発掘の有無を確かめたのであるが、標高柱の附近にて、半坪許り試掘した形跡及び南側に三箇所 東側一箇所あるきりで、いづれも途中で放置して居り、後円部西面にて、不動尊を祀る祠堂の正面に羨道の口を開き 完全な石槨を持つ あるに及んで 一應この考を訂正して見たのである。

しかし、北嶺山頂墳《*大谷山22号墳》はすでに記した通り中央馬背の如き $\square$ 《*縄?》帯が若しこれをより広くし得る地形（即ち南嶺山頂墳《*大日山35号墳》の如き）に置かれたれば、あの形は當然、訂正されたであらうし、あの形を以て、前方後円といつたことに片づけてしまう Γ はどうかと思う。つまり、基本とな形がすでに山丘の自然にあつて、元々は二つの古墳を生前の所縁に依つてつないだと見る方が妥當であり、東稜下の両墳形を全く頂上墳に模して二つの古墳であつた Γ は発掘の跡を見れば分かる Γ であり、中央の基準となる前方後円形を築造の意識に再現しようとして潜在的なる型が、地方的な形、両墳結合の姿態をとつたと見るべきであらうし、これがこ

の一群でこれに見られる特異性でないかと思ふ。

要するに本古墳に於ても、私はこれを二つの古墳を結合した形を見たい。むかし盗掘を免れて現存する Γ は、あまりにも規模が大きすぎて、手におえなかつた等であり、若しこれを完全な一墳とするなれば、羨道は西面する Γ 、恐らく間違なからうと思ふ。かつて西和佐古墳開壘問題にからむ物議の渦中 田中敬忠氏らその保存を力説し、遂に署名運動となり、我々亦その一口《*壁?望?》となりて、保存し得た現状であることを思い、且つ、又この調査にあたつて、殆ど石槨をとどめない現状を見るに及んで、現状を保存する Γ が第一であり、學術調査の資料となる切口な詳細な $\square$ 研究と計画が必要であり、所定の手続を踏むべき Γ は云ふまでもない。

石槨の構造

羨道を西向73cmの羨道口を持つ、この部分は玄室の様に上部に幅をせばめていないが、玄室壁に接触するにしたがつて幅員を狭め、上部は四枚の板石で蓋して羨道間の石は2.34M以上の板石を以て玄室上部へ持送り式に積み重ねて行つたものである。

玄室は46号墳にみると同様の手法をみるものであつて（第Ⅲ図 Ⅳ図）に示す上方に幅員をせばめドーム型をとる Γ 、築造の天井石との関係もあることと思うが、大日山Ⅰ稜3号墳《*大谷山20号墳?》の如き、2.05Mの幅員を持つ Γ を思えば、単に石材の関係のみに帰結する Γ はできないのである。この点は朝鮮の埴築墳（忠南、公州宋山里古墳）などと構造技法に親近性を見るものである。他の古墳に於ても下に広く上部に狭める Γ は共通するところであるが、殊に西和佐古墳に於て一般的にこの傾向つよく、その極度に発展した形といふよりは、朝鮮古墳等の影響するところ別にこうした構築法の存在したと見るべきであつて、下底幅2.33mが約3mの高さの間に、上辺にてはその1/5の50cm～60cmにせばめている Γ は實に驚異すべき技術である こうした形が土圧に対しても強靱である Γ は本石槨に於て殆ど狂いをみせな

い7に於ても立証される。

更に彼等は構築にあたつての用意として、第Ⅲ図の如く奥壁に幅 40 cm 65 cm 厚さ 10 cm の石材を後壁両側壁の石組中に設計した7であり、同様の手法に依り 67 cm 幅のものを中央少々前方 1.86 m の高さに組み入れた7である。この技法は斉しく 46 号墳に於てもみるところ、一見して諒解する如く、側壁の土圧を支える為の用意に出来、且つ又副葬遺品を置く為の棚を意図した7も 46 号の場合に於て左様であり、本古墳に於ても又同様であつた7が想像される。更に又遺骸安置の位置を考うる時奥壁の二枚連続は恐らく、その下に頭部の来る7を予想した7と思はれ前方石梁は少し高く位置している7は一應 後方石梁に於て中央部を支えたに於て約 40 cm ばかり（全高さの 2/3 □）を支えているのであつて、勿論□□力學的な智識に出発したものでないにしても當然かくあるべき7の用意を直ちに諒解するものである。

尚側壁の傾斜を見るに 後部石梁のある 120 cm 高までは緩いカーブをとり石梁を架する為、第Ⅳ図示の様に石梁下部の壁面を突出せしめて安定を図り、その上辺急カーブにドーム状をなしている7も玄室内に一種の広さの感じと安定感を伴つてこれが彼等の意図を成功せしめている効果をも見のがす7が出来ない。

幅 2.33 m に於ては長さ 4.50 m、約 2 倍の長さを持つ、矩形の形態と 3 m の高さ及び屋状とも見らるべき形態が 照明さえ用意すれば すぐれた技術として先づ我々に迫るものであり、殊に羨道と玄室の接続面に於て上方に階段状に持ち送られた一枚石の連続の如き、西和佐古墳中秀作の一つである。

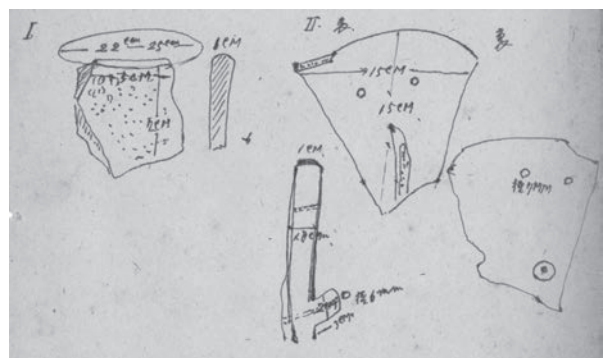
本石槨に於ては羨道と玄室の接触に左右 30 cm ばかりの相異があり、同様の7が関戸古墳に於て 20 cm（70 cm と 50 cm）のある7、及び箕島古墳に於てそうであり、殊に箕島古墳に於ては羨道中央より 1 直線に奥壁に至る高さ五寸ばかりの石を並べ その□《* 広？高？》き方に骨體を存していた事実は、本古墳の如き壁面の構築に於て且つ認められる7、不用意とのみ片付けられない。現在に於て、家屋

の入口、家屋に通ずる道の直通を忌む風習の如き古墳をして永遠の家とみる場合の門口に當ることを思へば これは一應考慮さるべき7と思う。

大日堂奥院として寺僧はこの古墳羨道上崖に不動尊、役行者像を祀り、その前に祠堂を建築したが、本年台風の為崩壊し 最近文化遺産好教材として附近学校の見学多く且つ、眺望よき遊園として徒歩口人の出入繁き為、床面の玉砂利は多く踏みつけられているが奥壁に近く小石が集積してをり、大きいもので 5 cm 位 普通 2 cm 位の海岸の玉石（白色）を使用している。この点第Ⅱ稜下方墳及び 46 号墳に川原石を使用したのと趣を異にし関戸古墳に類似している。

副葬遺品については今日全く伝えるところがない。明治 36 年海草郡長の発掘にひきつづき翌 37 年徳川頼倫公の発掘があり、その後地方的濫掘となつて、その際にこの古墳も発掘された様であるが、その間の事情今日一切不明であるのは惜しい。

墳丘上に埴輪の存在した7は、Ⅰ図△点に参考して置いたが、勿論小破片で位置の移動している7は云うまでもない。私は調査中、南辺下方に於て、稍偏つた 1 片を採集したから参考の為図示するが、全貌は不明である。又少々硬質にして灰色の焼成を有する朱褐色



【121 頁】

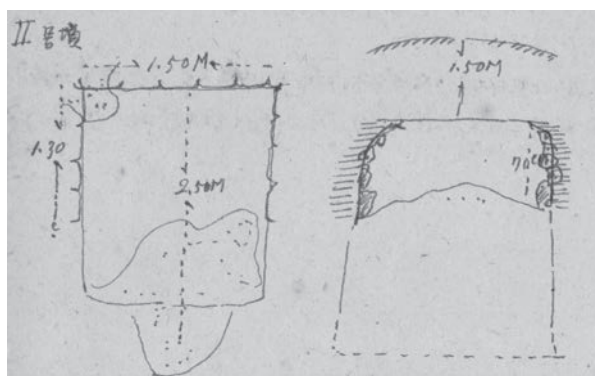
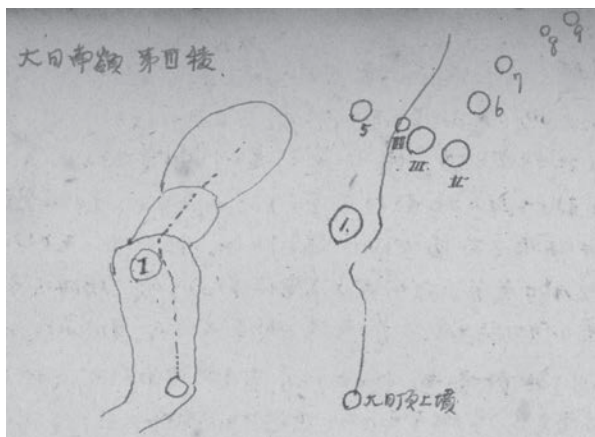
大日山頂上墳（俗称チャウス塚）《* 大日山 35 号墳》

この古墳も明治初年に発掘されたものである。現状に於て封土崩壊しているのは人為か自然か分らないが、羨道面から入っている7は明らかである。

勿論遺物其の他について伝えるところがない。

【87 頁】

大日南嶺第Ⅲ稜²⁾



頂上墳《*大日山 35 号墳》東下第Ⅰ号墳《*大日山 8 号墳》の東南下にあるⅢ墳の一つである。この附近眺望頗る佳い。殆んど埋没して々玄室上辺石積 7CM ばかりを残すのみである

上部湾曲 7CM 高さの間に底長 23CM の差異がある。ただしこの玄室は第Ⅱ稜中の上辺湾曲の例に徴すると壁面は急傾斜のものでないことが明らかである。奥壁石組は現在露出面に於て交互差入の手法を示している。

【88 頁】

※長尾上辺 W 墳調査中すでに夕陽大日山に没し更に頂上に向つて前山第 1 稜を麓より直上して山腹を巡る徑に達しこの徑にしたがつて面して第Ⅲ稜 1 号墳《*大日山 8 号墳》北斜面下に達し墳丘に登る。実にいい眺望である。

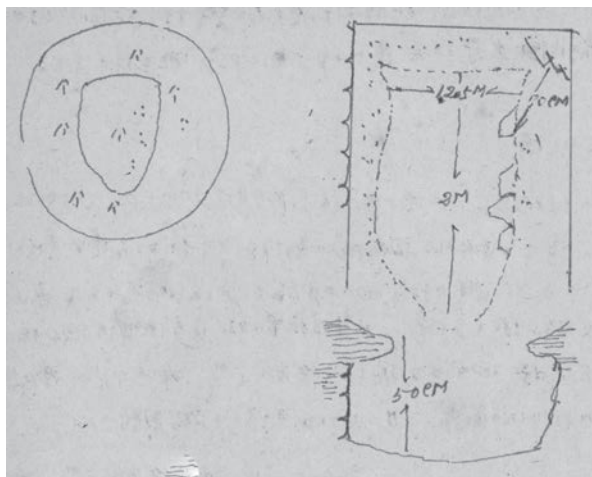
1 号墳《*大日山 8 号墳》は封土下深く、北面より玄室に下ることが出来るがすでに夕刻にてその内部は明瞭でない為次回に譲ることにした。但し、

一見したところ現在存在する石積は羨道であるか或は玄室の一部であるか判明しない。多少形に於て異形の様である。依つて第Ⅱ号墳《*大日山 3 号墳》を調査したのである。

【89 頁】

大日南嶺第Ⅲ稜

昭和 27. 1. 10 午後調査 午前中寒冷 午後稍緩み



Ⅲ号墳《*大日山 4 号墳》

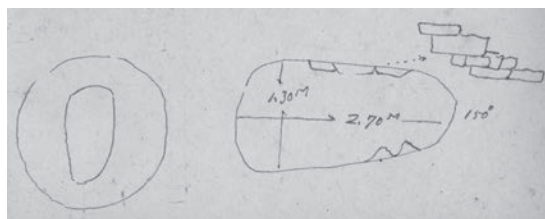
Ⅱ号墳《*大日山 3 号墳》に東接するⅡ号《*大日山 3 号墳》同大墳である。

一見玄室石積はない様であるが、封土が石槨の上にかぶさり玄室は上部よりの凹状以上に隠れていることは左壁に石積が比較的整然と残っているのでも分かる。

奥壁は上部の土が垂下している為不明である。奥壁右角は石組が乱れて存在するし、右壁上の土から石が兩三個露出しているが、勿論これは右壁の位置ではない。故、原形は玄室上辺に於いて 6.70CM を加ふべきである。

現状に於て石室大半を没している状態である。主軸 150°

Ⅳ号墳《*大日山 5 号墳》



【90 頁】

第Ⅲ号墳《*大日山 4 号墳》に東接少々低く位置する小墳である。石槨は右壁の一部残存、大半埋没。

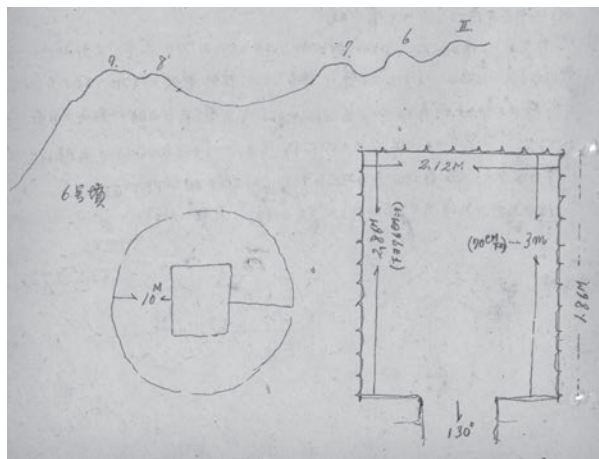
この小墳に接してⅡ号墳《*大日山 3 号墳》南面下山径が迫てをり 径を越えて第Ⅴ号墳《*大日山 7 号墳》となる。

第Ⅲ稜古墳も他と同様篠竹の間に埋没して灌木荊の密生する 7 同様であるがこの附近は稜線の山径に近接する為、篠竹の背丈低く且つ眺望強まる 7 同前。

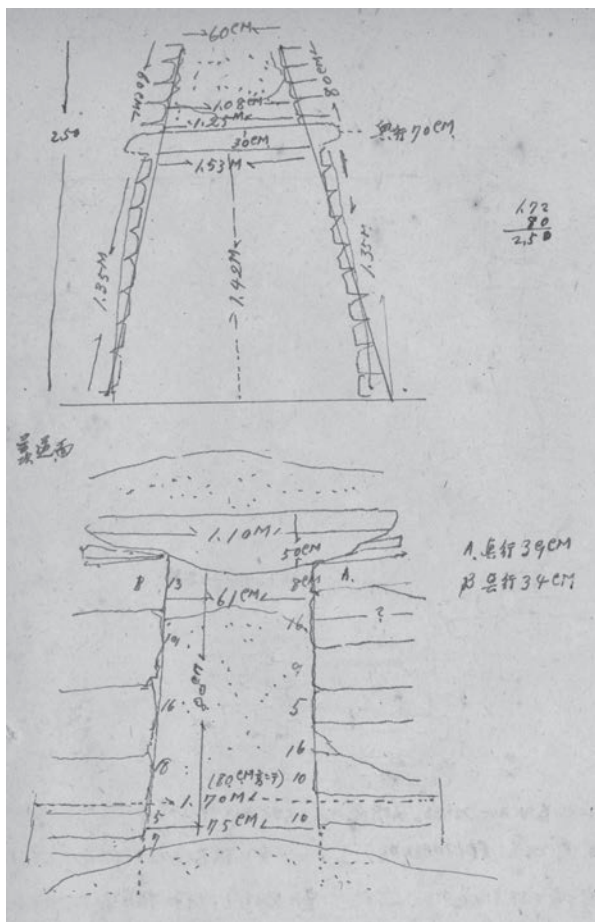
6 号墳－ 9 号墳《*大日山 2・67・1 号墳》

Ⅱ号墳《*大日山 3 号墳》より南に伸びる支脈四墳があり（6《*大日山 2 号墳》、7《*大日山 67 号墳》、8、9 号墳《*大日山 1 号墳》）7《*大日山 67 号墳》、8 号《*大日山 1 号墳》間に U 字形に降下した稜線が 8、9 号墳《*大日山 1 号墳》を南角として岡崎方面に急下する。この南にある古墳は南面に眺望を持ち 西南下に岡崎村小手穂、西の中間線を見通して、□《*東》安原村、□《*宮？》堰桑山方面を一眸に収め 現安原中学校を真正面に瞰望する位置にある。東斜面は浅き寄会の谷をなし現状に於て谷間は藪、西斜面は頂上 1 号墳《*大日山 35 号墳》南丘下の谷に落ち合い深く南に急降する。

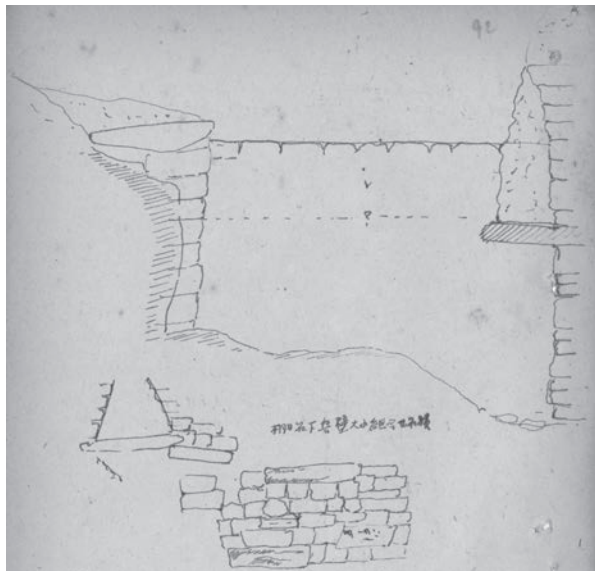
このあたり南に行くにしたがい篠 2M の深さとなり調査には頗る困難である。



【91 頁】



【92・93 頁】



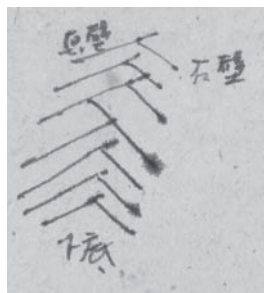
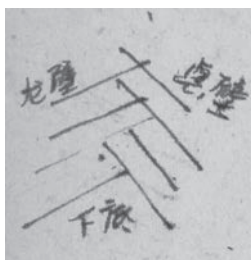
玄室の完全に保存された一つである。又構造に於て大きく且つ頂上墳第一号に見られる如き長尾第 8 号墳とは最も類似の形になる。羨道は完全に残存しているが現在は土充滿して蓋石下に空隙を

残すに過ぎない。上記二墳に見らるる、と同様棚石までのカーブ緩慢であるがそれ以上は急カーブをとり棚石上にも土充填し、急カーブの三角状石積は僅かにその面を露出するだけであるが既存上辺両壁の間隔は60CMにまでせばまり居るを見れば恐らくこれが原形に近く左右壁大部分は殆んどこの原形をとどめず羨道の高さに普通石槨に見る箱型をなしているが、これは発掘にあたつて、羨道面より行はれず、上蓋より行はれた為、その際大半は除去され現状の様相となった。及びその後多少積石に転用されるなど想像される。これは本墳の構造上特に惜むべきである。

棚石下石積に見る様に大小種々の石を適宜配置して壁面の堅牢を図り美的ならしめている点、及び棚石の左右即ち左右壁面に右壁に74CM、厚さ22CM左壁に1M厚さ14CMの板石を対象的に積む等、これは石槨築造者の一人なる及びその美的技術表現と見るべきもので当初に於て整正の槨室が想像されるが上辺を除去したため左壁は土圧に依中央部にはみ出している。

奥壁左右角石組は大抵は二三石毎に交互差入の手法をとる。

石組図



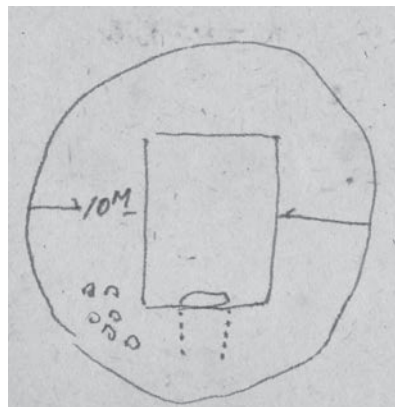
敷石は5CM～10CM大の灰色川原石を露出す
現状に於て奥壁下底は床面であるが明らかである。

この墳は南西より入れば、石室内に降りるが出来る。

封土は1.50Mを数える。南斜面約5M、この斜面に長さ1.30M巾70CMの青石板1個存。

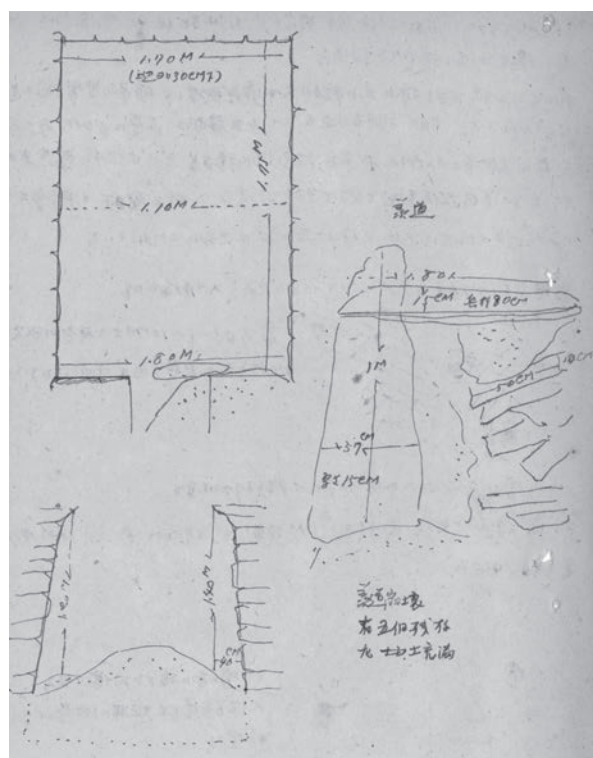
7号墳《*大日山67号墳》

6号墳《*大日山2号墳》の南に接する円墳である。



大体6号墳
《*大日山2号墳》とは規模に於て等しく
少しく低手に位置する。

【94頁】



【95頁】

石槨をほぼ残存する。壁面が一つの緩い上方蓋石下に於て湾曲する形であるが上辺残存の石に依り察知。石組粗面にして最大のものにて70CM厚さ14CM、半以上を没したるものである。

羨道面は破壊されているが一部石を残存し左右同様なれば羨道上辺にて6、70CM巾と推定される。現在羨道面に長さ1Mの石一個を立つ。或いは羨門の蓋石であつたかも知れない。羨道は西南向。玄室中比較的空白にて樟樹あり。

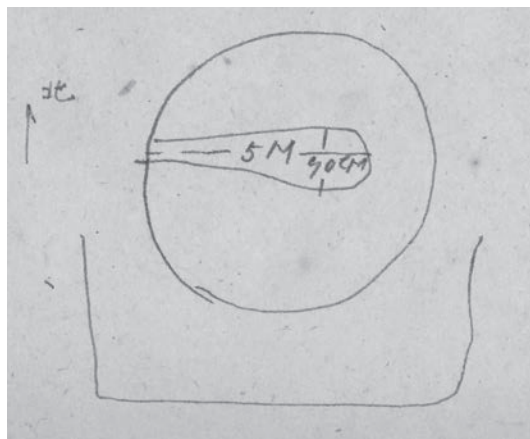
8号墳《*大日山1号墳》

附近篠密生 且つ2M許りにて身丈を没し、普通行くところでない。

この墳は9号墳《*大日山1号墳》下の小墳で経《*径》1M、深50CMの空《*穴?》を穿っているだけで玄室に達しているかどうか疑問である。

9号墳《*大日山1号墳》

調査に當つてこの墳に期待をかけていたのである。つまりⅢ稜南角の大墳如く思はれたが 東西に幅90CM長さ5M、深さ1.50Mの掘割があり一見して戦時中の壕であるに明らかなである。即ち南面して安原岡崎の方地に臨むが故である。石室の面影を認めない。南斜面下一段の方形をなし、下方上円的意思のあるに注意。

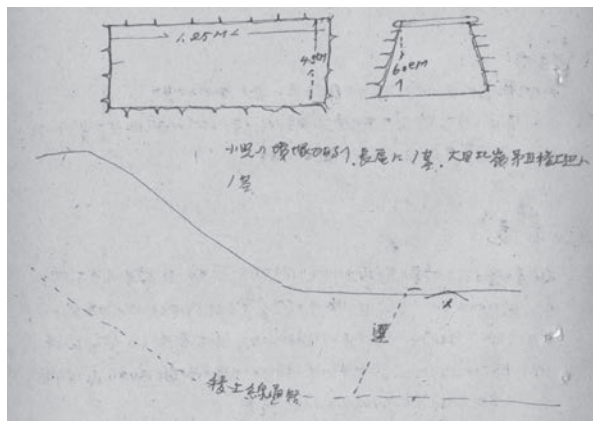


【96 頁】

10号墳（これは前山第Ⅰ稜に入ルべきか否か未定）《*大日山79号墳》五号墳《*大日山7号墳》東北斜面下に平坦の台地があり、一見人工のあとが窺はれこの稜線も大日北嶺頂上双塚の様に馬背状をなし、その上が山径となっている。

この徑からこの平坦部を見るに注意しなければ存在を逸するものであるが、反対に下方から登ると（即ち長尾谷中間より）この小墳に倒達し一見顕著である。

封土は現状に於て極めて低く 50CM
小児の墳塚であるに、長尾に1基、大日北嶺第Ⅲ稜上辺に1基。



2. まとめと考察

以上のように、本稿では、昭和26年（1951）12月～昭和27年（1952）1月に宮田啓二氏が大日山地区の大日山頂から北の大谷山に至る尾根、大日山頂から東の前山B地区に至る尾根について行った踏査の記録を書き起こした。ここでは当資料のなかでも、特に重要とみられる記載について検討しておきたい。なお、古墳の名称は現在の名称を用いている。

大日山67号墳 大日山67号墳は、現在、直径19mの円墳で、埋葬施設は玄室基部の一部石材の露出から、岩橋型横穴式石室であることが知られている（和歌山県教育委員会2019）。しかし、すでに盗掘が行われ、また、現在では土砂により石室の玄室前道及び羨道部分が埋没していること、これまでに発掘調査が行われていないことから、石室の詳細な構造等の情報は不明確であった。そのため、現在においても古墳の築造時期について明確な根拠をもって言及することが難しい。しかし、当資料93～95頁では、宮田氏の観察に基づき、大日山67号墳の横穴式石室の詳細な図面が提示されている。この図面によると、石室は玄室中央付近に羨道が取り付く両袖式であり、羨道の一部は破壊されているものの、右袖部は平積の1段1石積みであることがわかる。袖部上部には長さ1.8m、幅0.8m、厚さ0.15mの楕石が一石水平に架構されており、楕石より玄室前道・羨道側には高さ1m、幅0.57mの化粧石又は玄門扉石が一石縦置きされている状況が確認できる。玄室

前道の基石等不明確なことも多いが、これらの石室の特徴に鑑み、萩野谷正宏氏の岩橋型石室編年（萩野谷 2019・2021）に基づくと、大日山 67 号墳の横穴式石室は、6 世紀後半に築造されたものと推測される。

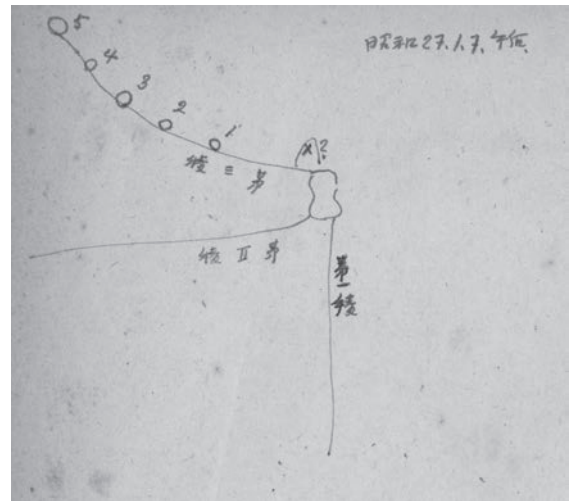
以上のように、当資料に基づいて、大日山 67 号墳の築造時期についてある程度時期を絞り込むことができた。これにより大日山頂から東の前山 B 地区に至る尾根及びさらに東南に延びる尾根上に分布する古墳については、大日山 79 号墳を除き、築造時期が絞り込めることから、古墳分布の展開についてまとめておきたい。大日山地区に分布する古墳は総数 59 基あり、このうち前方後円墳は大日山 35 号墳、大日山 1 号墳の 2 基のみで、その他 57 基は円墳とみられる。このうち、大日山頂から東の前山 B 地区に至る尾根及びさらに東南に延びる尾根上には古墳が 10 基あり、前方後円墳である大日山 1 号墳、円墳とみられる大日山 2～8・67・79 号墳がある。古墳の築造順は、まず大日山頂に首長墓である大日山 35 号墳が築造された 6 世紀前半に大日山 1 号墳が築造され、6 世紀後半になると大日山 1 号墳と大日山 35 号墳との間を埋めるように中小規模の大日山 2～8・67 号墳が築造されていった状況がみてとれる。こうした傾向は、岩橋千塚古墳群のうち、特に 6 世紀前半に首長墓が築造される大日山地区のほか大谷山地区でもみられ、山頂や尾根の比較的見晴らしの良好な平坦地に 6 世紀前半の古墳が築造されたのち、6 世紀後半には中小型古墳がその間を埋めるように築造される傾向を看取することができる。

岩橋千塚古墳群は総数 900 基にも及ぶ国内屈指の大規模群集墳である。しかし、早くから史跡、特別史跡と保護が図られてきたこともあり、古墳群を構成する各古墳の築造時期や構造、副葬品等について不明瞭なものも数多く存在し、古墳群の実態について不明確な部分がまだまだ多くある。こうした課題に迫るには、今回のような地道な古記録の検討等が不可欠であると考えられ、当資料を通して、今後も引き続き岩橋千塚古墳群の実態

を明らかにしていきたいと考えている。

【註】

- 1) 旧字やくずし字などで特に難しいものについては、現代の日本語との対応を示す。「ㇿ」は聞、「ㇿ」は事、「后」は後、「ㇿ」「ㇿ」はひらがなを繰り返すときに用いる記号「々」、「當」は「当」に対応する。
- 2) 当資料 133 頁にこれと異なる大日山南嶺第Ⅲ稜の古墳分布地図が記載されている。日付から、昭和 27 年 1 月 7 日午後に宮田氏が再度踏査した際の地図とみられるが、当資料にこの地図についての記載はなく、87 頁の地図との関係等詳細は不明である。



【参考文献】

- 石丸彩・金澤舞・瀬谷今日子・富永里菜・仲原知之 2021 「宮田啓二著『昭和二七年秋冬岩橋千塚古墳群 調』—花山地区編—」『紀伊風土記の丘 研究紀要』第 9 号 和歌山県立紀伊風土記の丘
- 石丸彩・金澤舞・瀬谷今日子・富永里菜・仲原知之 2022 「宮田啓二著『昭和二七年秋冬岩橋千塚古墳群 調』—大谷山地区編—」『紀伊風土記の丘 研究紀要』第 10 号 和歌山県立紀伊風土記の丘
- 萩野谷正宏 2019 「岩橋千塚古墳群における岩橋型石室の展開過程」『古代学研究』219 古代学研究会
- 萩野谷正宏 2021 「近畿の群集墳 2 紀伊地域」『群集墳研究の新視角』六一書房
- 和歌山県教育委員会 2019 『特別史跡 岩橋千塚古墳群保存活用計画』

紀北の岩橋型横穴式石室における埋葬行為 －棺体配置・屍床構造について－

上村 緑

はじめに

和歌山県北部（以下「紀北」、和歌山市・岩出市・紀の川市・橋本市・紀美野町）には、横穴式石室をもつ古墳が多く築造される。特に和歌山市に所在する岩橋千塚古墳群では、約 900 基の古墳が築造され、粘土槨、竪穴式石室、箱式石棺など多くの埋葬施設が用いられるが、なかでも横穴式石室は「岩橋型横穴式石室」として特異な構造を有することで著名である。岩橋型横穴式石室は岩橋千塚古墳群のみにとどまらず、その周辺地域の横穴式石室構造に大きな響を与えている。

また、岩橋千塚古墳群の石室の特徴は埋葬方法にもあり、その 1 つが埋葬時に木棺・石棺など密閉性の高い棺を用いない、いわゆる「開かれた棺」（和田 2003）を使用することである。

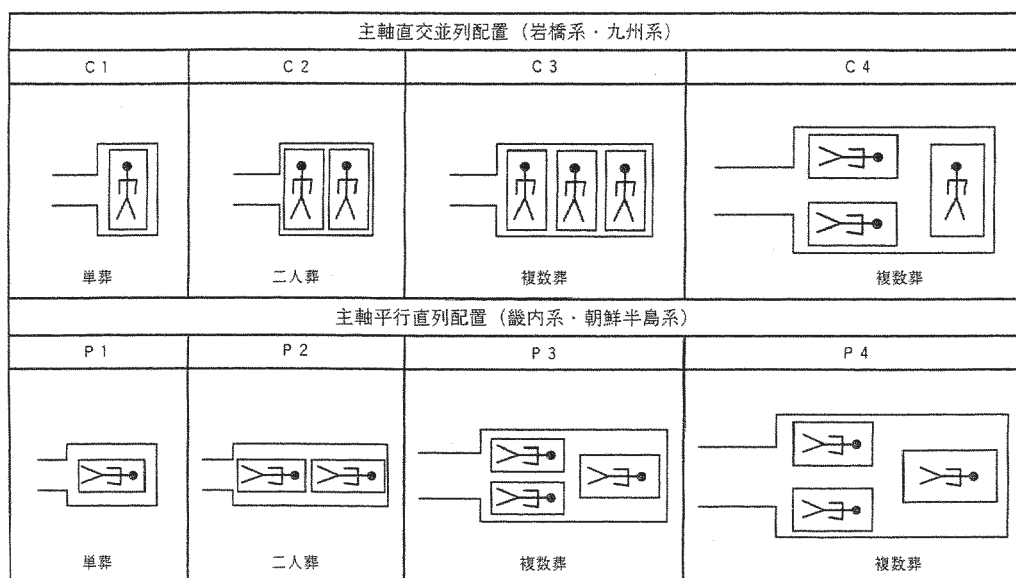
このような埋葬行為の特質については、岩橋千塚古墳群を対象として既に指摘がなされているが（黒石 1990、2005）、紀北一体に分布する岩橋型横穴式石室の状況について十分検討されてきたとはいえない。ここでは、岩橋型（岩橋系）横穴式石室の棺体配置¹⁾及び屍床構造について分類を

行い、より広域的な埋葬行為の共通性、差異を抽出したい。これにより岩橋型横穴式石室を構築した諸集団の関係性について埋葬行為のつながりから考えたい。

1. 紀北の岩橋型横穴式石室における棺体配置の類型と特徴

岩橋千塚古墳群における棺体配置については黒石哲夫による分析があるが（黒石 2005、第 1 図）、今一度紀北に分布する岩橋型横穴式石室の棺体配置について検討したい。

紀北の横穴式石室墳のなかで棺体配置の状況が判明するのは 25 例であるが（第 2 図、第 1 表）、検討の結果、すべて遺体は石室主軸に対して直交に配置されることが判明し、黒石による指摘を追認した。九州系横穴式石室を含めた複室構造の石室は、最も主要な被葬者を奥壁側に配置することが指摘されており（中里 2022）、岩橋型横穴式石室における遺体の玄室主軸直交配置は、こうした観念の延長でとらえられよう。また、すべての事例で玄室主軸直交配置が採用されていることか



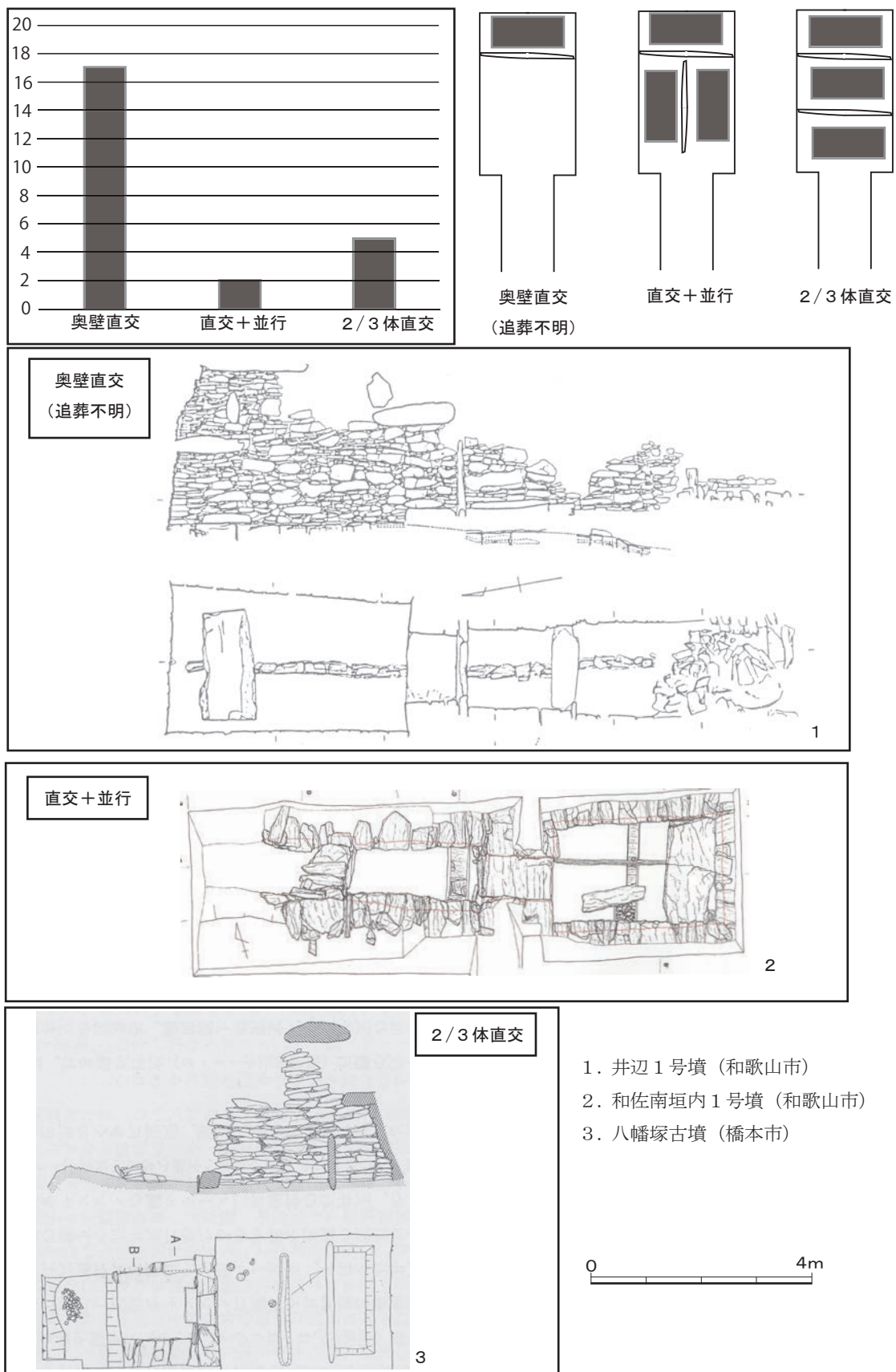
第1図 遺体配置原理と横穴式石室平面形態の関係（黒石 2005）



第2図 対象資料分布図

第1表 対象資料一覧

	古墳名	所在地	墳形 (m)	型	年代	玄室長 (m)	玄室幅 (m)	羨道長 (m)	羨道幅 (m)	構造		棺体配置			備考
										床石・台あり	床石なし	奥壁直交	直交+並行	3体直交	
1	市脇東膳那1号墳	橋本市	円(10)	岩橋系?	TK43					○	○			○	
2	八幡塚古墳	紀の川市	円(20)	岩橋型	TK209	3.3	2.6	(3.3)	1.2		○			○	
3	船戸箱山古墳 5号石室	岩出市	方(21×17)	岩橋型	TK43	3.8	2.0	(1.8)	2.2	○		○			
4-1	船戸山 2号墳		円(14)	岩橋型		3.0	1.8			○	○			○	
4-2	船戸山 3号墳 2号石室		円(14)	岩橋型	TK43	2.9	2.0	1.7	0.9	○		○			
5	和佐 7号墳		円(15)	岩橋型		2.5	2.0	(2.5)	1.3		○	○			
6	和佐南垣内 1号墳	和歌山市	円(24)	岩橋型	TK43	3.0	2.0	5.1	1.2	○	○		○		
7	山東22号墳		円(27)	岩橋型	TK43	4.2	2.4	(4.2)	1.0	○			○		
8-1	大谷山28号墳		方円(27)	岩橋型	TK47	2.9	2.1	2.5	1.1		○			○	
8-2	大日山61号墳		円(8)	岩橋型?		2.0	1.4	(0.6)	0.6	箱式石棺?		○			
9-1	前山A23号墳		円(13)	岩橋型		2.0	1.8	2.9	0.8	○		○			礫敷
9-2	前山A32号墳		円(14)	岩橋型		2.3	1.8	2.2	0.7	○		○			
9-3	前山A58号墳		方円(20)	岩橋型	MT15	2.6	1.8	(2.2)	0.9		○			○	
9-4	前山A67号墳		円(27)	岩橋型		3.6	2.4	3.2	1.0	○		○			
10-1	知事塚古墳(前山B67)		方円(31)	岩橋型		2.0	1.6	1.6	0.6		○	○			
10-2	前山B103号墳		円(13)	岩橋型		2.1	1.4	0.7	0.7	○		○			
10-3	前山B110号墳		円(14)	岩橋型		2.2	1.6	0.9	0.8	○		○			
11	井辺 1号墳		方(28×40)	岩橋型	TK209	4.4	2.6	5.3	1.7	○		○?			
12	明楽 5号墳		円(15)	岩橋系	TK209	3.2	2.0	3.2	1.4		○	○			
13	伊太祁曾神社 1号墳		円(16)	岩橋型	TK43	2.8	2.1	2.7	0.8	○		○			
14	鳴滝 1号墳		円(20)	岩橋系	TK43	3.5	2.5	5.1	1.4	○		○			
15	西庄 4号墳	海南市	円(13)	岩橋系	TK43	2.1	1.5	3.5	0.7	○	○	○			13体の追葬
16	小倉 8号墳		円(15)	岩橋型						○		○			
17	女良 1号墳		円(15)	岩橋系	TK209	3.4	2.1	2.3	1.6	木棺		○			
18	山崎山 1号墳		円(16)	岩橋型	TK209	3.0	1.8	2.4	-	○		○			礫敷



第3図 棺体配置の分類と主要な例

ら、岩橋型横穴式石室において遺体の玄室主軸直交配置は最も強固な規範であったことがうかがえる。

一方で、玄室主軸直交の遺体配置を原則としながらもいくつかのパターンが存在している（第3図）。

①主軸直交 最も奥壁側の埋葬を玄室主軸直交に配置するタイプであり、追葬の有無が不明である。（例：井辺1号墳（和歌山市）、船戸山3号墳2号石室（岩出市））

②直交＋並行 最も奥壁側の埋葬を玄室主軸直交に配置し、他の埋葬を玄室主軸並行に配置するタイプである。事例数は2例である。（例：和佐南垣内1号墳（和歌山市）、山東22号墳（和歌山市））

③2/3体直交 2体あるいは3体の埋葬をすべて玄室主軸直交に配置するタイプである。事例数は5例である。（八幡塚古墳（橋本市）、大谷山28号墳（和歌山市））

玄室直交タイプは現在追葬が確認されていないため、追葬がある場合、これらは直交＋並行対応または2/3体直交タイプのいずれかに分類可能と予想される。このため、後者の2タイプは現状より事例数が多かったものと考えられる。

こうした棺体配置の差異は、各タイプの事例数が少なく検討が困難であるが、石室構造や後述する屍床構造などの類型とは相関関係を見いだすことはできない。このため、棺体配置の規範は、ハード面の規範とは別個に規定されていたものと考えられる。

2. 紀北の岩橋型横穴式石室における屍床構造の類型と特徴

先述したように、岩橋型横穴式石室では棺を使用せず、屍床を設けて遺体を配置したり、仕切石により区画した床面に遺体を配置する場合が多い²⁾。こうしたいわゆる「開かれた棺」（和田2003）は、岩橋型横穴式石室の特徴として挙げられる。しかし、一口に屍床構造といっても様々な形態が存在することがわかる。

紀北の岩橋型横穴式石室において採用される屍床構造のタイプは、大きく以下の3つに分類できる（第4図）。

①床石・棺台など床構造をもつタイプ。（例：船戸箱山古墳5号石室（岩出市）、鳴滝1号墳（和歌山市））

②床石等をもたないタイプ（仕切石）。（例：和佐7号墳（和歌山市））

③床構造をもつタイプとともたないタイプの併存。（例：船戸山2号墳（岩出市））

それぞれ①が13例、②が6例、③が4例であり、床構造をもつタイプが最も多い。なかには、箱式石棺や木棺を用いる事例もあるが、非常に特殊である。

また、特に床構造をもつタイプにおいて、構造が多様であることも特徴として挙げられる（第5図）。具体的には、①遺体の四周に板石を巡らせる。（例：船戸箱山古墳5号石室（岩出市）、前山A67号墳（和歌山市））

②奥壁側にのみ仕切石を設置する。（例：和佐7号墳（和歌山市）、知事塚古墳後円部石室（和歌山市））

③支石を用いて床石を若干床面から離す。（伊太祁曾神社1号墳（和歌山市）、井辺1号墳（和歌山市））

④礫床を使用する。（前山A23号墳（和歌山市）、山崎山1号墳（海南市））

これらの屍床構造は、棺体配置と同様、石室構造など他の要素と相関関係を見いだすことはできない³⁾。屍床構造についても、石室構造の規範とは別個に規定されていたものと考えられる。

おわりに

ここまで、岩橋千塚古墳群をはじめとした紀北に分布する岩橋型横穴式石室の棺体配置および屍床構造について分類を行い、その様相を整理した。その結果、棺体配置についてはすべて遺体を玄室主軸に対して直交に配置すること、追葬が行われる場合、玄室主軸直交配置と主軸並行配置を併用する事例と、すべて玄室主軸直交に配置する事例

があることを確認した。これら棺体配置の差異は、石室構造の類型との相関関係を見いだすことはできない。

また、屍床構造については、まず床面構造の分類として、床石をもつ事例、もたない事例、床石をもつタイプともたないタイプを併用する事例の3種類があり、床石をもつ事例が最も主流であることが確認できた。さらに、床石をもつ事例はその構造が多様であることも指摘した。屍床構造のバリエーションは、棺体配置と同様に石室構造との相関関係を見いだすことはできず、また棺体配置の分類とも有機的な連関は確認できなかった。

ここから、紀北の岩橋型横穴式石室においては、①遺体を玄室主軸直交に配置すること、②屍床を使用することの2点が、埋葬における最も重要な規範であり、追葬を含めたそのほかの遺体の配置や、屍床の構造は規定されていなかったと考えられる。岩橋型横穴式石室は、畿内地域の周辺でありながら畿内型横穴式石室とは全く異なる石室構造・葬法を採用することから、築造集団内の強固な規制の存在が推定されている（黒石 2005）。一方で、埋葬原理をみてみると、遺体の玄室主軸直交配置と屍床の利用という規範は岩橋型横穴式石室において強固に貫徹されているものの、微視的に見ればいくつかの差異も存在している。従って、埋葬原理における強固な規範の中に、比較的自由に選択可能な、ゆるやかな規範が存在していたことが推測される。

本稿では、紀北の岩橋型横穴式石室における埋葬行為について、棺体配置と屍床構造に着目して若干の考察を行った。今後は紀中・紀南地域の岩橋型・岩橋系横穴式石室や、地域の横穴式石室における埋葬行為の特徴について検討が必要である。さらに、遺体の配置に加え、土器儀礼の様相（仲辻 2018）などについても考察を加える必要がある。

【註】

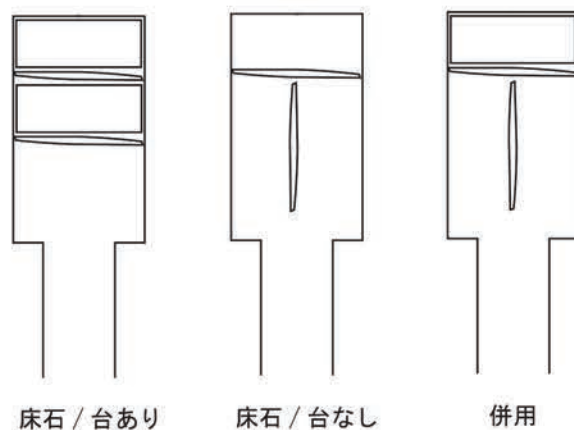
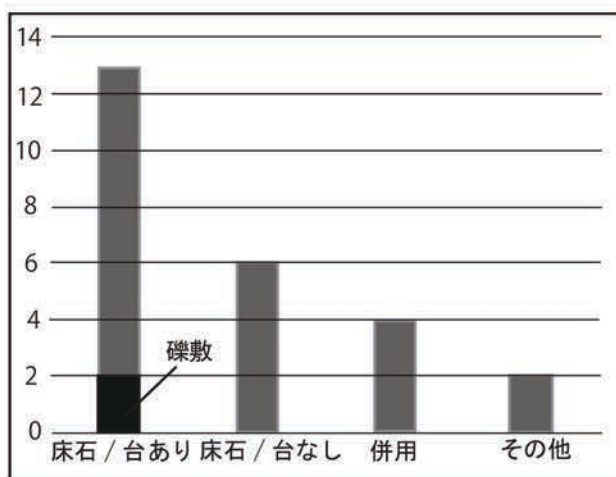
- 1) 棺体配置とは棺及び遺体の配置方法をであり、基本的に木棺・石棺を用いない岩橋型横穴式石室では「遺体配置」

とするのがより正確である。しかし、箱式石棺状の構造を有する事例もあることから、本稿では棺体配置の呼称を用いる。

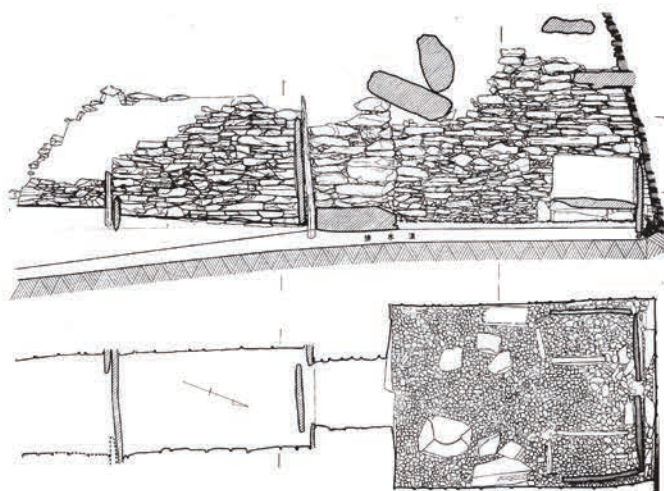
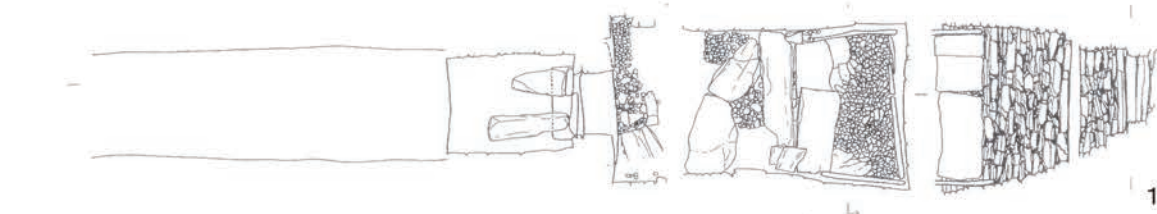
- 2) 屍床と仕切石は峻別が難しい事例もあるため、本稿では両者の構造を一括して「屍床構造」としている。
- 3) ただし、③については石室規模や副葬品の内容が他の古墳より卓越する事例も含まれていることから、より上位階層の古墳に採用された可能性がある。

【参考文献】

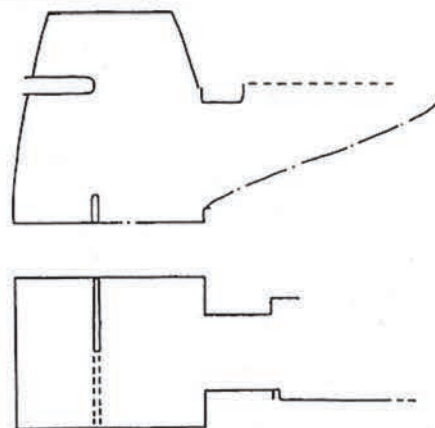
- 打田町 1981『打田町史』史料編 I
- 関西大学考古学研究室 1967『岩橋千塚』
- 黒石哲夫 1990『近畿の横穴式石室論・和歌山』『横穴式石室を考える』帝塚山考古学研究所
- 黒石哲夫 2005「紀伊における後期古墳時代の集団関係―岩橋系横穴式石室の展開を中心として―」『待兼山考古学論集―都出比呂志先生退任記念―』大阪大学考古学研究室
- 中里伸明 2022「九州系横穴式石室」『季刊考古学』160 雄山閣
- 仲辻慧大 2018「紀伊地域の古墳における土器使用儀礼について」『待兼山考古学論集』Ⅲ 大阪大学考古学研究室
- 吉田宣男 1979「船戸山古墳群における多葬について」『和歌山の研究』第1巻
- 和田晴吾 2003「棺の古墳祭祀（2）―閉ざされた棺と開かれた棺―」『立命館大学考古学論集』Ⅲ 立命館大学考古学論集刊行会
- 和歌山県 1921『和歌山県史蹟調査報告』第一
- 和歌山県教育委員会 1967『和歌山県文化財学術調査報告』第2冊
- 和歌山県教育委員会 1978『山崎山古墳群緊急発掘調査報告書』
- 和歌山市教育委員会 2005『和歌山市内遺跡発掘調査概報―平成15年度― 和佐南垣内古墳群発掘調査』



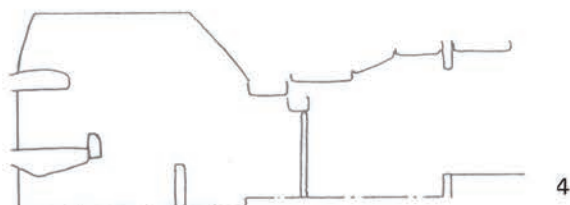
床石 / 台あり



床石 / 台なし



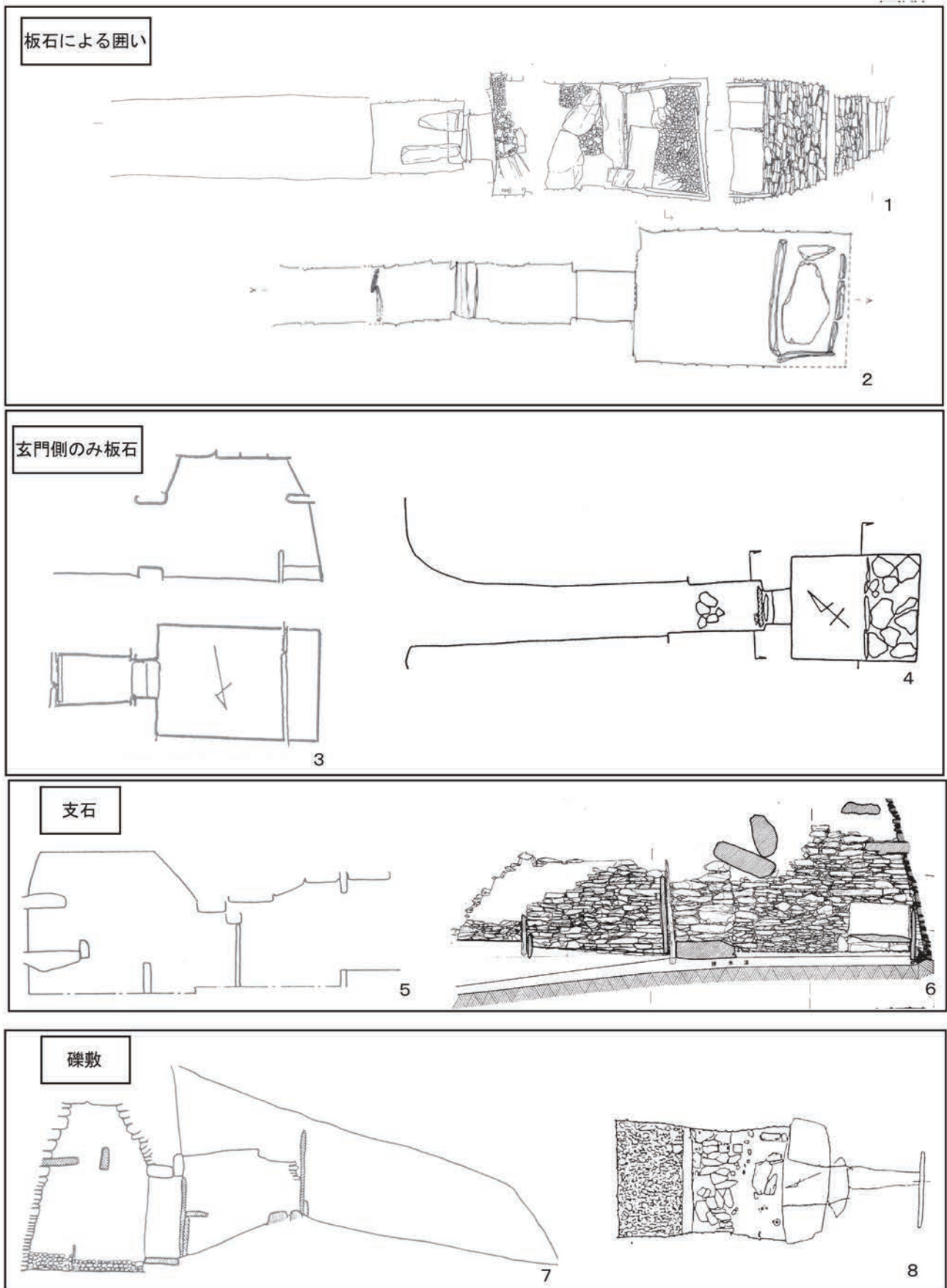
併用



1. 船戸箱山古墳5号石室 (岩出市)
2. 鳴滝1号墳 (和歌山市)
3. 和佐7号墳 (和歌山市)
4. 船戸山2号墳 (岩出市)

0 4m

第4図 埋葬空間構造の分類と主要な例



第5図 屍床構造の分類

湯浅町天神山古墳の研究 －巽三郎氏収集資料と関連資料から－

田中元浩・中原七菜子

はじめに－研究の経緯と資料の状況－

湯浅町大字別所字天神前に存在した天神山古墳（湯浅町）¹⁾は、現在は土取りにより消滅している（第1図）。しかしながら、推定される古墳の規模は直径約30mと、紀中地域における最大規模の円墳と目される。また、円筒埴輪列とともに大刀形埴輪等の多様な形象埴輪をもつことが判明しており（河内2015等）、出土遺物の研究からも当地域における有力古墳として位置づけられる。

当館では、令和3年度冬期企画展「紀北の古墳群／紀中・紀南の単独墳－箱式石棺からみた紀伊の古墳－」において、天神山古墳の出土遺物として当館が所蔵する巽三郎氏収集資料と湯浅町教育委員会が所蔵する組合式石棺を展示した。この展示では、初めて当古墳の組合式石棺材を展示するとともに、その年代決定の手がかりとなる土器、そして副葬品の玉類の存在が明らかになった。

巽三郎氏収集資料は令和元年9月13日に、巽淳一郎氏より当館へ寄贈依頼があり、当館で令和元年12月25日付け紀風第12250002号により

受領し、収蔵している²⁾。本資料については巽氏の資料紹介時にも記述がある資料であり（巽1962）、墳頂の埋葬施設周辺で採集された資料とみられることから、当古墳の編年的な位置づけを示す資料であるといえる。そこで本稿では、当館所蔵の巽三郎氏収集資料である天神山古墳出土資料と関連する組合式石棺について図化成果を公開することで、紀中地域の有力古墳について新たな知見を提供することにした。

1. 天神山古墳の研究史

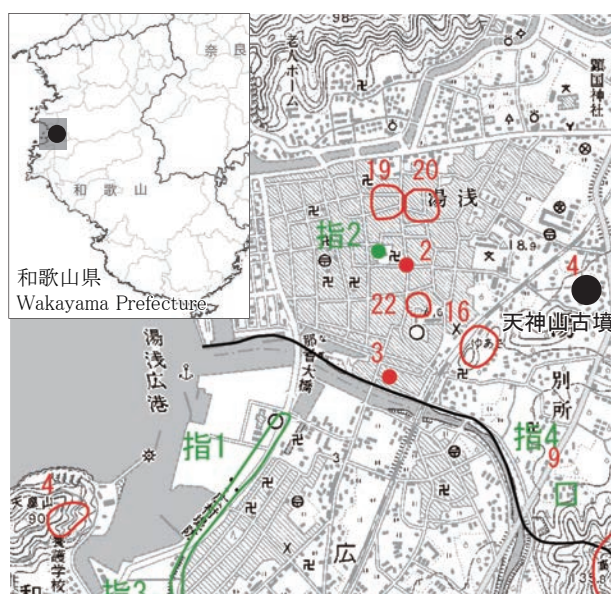
当古墳の出土遺物については、当館が所蔵する伊勢田進氏収集資料や巽三郎氏収集資料、湯浅町教育委員会所蔵資料、東京国立博物館所蔵資料（東京国立博物館1994）があり、出土遺物の来歴や収集時期も様々である。また、資料の紹介や研究は、『湯浅町郷土誌』による発見記録をはじめとし（湯浅町役場1915）、出土埴輪については巽氏による形象埴輪の紹介や（巽1962）、河内一浩氏らによる当館所蔵の伊勢田進氏収集資料や湯浅町教育委員会所蔵資料に関する調査研究がある（菊井他2002、河内2015）。そこで、当古墳の来歴等について整理し、研究史としたい（第1表）。

（1）明治期以前

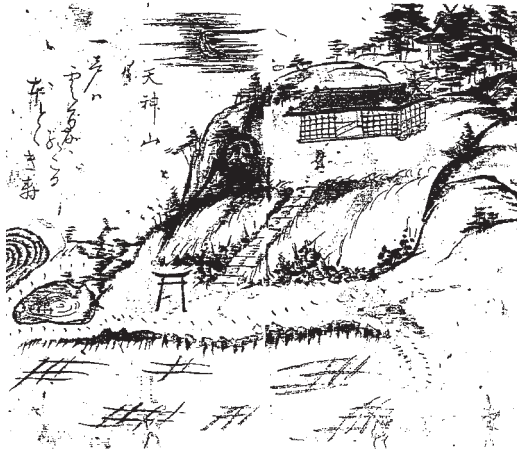
天神山古墳については、湯浅町の郷土史家である和田堅一氏が紹介した『椰野十二景』（作者・年代不詳）「天神山」にその状況が描かれている（和田1998、第2図）。標高約20mの天神山の丘陵頂部には北向きに社殿と拝殿が建てられ、拝殿の南東と社殿後方に高まりが確認される。和田氏の想定によると社殿後方の高まりが丘陵の最高所であり、埋葬施設の発見地として推定される。

（2）明治期の発見

天神山古墳は、明治32年（1899）5月2日に発見された。東京国立博物館所蔵の『埋蔵物録』



第1図 天神山古墳の位置
(S=1/25,000、和歌山県教育委員会2007より)



第2図 柳野十二景に描かれた天神山（和田 1998 より）

に記載があり、既に河内氏によって詳細が紹介されている（河内 2015）。改めて、原本からその内容を紹介しますと、「天神社殿修繕工事に要する土砂を採掘中、同所地面より二尺余の地下に於て石櫃様のものを掘出し、内に土器一個の納めあるを発見し」とある（東京帝室博物館 1900）。石櫃は本稿で紹介する組合式石棺（以下、「組合式石棺 1」とする。写真 1-1）であり、土器は東京国立博物館に所蔵されている装飾付壺である（東京国立博物館 1994）。記録からは地上から約 60 cm 下に組

合式石棺 1 があり、そこから装飾付壺が出土したことが判明する。また、「石櫃の所在より更に一尺余の地下に於て鉄製にして銃砲の如きものを発見せし」とあり、取り上げ時に崩壊したが、棺外から鉄製品が出土したこともわかる。『埋蔵物録』には、組合式石棺 1 の模式図と寸法が掲載されており、「第 1 号（底石）を下部に敷き第 2 号（側石）を左右に建て第 4 号（小口）を其の片端に置き第 3 号（蓋石）を上部の蓋石と為し一の長き櫃形に造りたるものなり」という説明がある。この説明から側壁は底石の上に立て、小口は側石よりも幅が広いので底石の横に立てられ、これらの上に蓋石を置いたのだろう。なお、瓦焼製される土製の小口材は土器とともに提出されたが、現存しない。

さらに、1 箇月後の 7 月 1 日には、土砂の中から折れた刀剣とみられる鉄片 3 片と土師器、須恵器壺の大小 8 点の破片が出土したという記録がある（東京帝室博物館 1901、和田 1998）。

（3）大正期の伝聞

また、大正 15 年（1915）段階までにも他の遺物の出土が知られており、『湯浅町郷土誌』には

第1表 湯浅天神山古墳に関わる記録

日付	調査・出来事	出土資料	現存資料	文献
明治期以前	天神山に本殿及び拝殿が築かれる。			『柳野十二景』天神山 7) 和田 1998
明治 32 年（1899）	5 月 2 日 湯浅天神山古墳埋葬施設の組合式石棺を発掘。「天神社修繕工事に伴い社殿後方の丘陵から土砂採取掘削中に石櫃様なるものを発見。」	土器 1（装飾付壺）、石櫃（石棺）底石 1、蓋石 1、側石 2、小口（瓦焼成）1、鉄製品（刀剣か）	・装飾付壺（東博） ・組合式石棺 1（湯浅町教委・坂部池）	10) M33,6 報告 埋蔵物録 11) M34,6 領収 埋蔵物録 6) 東京国立博物館 1994
明治 33 年（1900）	7 月 1 日 前年発掘された土砂の中からさらに遺物を発見。	鉄塊 3（刀剣の折れたもの）、陶器の破片 4		10) M33,7 月報告 埋蔵物録
大正 15 年（1915）まで	大雨の後、副葬品を発見、埴輪は墳丘を取り巻いて三段に並ぶ。	勾玉、金環、管玉、円筒埴輪・人物・家形埴輪		2) 湯浅町役場 1915
昭和 12 年（1937）	11 月 9 日 湯浅町山下氏からの問い合わせに対し、帝室博物館返答 小埴付脚付埴（装飾付壺）1 個、小口板はない。			12) S12,11 埋蔵物録報告 6) 和田 1998
昭和 29 年（1954）	巽三郎氏現地踏査。墳丘中心より東に結晶片岩板石露出（組合せ式石棺）、高坏・坏の破片、ガラス製白玉散乱。墳丘 2 段目、3 段目に円筒埴輪列。	高坏・坏の破片、ガラス製白玉、緑泥（結晶）片、岩板石、円筒埴輪、家形・蓋形・人物形・大刀形・石見型・不明埴輪	・須恵器高坏・坏・壺、ガラス製小玉・粟玉、管玉、形象・器財埴輪（当館） ・組合式石棺 2（顯國神社） ・円筒埴輪、形象埴輪（湯浅町教委）	3) 巽 1962 8) 菊井ほか 2002 9) 河内 2015
昭和 32 年（1957）	6 月 湯浅保健所竣工。			
昭和 33 年（1958）	4 月 県営アパート竣工。			
昭和 35 年（1960）	3 月 天神山忠魂碑、顯國神社へ移転、その後、天神山は土取りにより消滅、現在の宅地に。石棺材の移動。		・組合式石棺 1・2（湯浅町教委・坂部池・顯國神社）	7) 和田 1998
昭和 38 年（1963）	3 月 坂部池に前川仙吉之碑建立（石棺材蓋石を利用）。		・組合式石棺 1（坂部池）	
昭和 40 年（1965）頃	勝楽寺参道口溝川に石棺材（底石、側石）が橋として架けられていた。		・組合式石棺 1（湯浅町教委）	7) 和田 1998
昭和 58 年（1983）まで	所在不明の遺物として紹介。	勾玉、管玉、小玉、直刀、金環、銅釧		5) 和歌山県史編さん委員会 1983



1：湯浅町旧中央公民館に保管されていた組合式石棺 1
2：坂部池にある組合式石棺 1 の蓋石
3：顯國神社にある組合式石棺 2 の石材 4：現在の天神山

写真1 天神山古墳関連写真

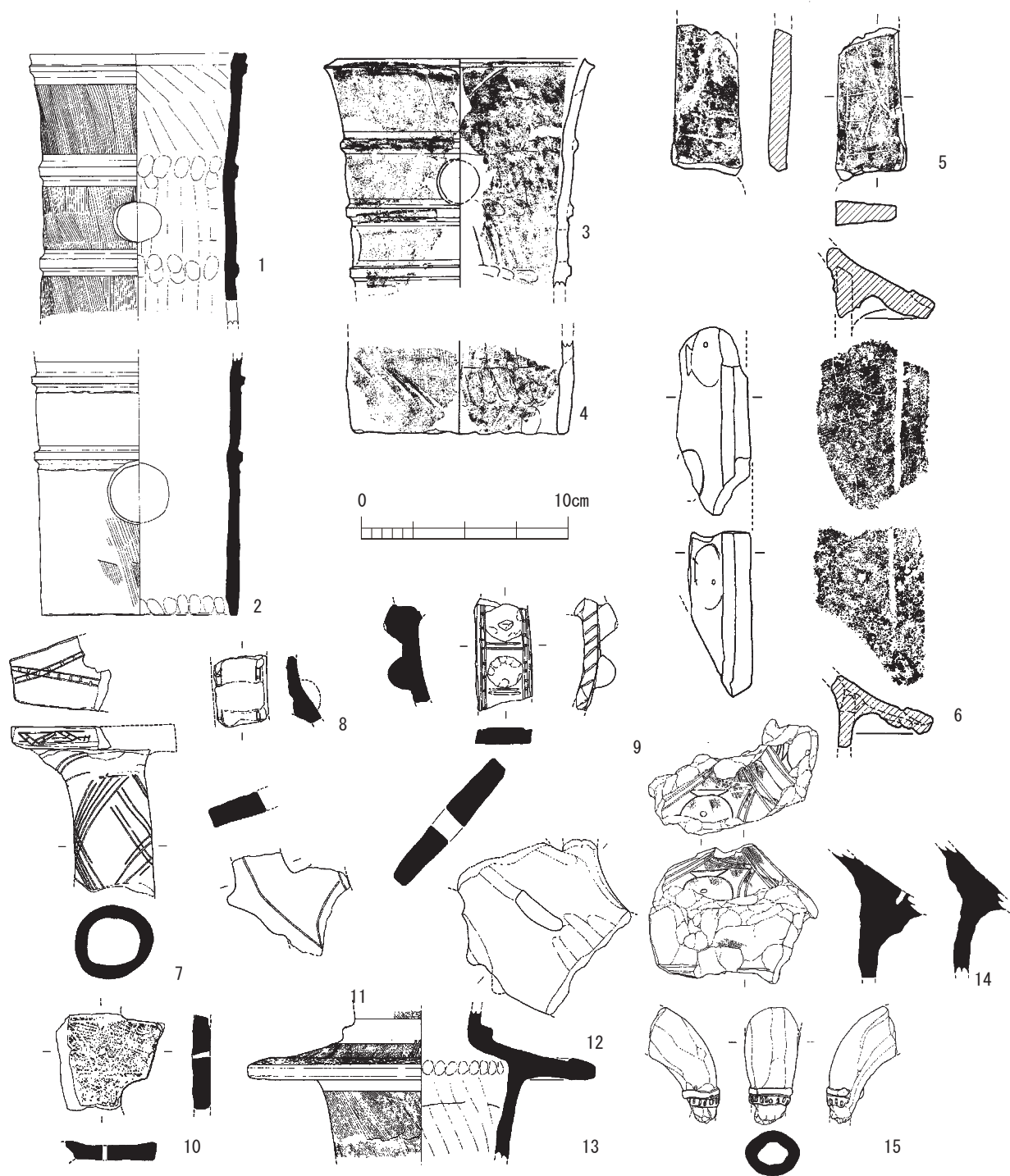
大雨の後、副葬品を発見したことが記される（湯浅町役場 1915）。埴輪は円筒埴輪の他、形象埴輪の出土も認められる。また、『和歌山県史』には、これ以外に鉄刀、銅釧が出土したという記録もある（和歌山県史編さん委員会 1983）。以上の資料は現存していない。

（４）昭和期の踏査と古墳の消滅

昭和期には、県営アパートや湯浅保健所、宅地造成のために天神山での土取りが行われる。昭和 29 年（1954）年には、巽氏が当古墳の現地踏査を行い、こうした古墳の現状を目の当たりにする（巽 1962）。巽氏は「墳丘中心よりわずか東寄りの処に板状の緑泥片岩が露出し、小砂利に混在して、高坏・坏の破片・ガラス製白玉が散乱していた」としている。これらの土器、玉類については本稿で紹介する資料であり、この段階に採集されたとみられる。当古墳から出土したとされる組合式石棺については、明治期に発掘された組合式石棺 1 以外にも、顯國神社に存在する結晶片岩製の組合式石棺材が存在する。組合式石棺（以下、「組

合式石棺 2」とする。（写真 1-3）がもう 1 基存在しており、巽氏の踏査段階では露出していたとの記述がある。さらにこの踏査では、墳丘の 2 段目と 3 段目に円筒埴輪が配列されていることが確認されている。

その後、当古墳の土取りは進み、昭和 35 年（1960）3 月には、天神山の丘陵頂部にあった忠魂碑が顯國神社境内へ移転する。この時には墳丘は削られていたようであり、組合式石棺 2 も発掘されたとみられる。そして、当古墳は土取りにより消滅し、現在の宅地となる（写真 1-4）。当時の姿をとどめるものは「天神山」・「天神」の地名と東の墓地のみである。昭和 38 年（1960）3 月には、坂部池畔（有田川町）に組合式石棺 1 の蓋石を利用した石碑が建立される（写真 1-2）。また、昭和 40 年頃には、その他の底石、側石についても勝楽寺参道口の溝川とその東 100 m の場所に石橋として用いられていた（和田 1998）。この頃には、明治期に発掘された組合式石棺 1 の石材も運び出されたとみられる。

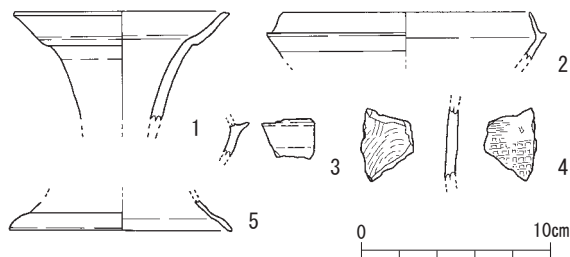


1～4：円筒埴輪、5：器財埴輪、6：家形埴輪、7～9：大刀形埴輪、10：石見型埴輪、11～13：蓋形埴輪、14・15：人物形埴輪
第3図 天神山古墳出土埴輪 (S=1/8、菊井ほか 2002、河内 2015 より)

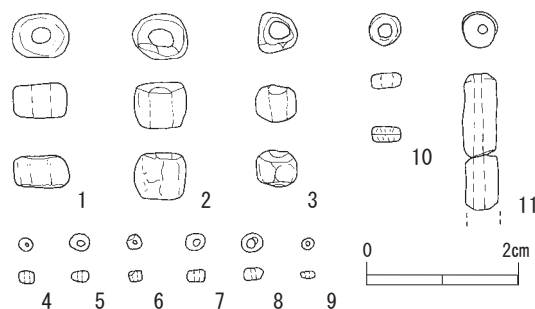
(5) 埴輪の調査研究

その後、河内氏らによって当古墳出土埴輪について調査研究が行われる（菊井他 2002、河内 2015、第 3 図）。当館が所蔵する伊勢田進氏収集資料や湯浅町教育委員会所蔵資料が報告されており、その成果は以下のとおりである。①円筒埴輪は古墳時代後期のもので畿内系であり、底部高が

高いものや口縁部に突帯を巡らせており地域性が存在する。②形象埴輪は、家形埴輪、蓋形埴輪、人物形埴輪、大刀形埴輪、石見型埴輪等が存在する。③大刀形埴輪は当古墳以外では、岩橋千塚古墳群の首長墓である大日山 35 号墳、大谷山 22 号墳や、それに次ぐ規模の古墳である大日山 1 号墳に類例がある（河内 2017）。④家形埴輪は帆



第4図 天神山古墳出土土器 (S=1/4)



第5図 天神山古墳出土玉類 (S=1/1)



写真2 天神山古墳出土土器

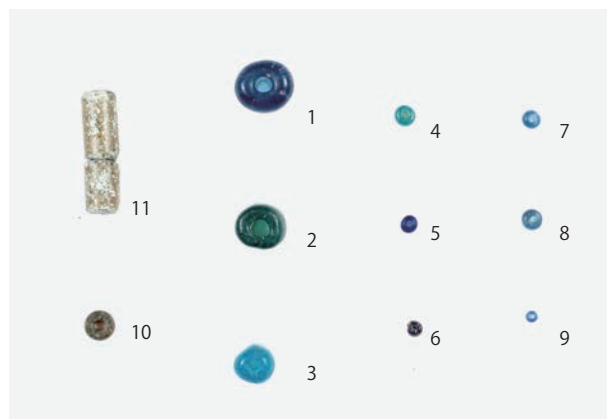


写真3 天神山古墳出土玉類

立貝のような線刻を施すものがあり、花山2号墳出土例と類似する。⑤埴輪の編年の位置づけは、6世紀前半(TK10型式期)のものである(河内2015)。

以上のように、当古墳は既に古墳や出土資料の一部が失われているが、採集された埴輪から古墳の年代や評価がなされている。その点で出土土器や玉類、組合式石棺の資料を提示することで、さらに当古墳の様相が明らかになると考えられる。

2. 天神山古墳の出土遺物(巽三郎氏収集資料)

当館が収蔵する巽三郎氏収集資料のうち天神山古墳出土遺物は、土器(須恵器甕、坏身、高坏、壺または甕)5点、玉類(ガラス製玉類、滑石製玉類)12点である(第2表、第3表)³⁾。土器は湯浅天神山古墳と書かれた紙箱に収納されており、それぞれには墨書で天神山古墳と破断面に注記がなされている。また、玉類は、プラスチック製容器に収納されていた。

(1) 土器

1～5はいずれも須恵器である(第4図、写真

2)。1は、甕である。頸部は細く締め、外上方へ長く伸びる。口縁部は有段で、段の稜は不明瞭で凹線が巡る。口縁端部は上方に面を作り、外側へ引き出す。2は、坏身または高坏である。立ち上がり部は短く、端部は丸みをもって終わる。外面は受け部からやや下がった位置で回転ヘラケズリを行う。3は、坏身であり、受け部の突出は2よりも大きい。細片のため口径は、復元できなかった。4は、壺または甕の体部片であり、器壁の厚さからみて小型品または中型品と考えられる。外面には格子目タタキ目、内面には青海波文の当て具の痕跡が残る。5は、高坏の脚部裾であり、裾部径は約12.0cmを測る。裾部は、内湾気味に広がり、端部付近で緩やかな段を作り出す。

(2) 玉類

1～9はガラス製玉類、10・11は滑石製玉類である(第5図、写真3)。ガラス製玉類は直径7mm以上のものをガラス製丸玉、直径7mm未満、直径3mm以上のものをガラス製小玉、直径3mm未満のものをガラス製粟玉に分類した。色調については自然科学分析による材質調査が行われている

第2表 天神山古墳出土土器一覧表

報告番号	器種	法量			観察		色調・胎土
		口径 (cm)	器高 (cm)	残存率 (%)	外面	内面	
1	甕	10.8 (復)	5.7	25	回転ナデ、口縁部の段の屈曲点に凹線を施す。	回転ナデを施し、口縁端部は上方に面を作る。	灰褐色
2	坏身または高坏	13.4 (復)	2.5	10	受け部・坏部上半は回転ナデ、下半部は回転ヘラケズリを施す。	回転ナデを施し、口縁端部は丸くおさめる。	灰褐色、長石直径 0.05 cm をわずかに含む。
3	坏身	—	1.9	5	回転ナデを施す。	ナデ調整による。	灰褐色
4	壺・甕	—	3.9	破片	格子目タタキを施す。	青海波文の当て具の痕跡が残る。	灰褐色
5	高坏	12.0 (復)	1.7	10	ナデ調整を施す。裾部は幅 1.0 cm 程折り返すことで肥厚する。	ナデ調整による。	外面：灰褐色、内面：灰色、黒色粒直径 0.05 cm を含む。

第3表 天神山古墳出土玉類一覧表

報告番号	種類	材質	色調	最大径 (mm)	最大高 (mm)	上端孔径 (mm)	下端孔径 (mm)	重量 (g)	観察
1	丸玉	ガラス	紺色透明	8.45	4.6	2.99	307	0.427	孔に並行する気泡が認められる。引き延ばし法による。
2	丸玉	ガラス	濃緑色透明	7.28	5.51	3.16	3.57	0.342	孔は楕円形となる。外面にわずかな窪みをもつ。
3	小玉	ガラス	淡青色透明	5.51	4.65	2.59	2.39	0.187	上からみてややゆがむ。外面に面をもつ。
4	栗玉	ガラス	淡青色半透明	2.52	1.46	1.65	1.45	0.14	上からみて正円に近い。
5	栗玉	ガラス	紺色透明	2.00	3.18	1.47	1.62	0.16	上からみて楕円形を呈する。
6	栗玉	ガラス	紺色透明	2.03	1.91	1.06	1.04	0.11	上端割れあり。やや黒い。
7	栗玉	ガラス	淡青色半透明	2.68	1.68	1.19	1.18	0.15	孔の位置がやや偏る。
8	栗玉	ガラス	淡青色半透明	3.02	1.69	1.74	1.72	0.18	気泡が認められる。上端に向かって孔が広がる。
9	栗玉	ガラス	淡青色半透明	1.78	1.01	0.74	0.73	0.001	資料内で最小個体。
10	白玉	滑石製	濃緑色不透明	4.33	1.95	1.77	1.78	0.069	中央に稜を持ち、上下にそれぞれ研磨する。
11	管玉	滑石製	淡緑色不透明	17.39	4.75	1.46	1.25	0.534	片面穿孔による。2点接合。表面は摩滅する。

天王塚古墳（和歌山市）での記載方法に準じ（和歌山県教育委員会 2020）、肉眼観察から紺色透明、濃緑色透明、淡青色半透明、淡青色透明の4つに区分した。1は紺色透明、2は濃緑色透明のガラス製丸玉であり、いずれも上下端に面をもつ。1は孔の軸方向に並行して伸びる気泡が確認され、引き延ばし法によるものとみられる。3は淡青色透明のガラス製小玉であり、上下端は平坦面を持たず球形を呈する。平面形は、やや不整円形となる。4～9はガラス製栗玉である。4、7～9が淡青色半透明、5、6が紺色透明である。7、8は表面に気泡がランダムに分布しており、鋳型法によるものの可能性がある。天王塚古墳から出土したガラス製玉類の蛍光X線分析結果を参照すると、紺色透明のものが植物灰タイプのソーダ石灰ガラス、淡青色半透明のものが東南アジアで製作

された高アルミナタイプのソーダ石灰ガラスに分類される。

10は滑石製白玉であり、上下端に面をもつ。側面中央に最大径があり、稜を形成する。研磨は、上下から中央の稜に向かって縦方向に行う。色調は、濃緑灰色である。11は表面は摩滅し、褐色に変色する。穿孔は、図の下から上に向かって片面から穿孔する。

3. 天神山古墳出土の組合式石棺

組合式石棺1の石材は、昭和40年代に湯浅町教育委員会職員によって収集、保管された（第4表、第6・7図）。

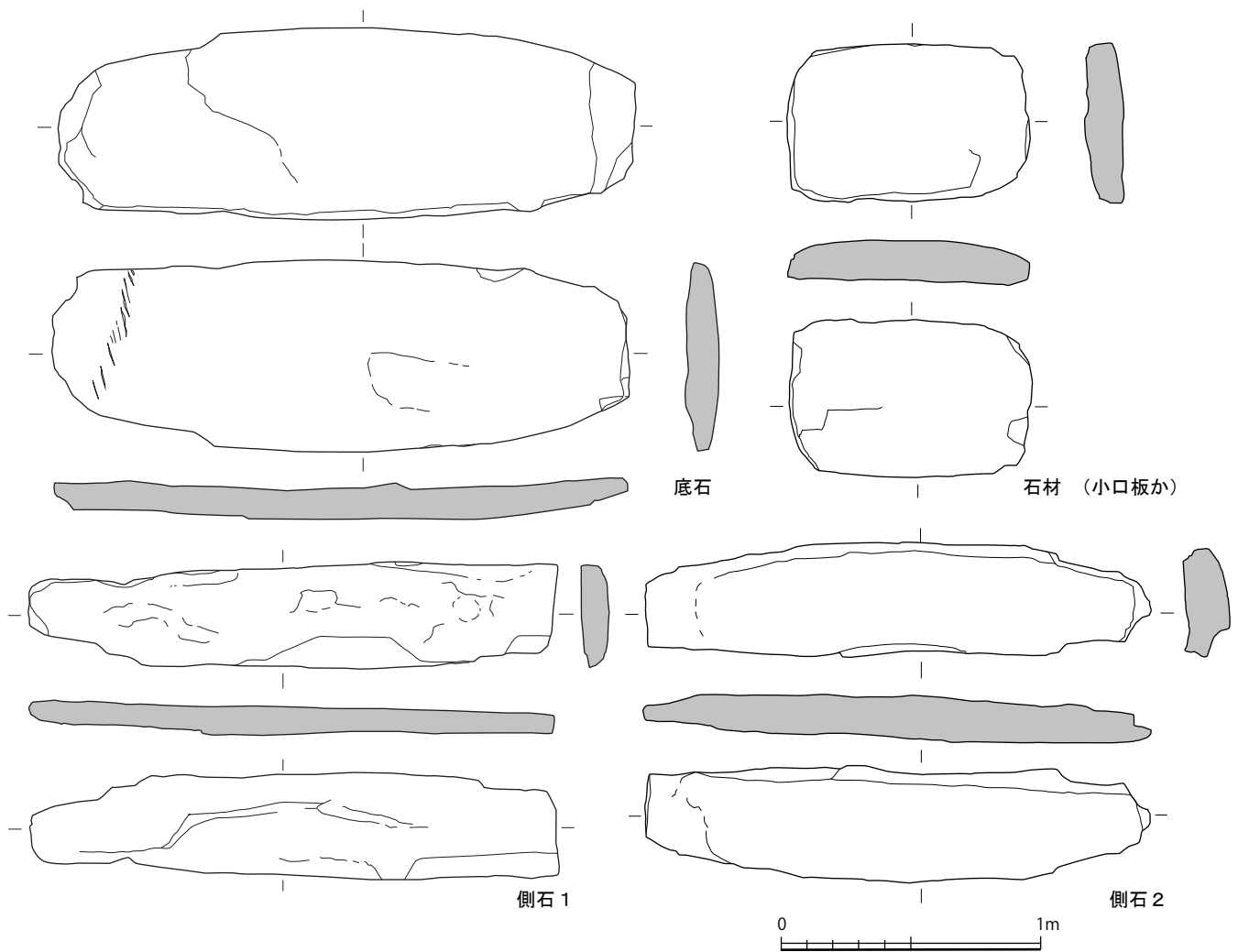
組合式石棺1の底石は、長さ218cm、幅72cm、厚さ14cmを測る。表面に大きな凹凸はなく少し反っており、端には斜め方向に並行する削り痕跡

第4表 埋蔵物録の記載と現存する組合式石棺1との比較

	埋蔵物録の記載＊1)				組合式石棺1			
	長さ	幅	高さ	特徴	長さ	幅	厚さ	特徴
底石	6尺5寸 (約197cm)	2尺	4寸 (約12cm)		218cm	72cm	14cm	彩色? 一部に変色あり
側石1	6尺	1尺	2寸		202cm	40cm	11cm	一部に変色あり
側石2	6尺	1尺	2寸		190cm	43cm	17.5cm	石材風化著しい
小口板	2尺5寸 (約75cm)	2尺	3寸5分 (10.6cm)	瓦焼製・溝形の縁取り	93cm	61cm	16cm	＊2) 不明
蓋石	6尺 (約181cm)	2尺 (約60cm)	3寸2分 (約10.3cm)	溝形の縁取り	187cm	76cm	14cm	坂部池畔に存在。内側を彫り込む。

＊1) 「底石を下部に敷き側石を左右に立て、小口を片端に置き上部に蓋石とし、一つの長き櫃形に造りたるものなり」。

＊2) 湯浅町教育委員会にて小口板に相当する石材保管、当古墳出土かどうかは不明。



第6図 天神山古墳出土の組合式石棺1（底石・側石・石材、S=1/20）

が残る。また、両面の一部が薄い褐色に変色しており、彩色があった可能性も考えられる。

側石 1 は、長さ 202cm、幅 40cm、厚さ 11cm を測る。両面の端には、石材の加工痕が残る。他の石材と比べ全体的に茶色がかっているが、底石と同じく、両面の一部が褐色に変色しているのがみえる。

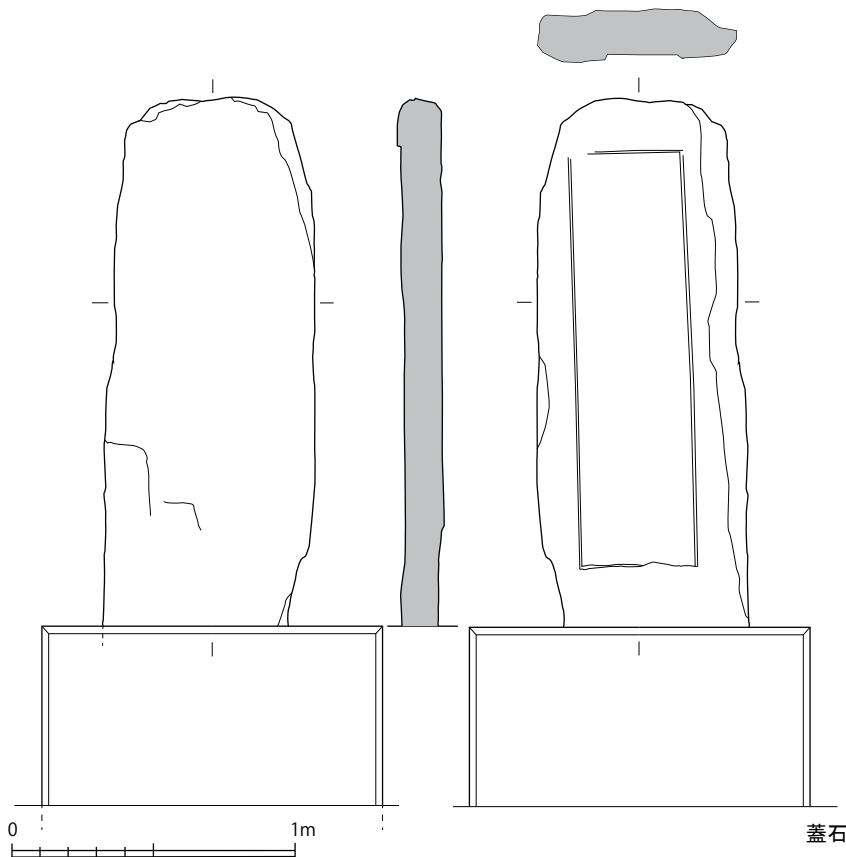
側石 2 は長さ 190cm、幅 43cm、厚さ 17.5cm を測り、側石 1 と比べかなり厚みがある。また、石材の劣化が著しく、表面が剥落した状態にある。

また、小口板と考えられる石材も保管されており、長さ 93cm、幅 61cm、厚さ 16cm を測る厚いものである。結晶片岩を使用しており当古墳からの出土である可能性があるが、『埋蔵物録』には、瓦製の小口が 1 点出土したのみと記録されており、当石材の所以は不明である。

次に、蓋石であるが、坂部池畔に建立された前

川仙吉之碑に転用されている。下部がコンクリートに埋まっているため、全体の長さは不明なもの、現状で長さ 187cm を測る。また、石碑の正面については、中心部分に縦 147 cm、横幅 42 cm の長方形を段状に彫り込み低くしており、組み合わせる際の段を形成している。これらの特徴は『埋蔵物録』の記述と一致しており、当時出土した石棺材が転用されていることがわかる。また、湯浅町教育委員会所蔵の石棺材と石材も同一の結晶片岩である。

また、組合式石棺 2 の石材については、顯國神社の忠魂碑の裏に積みあげられた燈籠等の様々な石材のなかに 2 点確認することができた。これは、当古墳の土取り作業を行うなか出土した石棺材を、昭和 35 年に顯國神社へ忠魂碑が移転した際と同時期に移動させたものと考えられる。多く



第7図 天神山古墳出土の組合式石棺1（蓋石、S=1/20）

の石が積み重なっているため詳細は不明であるが、1点目は長さ156cm、2点目は長さ175cmとなっており、組合式石棺1に比べ一回り小さいものである。『和歌山県史』によると、墳頂部に大小2基の石棺が主軸を南北に向けて埋められていたことについて記述があり、顯國神社に置かれている2点は、発見されたうちの小さい石棺に該当するものと考えられる（和歌山県史編さん委員会1983）。また、石材も他の石棺と同一のものが使われている。

天神山古墳の組合式石棺はどれも大きな一枚石を用いており、組合式石棺1は、小口板については不明であるが、組み合わせると高さが70cm程の石棺に復元できると考えられる。

これらの石棺材は、石橋として使用されていた経緯の影響からか、全体的に劣化しており細部の観察が難しい状態にあるものもある。しかし、古墳は失われているが、その組合式石棺は転用されながらも現在に至るまで現存している。

4. 天神山古墳の評価

ここでは明らかになった資料を基に当古墳の評価を行う。

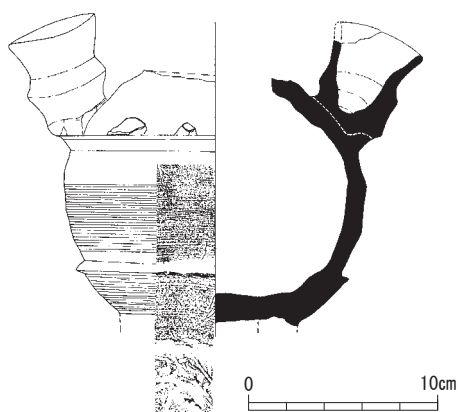
（1）天神山古墳の年代

巽三郎氏収集資料からは、埋葬施設周辺から出土した土器の内容が明らかになった。土器はすべて須恵器であり、このうち、口径が復元できる個体は、1の甕、2の坏身または高坏、5の高坏脚部である。1は頸部の長さと頸部の締め具合からすると、MT15～TK10型式期のものと考えられる。また、2の坏身は口径が13.4cmであり、受け部の立ち上がりが短く、端部も丸く収めることから、TK10～MT85型式期のものと考えられる。4の脚裾部の形状は、内湾気味に広がって緩やかな段を形作り、TK10型式期以降のものと考えら

れる。これらの資料については巽氏が現地を踏査した段階のものであるが、2つある組合式石棺のどちらに伴うものかはわからない。

一方、東京国立博物館所蔵の装飾付壺は、組合式石棺1に伴うものであり、これについても検討する（第8図）。装飾付壺は、口頸部と脚部を欠損し、肩部と底部付近に鏝状の突帯が認められる。肩部には、小型壺と動物の脚部が付けられる。また、底部と脚台部との接合部分が厚く、器台の上に壺を載せた表現を忠実にやっている。この装飾付壺は、当初の様相をとどめているが、胎土が粗くやや器壁が厚く鈍重な印象を受けるため、装飾付壺の出現段階よりもやや新しく、MT15～TK10型式期のものと考えられる。

以上のように土器からは、当古墳の編年的な位置づけはTK10型式期を中心とした前後の時期、すなわち古墳時代後期前葉とすることができる。また、玉類については、ガラス玉に古い様相が認められるが、片面穿孔の管玉や高アルミナタイプ

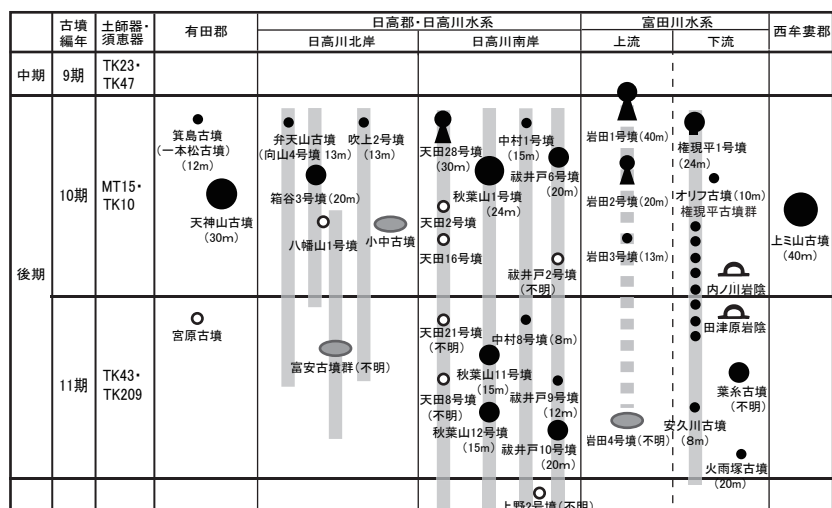


第8図 天神山古墳出土装飾付壺
(S=1/4、東京国立博物館 1994 より)

のソーダ石灰ガラス玉がおおむね古墳時代中期後半から後期の玉類の組成を示すと考えられる。以上の編年観はこれまで検討されてきた埴輪の編年観（河内 2015）と大きな齟齬はない。このため、本稿での出土遺物の編年的位置づけは、組合式石棺 2 に伴う遺物が明らかではないが、墳丘に樹立された埴輪と主体部である組合式石棺 1 の年代を示すとしてもよいだろう⁴⁾。

このように当古墳の編年的位置づけを古墳時代後期前葉とすると、紀中地域の古墳の築造時期とも符合する（第 9 図）。すなわち当地域では、秋葉山 1 号墳（御坊市、24 m）、天田 28 号墳（御坊市、30 m）、箱谷 3 号墳（日高町、20 m）、弁天山古墳（向山 4 号墳、日高町、12 m 以上）等の古墳が後期前半に各地域で出現し、古墳群を形成する。また、紀南地域でも、岩田 1 号墳（上富田町、40 m）、権現平 1 号墳（白浜町、24 m）、上ミ山古墳（すさみ町、40 m）等の有力古墳が築かれる。

これらの古墳には埋葬施設の構造に差が認められるが、円筒埴輪列、横穴式石室、段築等のいずれかの要素を備えており、中期に認められた単発的かつ独自性の強い古墳とは異なる。後期前葉段階には岩橋千塚古墳群でも首長墓や中小規模の古墳が多く築造される段階であり、紀伊地域における古墳の築造動向と連動した現象として評価できる。



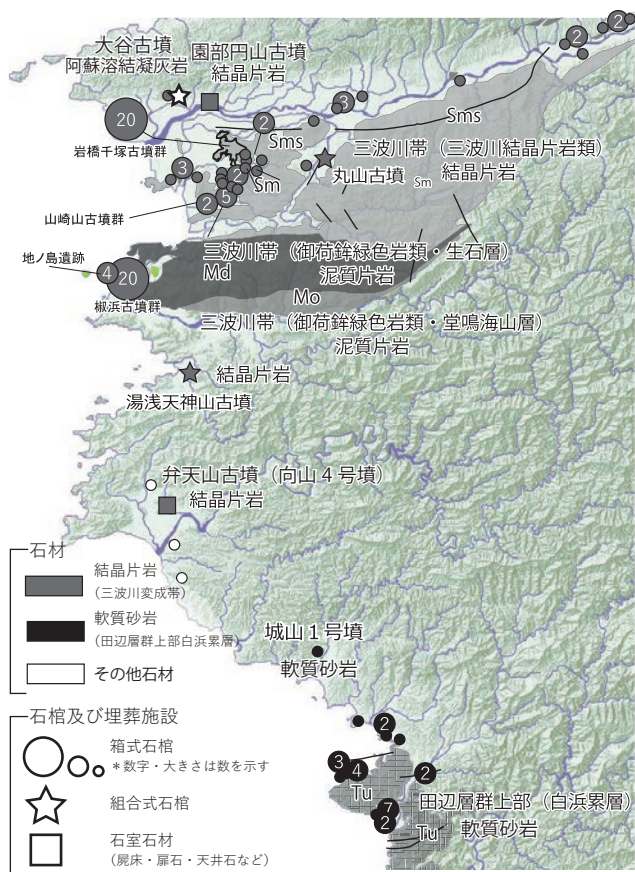
第9図 紀中・紀南地域の古墳の動向

（2）組合式石棺について

本稿では、当古墳出土の 2 基の組合式石棺について紹介した。組合式石棺 1 は蓋石、底石、側石ともに長大な 1 枚石を、小口には土製の小口板を用いる。また、組合式石棺 2 も、部位は不明だが 1.5 m 以上の一枚石を用いる。和歌山県内、特に岩橋千塚古墳群や紀ノ川流域、田辺湾沿岸で確認される箱式石棺は、いずれも側石に 2 枚以上の複数の石材を用いており、当古墳の埋葬施設は箱式石棺とは異なり、組合式石棺とすべきだろう。なお、明治 32 年（1899）の発見記録からは、棺外副葬とみられる鉄製品が存在しており、墓壙を伴った組合式石棺とする傍証となる。

同様の埋葬施設としては、丸山古墳（紀の川市）例がある。これは、長大な結晶片岩の一枚石を蓋石、側石に用い、2 枚の底石を組み合わせ中央に排水孔をもつ構造をもち、さらに蓋石裏側には溝を彫り、縄掛け突起を削り出す。石材の利用方法と構造からは、組合式石棺として考え、通常の箱式石棺と区別できる。

また、天神山古墳及び丸山古墳の組合式石棺は、その石材に結晶片岩を用いる。結晶片岩は三波川変成帯に分布しており、有田川以北に分布する（第 10 図）。このため、天神山古墳の組合式石棺の石材は、有田川以北から運ばれたと考えられる。石棺や石室の石材として産出地から離れた古墳へ結晶片岩が運ばれた例は、弁天山古墳の屍床



第10図 石材産地と箱式石棺・組合式石棺の分布

石材及び扉石や、園部円山古墳（和歌山市）の玄門天井石が挙げられ、象徴的な用いられ方を示す。さらに、石材を問わなければ、大谷古墳（和歌山市）の組合式家形石棺には阿蘇溶結凝灰岩が用いられ、城山1号墳（みなべ町）の箱式石棺は田辺層群上部白浜累層の軟質砂岩が用いられている。

このため、各地の有力な古墳の埋葬施設には、遠隔地から石材が運ばれる事例が紀伊地域に多い。

以上の点で当古墳例は、箱式石棺とは区別できる組合式石棺であり、古墳築造において有田川以北地域と当古墳の被葬者との関係が現れていると考えられる。

おわりに

本稿では、天神山古墳の出土遺物である巽三郎氏収集資料と関連する組合式石棺を紹介した。現在、天神山古墳は存在しない。しかし、過去に収集された資料から、再び失われた古墳について検

討することは可能である。こうした資料の検討を元に、引き続き各地の古墳の再評価を進めたい。

謝辞

本稿をまとめるにあたり、次の方々からご教示をいただきました。末筆ながら記して感謝の意を表します。

大賀克彦、河内一浩、水島大二、山本隆重、渡瀬敏文

本稿の執筆は田中、中原が協議の上、はじめに、1、2、4、おわりに、を田中が、3を中原が執筆した。

【註】

- 1) 天神山古墳という名称は他にも存在することから、「湯浅天神山古墳」として表記されることもある。しかし、周知の埋蔵文化財包蔵地としては「天神山古墳」として認定されており（和歌山県教育委員会 2007）、これに従う。
- 2) 巽三郎氏収集資料については、故巽三郎氏が収集された考古資料及び調査記録類の総称である。これらの資料については、御坊市及び日高郡内、田辺市及びみなべ町内、白浜町内の資料をそれぞれ御坊市歴史民俗資料館、田辺市教育委員会、白浜町教育委員会が所蔵する。また、それ以外の資料については、当館が寄贈を受けている。当館ではコンテナ及び段ボール箱 29 箱、約 1718 点を収蔵している。
- 3) 玉類については、滑石製管玉が 2 点あるが接合する同一個体であると考えられる。また、平成 14 年頃に巽氏自宅にて資料調査が行われた写真には、薄緑色透明のガラス小玉が存在しているが、当館所蔵資料には存在しない。
- 4) これまで天神山古墳の年代を中期後半としてきたが（田中 2022）、今回の出土土器の検討から後期前葉として修正する。

【天神山古墳に関する参考文献】

- 1) 有田郡 1915『有田郡誌』
- 2) 湯浅町役場 1915『湯浅町郷土誌』湯浅町
- 3) 巽 三郎 1962「和歌山県下の形象埴輪に就いて（其の2）」『熊野路考古』2 南紀考古同好会
- 4) 湯浅町誌編集委員会 1967「天神山古墳跡」『湯浅町誌』
- 5) 和歌山県史編さん委員会 1983「144 天神山古墳」『和歌山

県史』考古資料 和歌山県

- 6) 東京国立博物館 1994『須恵器集成図録Ⅰ』（近畿編）
- 7) 和田堅一 1998「天神山」『湯浅の街角見聞日記』
- 8) 菊井佳弥・樽本絵里香・中嶋宏美・藤藪勝則・河内一浩
2002「湯浅天神山古墳の埴輪」『紀伊考古学研究』第5号
紀伊考古学研究会
- 9) 河内一浩 2015「湯浅天神山古墳の出土埴輪紀伊風土記の
丘館蔵資料から」『紀伊風土記の丘研究紀要』第3号 和歌
山県立紀伊風土記の丘
- 10) 東京帝室博物館 1900「和歌山県有田郡湯浅町大字別所天
神社境内ニ於テ発掘ノ鉄塊外壺点差出ニ及ハサル旨同県へ
指令ノ件（9月）」『明治33年埋蔵物録』
- 11) 東京帝室博物館 1901「和歌山県有田郡湯浅町大字別所天
神社境内ニ於テ発掘ノ土器外1点譲受ノ件（6月）」『明治
34年埋蔵物録』
- 12) 東京帝室博物館 1937「和歌山県湯浅町埋蔵物ニ関シ山
下竹三郎へ回答ノ件」『昭和12年埋蔵物録』

【その他参考文献】

- 大賀克彦 2010「日本列島におけるガラスおよびガラス玉生産
の成立と展開」『月刊文化財』566号
- 河内一浩 2017「大日山1号墳の大刀形埴輪－楕円形柄頭大刀
の系譜－」『紀伊風土記の丘研究紀要』第5号 和歌山県立
紀伊風土記の丘
- 田中元浩 2022「Ⅺ 古墳時代における海辺の墓制と集落－紀
伊半島の事例から－」『磯間岩陰遺跡の研究』考察編 田辺
市教育委員会・科学研究費磯間岩陰遺跡研究班
- 和歌山県教育委員会 2007『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地
図』
- 和歌山県教育委員会 2020『特別史跡岩橋千塚古墳－天王塚古
墳2次・3次発掘調査報告書－』

紀の川市黒土古墳の再検討 —紀ノ川中流域古墳の出土品 1—

金澤 舞・河内一浩

はじめに—黒土古墳の存在

和歌山県紀の川市黒土にあった黒土古墳^{くろつち}は、過去の採土等により削平されて現存しない。古老の話では、墳形は円墳で、その大きさが直径 25 m、高さが 5 m ほどであったという。埋葬施設については、昭和 6 年（1931）に国道 24 号線工事に伴う土砂採取により横穴式石室が現れ、勾玉、直刀・壺が出土したという情報がある¹⁾（金谷 1956）。

残存していた墳丘は、果樹園に開墾され²⁾、昭和 27 年（1952）に石室らしい石組みの遺構が発見されている。ほぼ全壊した状態で、写真 1 の写真から分かるように石材が露出していた³⁾。長さ 2 m 程度の竪穴式であったらしい（打田町 1981）⁴⁾。同時に遺物も出土している。『打田町史』によれば、杯、杯蓋、高杯、壺、甗などの須恵器のほか、鉄刀や鉄鏃の鉄製武器が確認されている。鉄刀の柄には金製装飾品があり、装飾品として銀環、銀製の空玉が発見されている。出土遺物から古墳の築造時期を 6 世紀中頃と考えられている（和歌山県史編さん委員会 1983）。

黒土古墳の出土遺物の一部ではあるが、和歌山県立紀伊風土記の丘に所蔵されており、今回須恵器を実測する機会をえた。ここに、紀ノ川中流域の古墳の資料として提示しておきたい。（河内）



写真1 黒土古墳（紀の川市教育委員会提供）

1. 収蔵の経緯

本稿で紹介する黒土古墳出土の須恵器は、羯磨正信氏により生前に収集されたものである。こうした羯磨氏の収集資料は、海南市教育委員会と和歌山県立紀伊風土記の丘（以下、「紀伊風土記の丘」という。）に寄贈され、現在各館で保管されている。紀伊風土記の丘が所蔵する羯磨氏の資料は、「羯磨コレクション」と呼ばれ、羯磨氏が亡くなられたことを契機とし、平成 6 年（1994）頃に氏の奥様より紀伊風土記の丘へ寄贈された。寄贈資料には、考古資料のほか、書籍、新聞記事のスクラップ、ノート、写真等がある。寄贈された資料は、平成 14 年（2002）～平成 18 年（2006）にかけて中村貞史氏により台帳作成が行われた。その後、紀伊風土記の丘では、展示などを通し、その保存・活用を図っている。

なお、紀伊風土記の丘が所蔵する黒土古墳出土資料は、羯磨コレクションのほか北一夫氏寄贈資料があり、まとめると表 1 のとおりである。（金澤）

2. 収蔵須恵器の観察

紀伊風土記の丘で収蔵されている黒土古墳出土の須恵器のうち、今回実測し得たのは第 1 図に提

第1表 黒土古墳の出土品収蔵一覧

番号	種類	数量	寄贈者	備考
1	銀製梔子玉	1 点	北一夫氏	
2	銀製空玉	9 点	北一夫氏	
3	銀環	1 点	北一夫氏	
4	金製飾り金具	2 点	北一夫氏	
5	大刀	6 点	北一夫氏	
6	鉄鏃	3 点	北一夫氏	
7	その他鉄製品	2 点	北一夫氏	
8	須恵器 坏身	1 点	北一夫氏	
—	須恵器 坏身	1 点	羯磨正信氏	本稿報告分
—	須恵器 坏蓋	1 点	羯磨正信氏	本稿報告分
—	須恵器 高坏	1 点	羯磨正信氏	本稿報告分
—	玄室粘土	1 袋	北一夫氏	
—	玄室玉石	1 袋	北一夫氏	
—	不明鉄製品	2 袋	北一夫氏	

示した杯蓋と杯身の各1点と高杯口縁部の2片である。以下、器種ごとに概説を記すこととする。なお、部位名称については、中村浩氏が提示されている蓋杯の各部名称に準ずる（中村1990）。

1は蓋杯で、端部の一部が欠損するがほぼ完形品である。法量は、口径が15.3cm、器高が4.7cmを測る。内面見込み部には、「黒土古墳出土」の墨書が認められる。やや丸みを呈する天井部は、ヘラ削りによる調整が約3分の2まで及ぶ。外面に稜が確認できる。口縁部は外反し、口縁端部の内面に段を設ける。

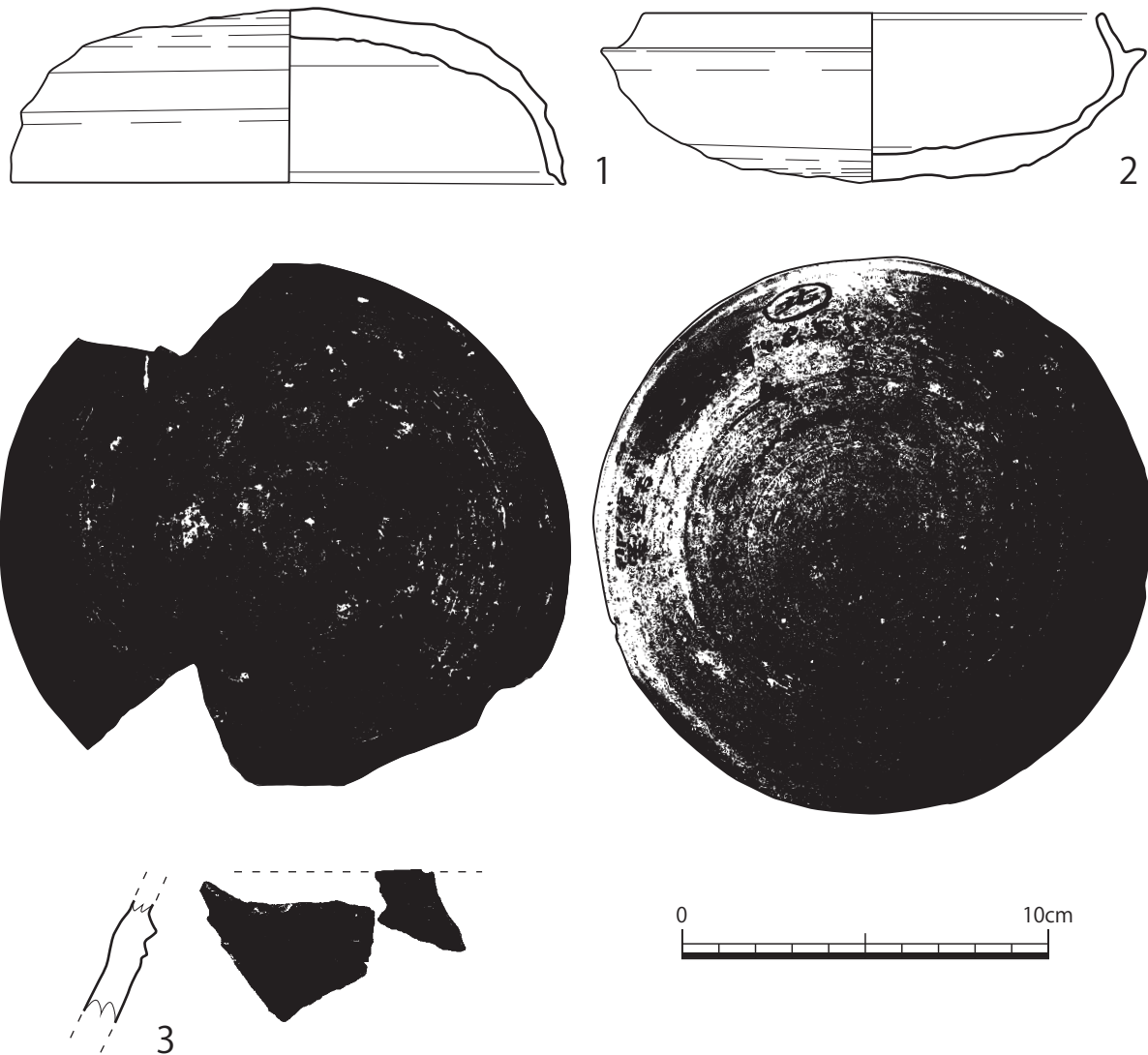
天井部外面には、まだらに白色系の粘土が付着している。これは、『打田町史』に記載がある昭和27年に発見された竪穴式石室と考えられる石

組みの床面に敷かれていた粘着力の強い粘土であろうか。

2は杯身で、完形品である。法量は、口径が12.5cm、器高が4.6cm、受部の直径が14.8cmを測る。底部外面には、受部外縁に沿って「那賀郡田中村 黒土古墳出土（○に）北 1948.5.5」と墨書されている。底部はやや平坦で、回転ヘラ削りは約3分の1程度しか施されない。受け部はやや上方に広がる。口縁部のたちあがりは、やや短く内傾する。口縁部端面は丸く収めている。

底部には赤色顔料により直線で「一」状の塗布が見られた。ヘラ記号としての意味合いをもつものであろうか。

3は、高杯の口縁部片で両者は接合しない。小



第1図 黒土古墳出土須恵器実測図 (S=1/2、河内実測)

片につき、口縁径は復元できなかった。口縁端部は、外方に折れる。端面は平坦である。端部の下に断面が三角形を呈する突帯二条を巡らす。そして、その下方に波状文が施されていた。(河内)

3. 黒土古墳の副葬品

紀伊風土記の丘には、須恵器以外に黒土古墳の遺物として写真3に提示した資料が保存されている。

1は、銀製梔子玉である。長楕円形を呈し、側面に8本の稜が突き出ている。法量は、高さ1.1cm、直径0.9cmを測る。

2は、銀製の空玉である。全体の3分の1が、欠損するが、形状が分かる資料である。平面は円形で、直径1.6cm、高さ1.1cmを測る。側面に紐通しの孔が穿たれている。

3も銀製空玉で、3点である。下段の資料が完形で、直径1.35cmを測る。2の空玉と比べると。大きさが一回り小さく、稜線がシャープである。側面に紐通しの孔が穿たれている。

4は、銀製の耳環である。直径0.45cmの銀棒を用い、外径2cmを測る。

5・6は金製の飾り金具である。大刀の飾りと考えられる。

7は、須恵器の杯身で今回、紹介した杯身である。

8は、大刀、刀身で、6点の破片が残る。『打田町史』に実測図が掲載され、長さ約70cmに復元されている。幅が約3.2cmを測る。鞘の木質部が残り、漆の残存とみられる黒色を呈していたと、『打田町史』に記述がある。

9は、大刀の柄の部分である。8の大刀の一体と考えられている。表面に残る木質部に金張りした銅製飾り金具が巻かれている。

10は、鉄鏃やその他の鉄製品である。鉄鏃は、茎部分のみ残存している。刀子の断片も存在する。

黒土古墳の副葬品は、昭和6年(1931)に発見された横穴式石室からは、勾玉、直刀、壺が出たと伝えられていることが『紀伊の古墳』2に載っている(金谷1956)。これらは行方不明で、内容

についても詳らかではない。

紀伊風土記の丘に収蔵されている資料は、昭和27年(1952)に発見された埋葬施設の副葬品である。須恵器は、かつて羯磨氏が保管されていたものであり、『紀伊の古墳』2には、羯磨氏保管さであることが書かれている。なお、同書には田中小学校にも遺物が保管されているとの記述があるが、現在確認できない。保管資料の内容も不明である。

紀伊風土記の丘の黒土古墳の資料の多くは、北一夫氏の寄贈資料であるが、『打田町史』に記載のある遺物の多くが該当する(打田町1981)。

また、須恵器の注記にある「1948.5.5」の数字が採集日であれば、埋葬施設が発見される以前の日付であり、今後の検討課題だと考えている。

遺物ではないが、北氏の寄贈資料のなかに写真2に提示した玉石が存在する。これが、『打田町史』に記述のある「礫(川原石)の散乱する床面」に確認された埋葬施設の石材である可能性が高い。さらに、その玉石には粘土が付着し、玉石とはまた別に粘土も存在する。この粘土も『打田町史』に記述の「床面には封土層にみられる粘土と異なる粘着力の強い粘土が敷かれていた。」とも符合するのである。

また、今回実測した須恵器杯蓋の表面付着物にも通じる。今後、化学分析によってこれらがすべて同じものであるかの検証も必要であろう。

今回、黒土古墳から出土した須恵器を3点紹介



写真2 紀伊風土記の丘収蔵の玉石(河内撮影)



写真 3-1 1. 銀製梔子玉



写真 3-2 2. 銀製空玉①



写真 3-3 2. 銀製空玉②



写真 3-4 3. 銀環



写真 3-5 4. 金製飾り金具①



写真 3-6 4. 金製飾り金具②



写真 3-7 8. 須恵器坏身



写真 3-8 5. 大刀 刀身



写真 3-9 5. 大刀 柄



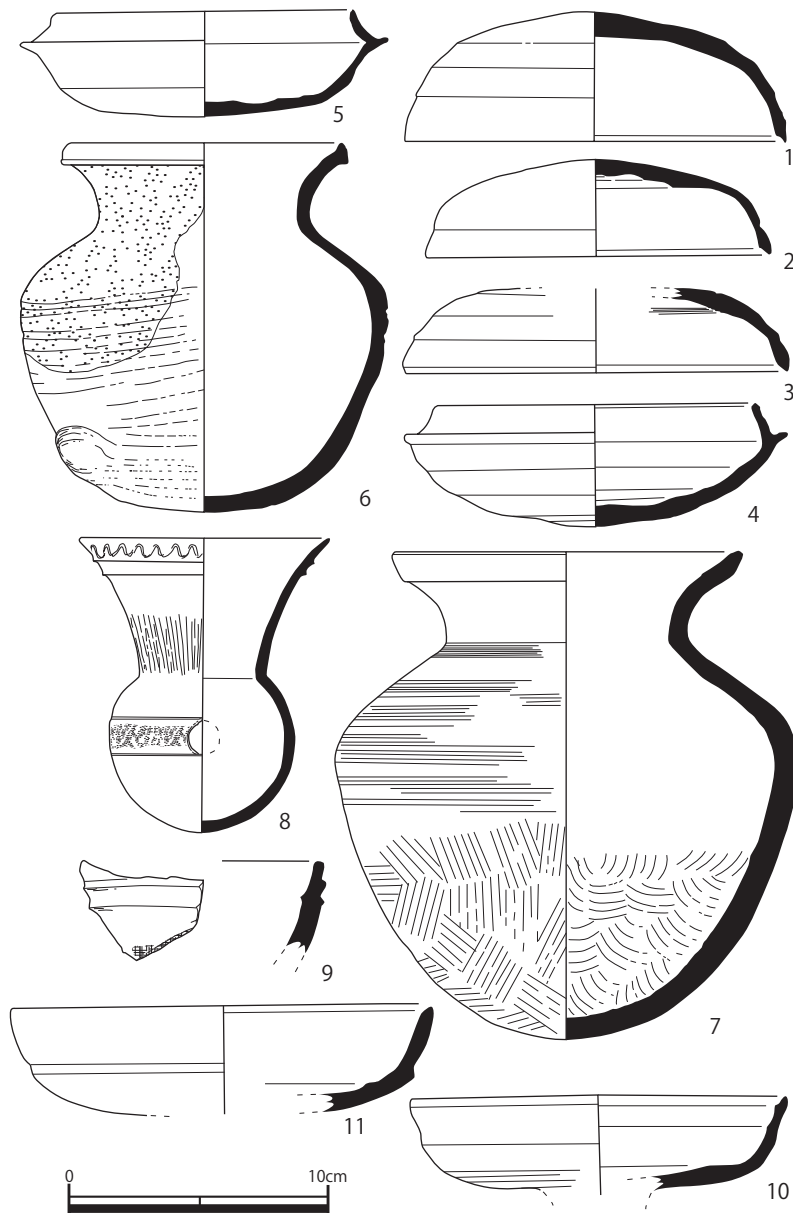
写真 3-10 6. 鉄鏃・7. その他鉄製品

写真3 紀伊風土記の丘所蔵の副葬品

したが、『打田町史』には多くの須恵器が報告されている。ここで、紹介しておこう。

第2図の11点のうち、1と4、9が第1図の1・2・3に該当する。

2・3は、杯蓋である。口径は、2が13.3 cm、3が15 cmである。2の天井部は、やや丸みを呈する。天井部と口縁部の境の稜線は消失し、凹線を施す。口縁部は外反し、口縁端部の内面には段が見られる。3は天井部が欠損するが、1の蓋に類似する。外面は稜が見られ、外反する口縁部は内面に段をもつ端部である。5は、杯身である。法量は、口径が11.6 cm、器高が4.1 cm、受部の直径が14.8 cmを測る。底部外面は平坦を呈する。受け部は水平に近く、外へ広がる。口縁部のたがりは短く内傾する。口縁部端面は丸く収めて



第2図 黒土古墳出土須恵器実測図 (S=1/3、『打田町史』より)

いる。

以上が蓋杯の概略である。口径や器高に法量差がみられ、型式も二つあることが分かる。

6・7は、広口壺で、前者が口径11cm、器高14.5cm、後者は口径13.8cm、器高19cmで、法量に差がある。また口縁端部が上下に肥厚する6に対し7の口縁端部は上方にのみ肥厚する形態を呈する。外面調整も図からはカキ目の範囲が違い、蓋杯同様に時期差を示すのであろうか。

8は、甕である。9から11までが無蓋高杯の杯部分である。これらの須恵器については、陶邑

古窯址群の編年、TK10型式に帰属するものと考えたい。(金澤・河内)

4. まとめにかえて

和歌山県紀の川市黒土にかつて所在した黒土古墳は、数度にわたる削土で、墳丘や埋葬施設は消滅している。『打田町史』には、「古墳があった柑橘園の積み上げられた石垣の石材や墳丘裾部と思われる形から、辛うじて古墳の存在がわかる程度に残存した。」とある。また、破壊を受けた当時の写真や略測図が残されているとのことや、保存されている遺物もあわせて整理をしたうえで、黒土古墳の検討が必要だと感じている。

今回、一部に留まったが須恵器を実測し、紹介できた。また、紀伊風土記の丘には黒土古墳の副葬品が保管されていることも明らかにできた。

6世紀代の紀ノ川中流域、特に左岸おいての古墳築造過程は今のところ、次のように考えられている。まず、円筒形埴輪を持つ前方後円墳の三昧塚4号墳が築

造され、その後古墳が連綿と築かれていく。その一つ、現在も旧国道24号線の沿線には八幡塚古墳が保存されている。

八幡塚古墳は、直径20mの円墳で、横穴式石室と箱式石棺の二つの埋葬施設が存在する。前者はすでに盗掘はされていたものの、玄室から須恵器や銀製梔子玉、銀製金張空玉、金張銅地飾り金具片が出土している。須恵器から横穴式石室の築造は6世紀後半と考えている。後者からは、鉄刀、須恵器、土師器が出土し、一部は東京国立博物館に所蔵されている⁵⁾(河内2016)。

また、周辺には横穴式石室を持つ「じゅあな塚古墳」が存在することから⁶⁾、黒土古墳同様、紀ノ川が形成した下位の段丘縁に築かれた古墳として捉えることができる。このことは、立地において岩出市高塚にかつてあった「高塚古墳」も共通する点である⁷⁾。したがって、紀ノ川中流域の北岸において、高塚古墳を西限とし、その最東端が今回俎上にのせた黒土古墳となる。しかしながら、古墳の実態についてはまだまだ不明な点が多い。さらなる検証、検討の必要性を感じる。

今後も紀ノ川中流域の北岸の古墳の実態を解明することに尽力をしていきたい。(河内)

【註】

- 1) 現れた石室の規模については不明である。破壊当時、排水溝が確認されている(打田町 1981)。
- 2) 『打田町史』では、破壊されたのは昭和 26 年(1951)としている。
- 3) 南西方向に砂岩を配した排水溝が確認されている(打田町 1981)。
- 4) 土層が写っている断面写真には、上下二段の土層を持ち、下層の石室を覆うように赤色土が積み上げられ、その封土の上にかつて破壊された石室の封土が上積みされていた(打田町 1981)。
- 5) 八幡塚古墳の箱式石棺は、「大正 9 年 和歌山県那賀郡田中村大字下井阪発掘埋蔵物寄贈及脚付埴蓋付以下 4 点不用に付返却に関する件」の公文書から大正 7 年(1918) 5 月 15 日に道路修繕用の土砂を採掘中に発見されたことが分かる。石棺は蓋が伴い、長さ 1.58 m、幅 0.64 m、深さ 0.6 m の底に砂利を敷いていた。中から人骨とともに須恵器蓋杯が 4 点、須恵器高杯、土師器脚付壺(東京国立博物館蔵)、鉄剣が出土した。土師器以外は現在確認できない。
- 6) じゅあな塚古墳は、八幡塚古墳と無名塚古墳と併せて三ツ塚と呼ばれていた。昭和 4 年(1929)に撮影された横穴式石室の写真が残っている。直径 20 m 程度の円墳で、石柵をもつことから八幡塚古墳に共通点が多い。遺物は全く不明である。
- 7) 高塚古墳は、『遺跡地名表』には須恵器片が出土していると書かれているが、詳らかでない。不明点が多く、今後

検討する課題が多い。

【参考文献】

- 打田町 1981『打田町史』第 1 巻
金谷克己 1956『紀伊の古墳』2 綜藝舎
河内一浩 2016「那賀郡内考古学事情」『紀伊考古学研究』第 19 号 紀伊考古学研究会
中村 浩 1990『研究入門須恵器』柏書房株式会社
和歌山県史編さん委員会 1983『和歌山県史 考古資料』

柳川コレクション資料目録（４） －商い具・生活用具を中心に－

蘇理剛志

はじめに

本稿は、平成 27 年度に海南市黒江の柳川和一郎氏と柳川泰彦氏のご厚意により当館に寄贈いただいた同家の生活用具及び商い用具から、段階的に整理した資料の目録と写真の一部を掲載するものである。

本稿は、さきに平成 27 年度『紀伊風土記の丘研究紀要』第 5 号所収の藤森寛志報告（藤森 2017）、令和元年度の同紀要第 9 号及び令和 2 年度第 10 号所収の蘇理報告（蘇理 2021・2022）の続編であり、目録の資料番号もこれに継ぐ形で、ID [柳川-260] 以降の経過を別表にまとめた。とくに今回は、寄贈コレクションのうち江戸時代後期から明治・大正・昭和期にかけて柳川家の家業に用いられた商い用具、また生活用具を重点的に整理した。

柳川家旧蔵の生活資料の点数は、今回の整理によって完結し、総件数は 364 件であることが確認できた。なお、先に行った調査において漆器類と陶磁器類を重点的に整理したが、今回の調査でも新たに漆器・陶磁器が数点見いだされたため、それらは追加で記録を行った。

1. 柳川家旧蔵の商い用具

柳川家では、江戸時代中期の柳川家 3 代目にあたる初代平兵衛（1726～1791 年没）が「岩出屋平兵衛」を名乗り、延享・寛延のころ（1744～51）から明治時代中期にわたる 150 年ほどの間、地元黒江で生産される椀や折敷などの漆器卸しを商っていた（柳川 1969）。とくに、柳川家の店舗空間で使用したと考えられる帳場関係の道具については、江戸時代まで遡りうるものがある程度まとまって伝わっている。

その後、柳川家は近代にはいると漆器卸商いをやめ、替わって明治 20 年代から米穀、肥料の販

売を営み、大正から昭和初期にかけては石油や機械油等も扱った。寄贈資料の中にある商い関係の用具については、そうした柳川家における家業の変遷や、江戸期から近現代の商慣行の変化なども僅かながら垣間見える。

2. 柳川家旧蔵の生活用具

柳川家の日常のくらしに用いた生活用具については、これまで紹介した漆器や陶磁器類が多く含まれるが、その他の素材に注目してみると、木製品（箱物・桶類）、布製品（衣類）、金属製品（鉄・銅・錫・真鍮）のほか、電化製品などがある。また用途別でみると、調理具、照明具、暖房具、贈答用具などがまとまって残っている。

このうち照明具については、燭台、行灯、箱提灯、弓張提灯、高張提灯、灯油ランプ、電気ランタンなどがあり、用途や場面の違いや時代による変遷などがみえる。また火鉢類についても、木製、金属製、漆器、陶製など多様な素材のものが伝わり、時代や用途に応じて使い分けされていたことがわかる。

また、工芸調度のうち漆器・陶磁器以外のものでは、屏風、花入、茶道具、酒器、卓上小物などが含まれ、柳川家住宅の空間を使って冠婚葬祭など家の行事や、寄合など公的または私的な集まりの場において使用されたと考えられる。

3. 注目されるもの

（１）船筆筭、帳場筆筭

柳川家は、江戸後期に廻船を用いて江戸積みの漆器を出していたことから、その関連史料が伝わっているが、資料中の商い用具では、船筆筭 [柳川-260] がその関連が深い資料だといえる。商船で用いられた筆筭で、船中での環境に耐えるため、金具や錠前を取り付け堅牢な作りをしている。

柳川家の船簞笥の製作年は不明で、経年により全体に虫損が認められるが、構造は頑丈に作られ外形を保つ。内部は水の浸入を防ぐ桐材で組まれ、抽斗の奥には隠し箱も組み込まれている。

また帳場簞笥〔柳川－261・262〕は、店舗において金品や帳面など商売に必要な大事なものを仕舞った簞笥であり、柳川家住宅の商業空間に欠かせない簞笥であったと推察される。

（２）鉄漿箱（お歯黒箱）

生活用具では既婚女性が用いた「鉄漿箱」が残されている。「鉄漿（かね）つけ」は、明治時代まで行われた歯を黒く染める習慣である。

お歯黒は、陶製のお歯黒壺に沸騰したお茶と古釘、飴、麴などを入れて密封して、鉄さびの溶けた「鉄漿水」と、ヌルデ（五倍子）の幹に寄生した虫が作る樹液瘤から作る「ふし粉」を用いた。これをお歯黒筆で歯に付着させると、歯のエナメル質に色素が浸透して黒くなり、虫歯や歯周炎を予防するとともに、江戸時代には既婚女性の印ともなった。

柳川家の鉄漿箱〔柳川－313〕には、内蓋をかけた黒塗の手箱の中に、渡し金、鉄漿沸かし、鉄漿つけ碗、ふし入れ箱、手鏡などが収納されていた。ふし入れ箱の中には「黒江市場町通 倉橋清九郎製 御ふしの粉」と刷られたふし粉入り袋が収められ、黒江でも販売されていたことが判る。また、前歯を黒く染めた部分入れ歯が収められていた点も興味深い。

（３）屏風類

柳川家の部屋を仕切り、装飾した屏風は11点あり、唐人山水図屏風、漢詩屏風、書画貼交屏風などがある。

各屏風の図・書の作者は不詳だが、幕末から明治期にかけて作成されたものとみられ、いずれも柳川家の座敷で用い飾られた調度として、商家の暮らしの一端がうかがい知れる。明治6年作とみられる貼交屏風〔柳川－346〕には、湯浅の豪商菊池海荘の直筆書などもあり、当時の紀州に中心とした文人たちとの交流も認められる。

それぞれの屏風は表具に損傷が認められるもの

の、画面部分には傷みが少ない。今後これらを修理できれば、博物館展示や旧柳川家住宅で活用することが可能となろう。

4. まとめにかえて

以上、今回は柳川コレクションのうち商い具と生活用具を中心に小括したが、柳川家に残されたこれらの資料は黒江の漆器商いと営んだ当家の江戸時代後期から昭和50年代に至るおよそ200年近い一商家のくらしの一端を垣間見る内容を持ち、紀北地域の町場の生活の変遷を知ることができる貴重な資料群となっている。

紀伊風土記の丘には、柳川家4代目平兵衛（二代）の代にあたる文化4年（1807）に建てられた旧柳川家住宅が移築保存されるが、これらの道具類の中には、それ以前の年号銘のあるものもあり、柳川家代々の家人の暮らしを長く支え、時代ごとの家業や家人のくらしの愉しみも感じさせるものが多い。

今後も、これら貴重な生活資料を継続的に分析しながら、柳川コレクションの価値づけと、資料に関する保存と活用について考えていきたい。

【参考文献】

- 柳川和一郎 1969『海南市黒江川端通り 一商家のことども』
私家版
- 和歌山県文化財研究会編『重要文化財 旧柳川家住宅（主屋・前蔵）／旧谷山家住宅移築修理工事報告書』1971
- 千森督子 2005「近世から近代初頭における紀州黒江の空間構成と漆器業」『生活科学研究誌』3巻
- 藤森寛志 2017「【資料紹介】柳川コレクション資料目録（1）」『紀伊風土記の丘研究紀要』第5号
- 蘇理剛志 2021「【資料紹介】柳川コレクション資料目録（2）－漆器類を中心に－」『紀伊風土記の丘研究紀要』第9号
- 蘇理剛志 2022「【資料紹介】柳川コレクション資料目録（3）－陶磁器類を中心に－」『紀伊風土記の丘研究紀要』第10号

表1 柳川家資料目録 (No. 260 — 364)

ID	名 称	素材	点数		時 代	西 暦	備 考
			件	点			
柳川-260	船筆筭	木・鉄	1	1	—	—	虫損多い
柳川-261	帳場筆筭	木・鉄	1	1	—	—	
柳川-262	帳場筆筭	木・鉄	1	1	—	—	上段部を欠く
柳川-263	懸硯	木・鉄	1	1	弘化2年	1845	止金具に破損あり
柳川-264	銭箱	木・鉄	1	1	—	—	
柳川-265	銭箱	木・鉄	1	1	—	—	売付報告書(明治米油組合:大正期)2冊あり
柳川-266	印箱	木・鉄	1	1	—	—	印鑑・朱肉あり
柳川-267	小物箱(書簡入?)	木	1	1	—	—	
柳川-268	投書箱	木	1	1	—	—	
柳川-269	圖箱(六角)	木・鉄	1	1	—	—	
柳川-270	詩絵硯箱	木・漆	1	1	—	—	硯石・墨あり
柳川-271	算盤	木・竹	1	1	嘉永3年	1850	
柳川-272	算盤(箱入り)	木・竹	1	1	—	—	
柳川-273	真空管ラジオ	木・金属	1	1	—	—	スピーカー部分なし
柳川-274	紺法被(黒江 柳川)	木綿	1	8	—	—	
柳川-275	笠類(木箱入り)	藤・竹・菅	1	6	—	—	木箱は別物(吉野○三)
柳川-276	菅笠(角笠)	菅	1	12	—	—	一部梱包(和歌山市新雑賀町 近江楠松)
柳川-277	ゲートル	木綿	1	2	—	—	1足+半足分
柳川-278	折烏帽子・中啓・帯	漆・紙・麻	1	3	—	—	
柳川-279	侍烏帽子・硯・水差・香合・唐木	漆・銅	1	7	—	—	柳川平吉新舗の広告(大正期)
柳川-280	床几	木・革	1	1	—	—	
柳川-281	木枰台(紙袋入)	木	1	12	—	—	組立式、用途不明、包紙に墨書
柳川-282	箱提灯(家紋入)	鉄・紙・木	1	2	—	—	木箱は別用か
柳川-283	丸行燈	木・紙・銅	1	1	—	—	
柳川-284	提灯箱(入叶)	木・紙	1	1	—	—	フタは新作
柳川-285	提灯箱(入叶)	木・紙	1	1	—	—	
柳川-286	提灯箱(入叶)	木・紙	1	1	—	—	フタは新作
柳川-287	提灯箱(入叶)	木・紙	1	1	—	—	フタは新作
柳川-288	提灯箱(三ツ柏)	木・紙	1	1	—	—	フタは新作
柳川-289	提灯箱(入叶)	木・紙	1	1	—	—	フタは新作
柳川-290	提灯箱(三ツ柏)	木・紙	1	1	—	—	柳川家住宅に配置
柳川-291	提灯箱(入叶)	木・紙	1	1	—	—	柳川家住宅に配置
柳川-292	提灯箱(蔦)	木・紙	1	1	—	—	柳川家住宅に配置
柳川-293	提灯箱(蔦)	木・紙	1	1	—	—	柳川家住宅に配置
柳川-294	提灯箱(蔦)	木・紙	1	1	—	—	柳川家住宅に配置
柳川-295	提灯箱(蔦)	木・紙	1	1	—	—	柳川家住宅に配置
柳川-296	提灯箱(蔦)	木・紙	1	1	—	—	
柳川-297	火鉢(桐)	木・銅	1	1	—	—	
柳川-298	火鉢(桐)	木・銅	1	1	—	—	柳川家住宅に配置
柳川-299	銅製品(使途不明)	銅	1	2	—	—	
柳川-300	火鉢(銅、丸型)	銅	1	1	—	—	
柳川-301	火鉢(銅、方型)	銅	1	1	—	—	
柳川-302	火鉢(銅、丸型)	銅	1	1	—	—	No 300 と同一
柳川-303	火鉢(銅、丸型)	銅	1	1	—	—	No 300 と同一
柳川-304	火鉢(銅、丸型)	銅	1	1	—	—	No 300 と同一
柳川-305	火鉢(銅、丸型)	銅	1	1	—	—	No 300 と同一
柳川-306	火鉢(銅、丸型)	銅	1	1	—	—	No 300 と同一
柳川-307	火鉢(銅、丸型)	銅	1	1	—	—	No 300 と同一
柳川-308	火鉢(漆、円筒型)	漆・銅	1	2	—	—	
柳川-309	火鉢(銅、富士)	銅	1	1	—	—	
柳川-310	煙草盆(楓)	木	1	5	嘉永6年	1853	
柳川-311	用途不明(水やりか)	銅	1	1	—	—	墨書「日方町 山縣」
柳川-312	水桶	木	1	1	—	—	焼印「大阪新町通壱丁目 樽久」製
柳川-313	鉄漿箱	漆・銅	1	8	—	—	お歯黒用の道具一式
柳川-314	蚊遣炉	陶	1	1	—	—	内側に硫黄粉が付着
柳川-315	バスケット	藤	1	20	—	—	指輪箱、小箱、ハンカチ、ポシェット、がま口、革ケース、貼紙 等
柳川-316	岡持	漆	1	1	—	—	
柳川-317	魚箱	漆	1	1	—	—	朱印「入叶」
柳川-318	味噌つき桶	木	1	1	—	—	焼印「大阪くろく町さのやばし西入 樽藤」製
柳川-319	蒸籠	木	1	1	昭和22年	1947	竈は破損
柳川-320	一升樹・五合樹	木	1	2	昭和22年	1947	墨書銘「柳川四郎」
柳川-321	燗鍋(銚子鍋)	鉄	1	1	—	—	墨書「銚子鍋 一対」
柳川-322	茶釜	鉄	1	1	—	—	

柳川 -323	鍋（蓋付き）	銅	1	1	—	—	
柳川 -324	鍋（蓋付き）	銅	1	1	—	—	木蓋のつまみ欠
柳川 -325	銚子	錫	1	1	—	—	No. 35 と同一
柳川 -326	片手鍋	銅	1	1	—	—	
柳川 -327	台十能	銅	1	1	—	—	
柳川 -328	裁縫こて	鉄	1	1	—	—	
柳川 -329	押し抜き（枅、竹筒）	木・竹	1	5	—	—	箱入り
柳川 -330	吸物椀（黄丸石州形）	漆	1	5	—	—	No. 167 と同一 椀＋蓋 2 点、蓋のみ 3 点
柳川 -331	膾皿（南京菊皿）	磁	1	2	—	—	10 人前、「子霜月五日改 内壺人前不足」
柳川 -332	吸物椀（青内朱形砧形）	漆	1	8	—	—	No. 185 と同一
柳川 -333	焼物皿	磁	1	10	—	—	No. 218 と同一、1 枚模様違い
柳川 -334	椀蓋・小吸	漆	1	3	—	—	椀蓋 2 点（別種）、小吸 1 点
柳川 -335	双耳花瓶	銅	1	1	—	—	袋入り
柳川 -336	猪口	銀	1	5	—	—	底に黒江町章あり
柳川 -337	ミヤコ式吸入器	金属・ガラス・プラスチック	1	1	—	—	東京浅草、倉橋医療器製作所
柳川 -338	水準器	木・ガラス	1	1	—	—	
柳川 -339	おしどり置物	磁	1	2	—	—	屏風立てか
柳川 -340	屏風（六曲：漢詩）	紙・木	1	1	—	—	落款あり、表具損傷
柳川 -341	屏風（六曲：唐人山水図）	紙・木	1	1	—	—	落款なし、表具損傷、断裂あり
柳川 -342	屏風（六曲：唐人山水図）	紙・木	1	1	—	—	No. 341 と一対か。表具損傷、断裂あり
柳川 -343	屏風（六曲：唐人花鳥図）	紙・木	1	1	—	—	落款あり、表具損傷
柳川 -344	屏風（六曲：漢詩）	紙・木	1	1	明治 36 年	1903	No. 340 と一対か。「壬寅年」銘。表具損傷、断裂あり
柳川 -345	屏風（六曲：書画貼交）	紙・木	1	1	明治 9 年	1876	表具損傷、「乙亥」「丙子」銘
柳川 -346	屏風（二曲：書画貼交）	紙・木	1	1	明治 6 年	1873	表具損傷、「明治癸酉」銘
柳川 -347	棚下屏風（八曲：書画貼交）	紙・木	1	1	文久 2 年	1862	表具損傷、「壬戌」銘
柳川 -348	棚下屏風（六曲：書画貼交）	紙・木	1	1	明治 33 年	1900	表具損傷、「明治庚子」銘
柳川 -349	棚下屏風（四曲：書画貼交）	紙・木	1	1	—	—	
柳川 -350	枕屏風（二曲：花鳥図）	紙・木	1	1	—	—	
柳川 -351	小襖（鳳凰図）	紙・木	1	2	昭和 3 年	1928	「昭和三年戊辰晩秋、柳濤写」
柳川 -352	扁額（「□柳舎」）	紙・木	1	1	—	—	表具損傷
柳川 -353	扁額（「神乃徳…」）	紙・木	1	1	—	—	表具損傷
柳川 -354	車長持	木・鉄	1	1	—	—	
柳川 -355	駕籠	木・竹・畳	1	1	—	—	
柳川 -356	水甕（台枠付き）	陶・木	1	1	—	—	
柳川 -357	風呂桶	木・竹	1	1	—	—	薦入り、箍はずれ
柳川 -358	オルガン	木・金	1	1	—	—	
柳川 -359	竹製てぼ	竹	1	1	—	—	
柳川 -360	火鉢	陶	1	1	—	—	
柳川 -361	長持覆布（蔦紋）	木綿	1	4	—	—	
柳川 -362	長持覆布（桐紋）	木綿	1	2	—	—	
柳川 -363	蚊帳	麻	1	1	—	—	
柳川 -364	ヘラ	竹	1	多数	—	—	山崎帝国堂の木箱入り。漆へらか



写真1 船筆筒（柳川 -260）



写真2 鉄漿箱（柳川 - 313）



写真3 書画貼交屏風（柳川 -349）

和歌山県立紀伊風土記の丘の万葉植物園の現状について

松下 太

1. 万葉植物園とは

中村正寿 1974『紀の万葉・ふるさとの植物をたずねて』によると、次のようにある。

「資料館より民家集落を経て、西方の山手に通ずる園路をゆくと、万葉植物園に至る。ここには、面積 1650 平方メートルにわたる常緑と落葉の広葉樹林の間に、各種の植栽苑を設けて、紀州に関係ある万葉植物が自然のすがたで植えられ、通路にしたがってゆけば、おのずから万葉植物が観賞できる。」

このように、万葉植物園とは、文字通り万葉植物に特化した植物園である。

入り口付近には、ハギやヤマブキなどが植えられ、1 段上がると、ネムノキやクリ、スモモ、ネズミサシなど、さらに上がると、水生植物を植えている一角がある。そこには数個の直径 50 センチ程度の水瓶を埋め込み、カキツバタやアサザ、ショウブをはじめ、10 種ほどの水生植物を栽培している。さらに、上にはエゴノキ、コノテガシワ、ウメなどが植えられ、最上部の展望台周辺にはイロハカエデを中心に何種類かのカエデ類を植えていて、来園者にはもみじ園として親しまれている。

展望台からは遠く和泉山脈が望まれ、万葉人が行き来したであろう紀の川沿いの平野も一望できる。

2. 万葉植物とはなにか

前後したが、万葉植物について簡単に説明する。

「万葉集」は 7、8 世紀に編さんされた日本最古の歌集であり、4500 首あまりの歌が収められている。様々な人によって、様々な歌が詠まれているが、その歌に詠われた植物を「万葉植と呼んでいる。ただし、古い呼び名で書かれているので、それが現在のどの植物なのかは諸説あり、明確で

ないものも多い。

たとえば、「いちし」がヒガンバナであるという説と、エゴノキであるという説があるように、一つの古名が、現在の複数の植物の呼び名と考えられるものや、チガヤを「つばな」と呼んだり、「あさぢ」と呼んだりするように、一つの植物に複数の古名が存在するものもある。さらに、現在のように植物が細かく分類されておらず、よく似た仲間の植物群の総称としてその古名が用いられているものには「たで」や「はぎ」「すみれ」などもある。また、中には、青菜全般をさす「な」や灌木全般をさす「しば」など、種類を特定できない古名もある。

一般に万葉植物はだいたい 150 種程度と考えられている。それは、研究者ではないごく普通の人々が日常的に暮らす範囲の中で目にする植物の大部分を占める。

このように万葉植物は特別な植物ではなく、人々の暮らしの周りによく当たり前に生えている植物である。その色、姿、生態、生育環境などを的確に捉えている万葉人の観察眼と感性には驚くばかりである。

万葉植物園では、万葉歌碑や、万葉集を紹介する立て札などを設置している。中でも重厚な石で



写真1 ウメ「春されば まづさく庭の 梅の花・・・」の歌碑

作られた、アセビ、サクラ、スギ、ハマオモト（はまゆう）、ウメの5基の歌碑には、和歌山県を代表する書家であり、書写教育の第一人者である故天石東村先生の麗筆による万葉歌が刻まれている（写真1）。

3. 現在の万葉植物園について

2022年度末において、万葉植物園では植物は112種が確認されているが、そのうち万葉植物は85種である。それは、園内で見られる万葉植物の7割強にあたり、万葉植物園という名称にふさわしい。

近年全国的にナラ枯れの被害が拡大しており、本園も例外ではない。万葉植物園以外の森林でも多くの立ち枯れのコナラ、クヌギなどの大木を、安全確保、環境保全の観点から伐採、撤去する作業がなされている。万葉植物園でもその作業が行われ、胸高直径数十センチに及ぶコナラ、クヌギ、シラカシを数本伐採した。そのために日照環境が大きく変化した部分も少なからず出てきた。それでそこに入り込んできた外来植物が目立つようになってきた。顕著なものとしては、アレチヌスビトハギを筆頭に、タカサゴユリ、セイタカアワダチソウ、アメリカセンダングサ、コセンダングサ、メリケンカルカヤなどが挙げられる。

さらに、カラスザンショウ、フウ、タラノキ、シイノキなどの木本も多く生え始めている。また日照条件とは関係ないが、モウソウチクが年を経る毎に生息域を拡げてきている。



写真2 オケラ

4. 万葉植物園で見られる主な万葉植物について

(1) オケラ（キク科） 古名 うけら

園の中央より下、東側に20株ほどが植栽されていて、秋に白い花を咲かせる。園内の所々に自生地はあるが、まばらである（写真2）。

(2) エゴノキ（エゴノキ科） 古名 ちさ いちし

園内上段の階段横に1本植栽されている。5月頃、白い花をたわわにつける。

(3) ミツマタ（ジンチョウゲ科） 古名 さきくさ

園中央、水生植物園の奥に2本植栽されていたが、1本は枯死した。幼木は数本植えられている。春のはじめごろ、花の少ない時期に黄色い球状の花をつける。

(4) コウヤボウキ（キク科） 古名 たまばはき

園中央右側に群生している。秋に白い花をつける。本園内に限らず、園路沿いにも随所で見られる。林床に群生する植物である。

(5) マユミ（ニシキギ科） 古名 まゆみ

園内中段、西の端に1株のみ植えられている。葉が繁っている時期には目立たないが、他の木が落葉する頃から、紅色に色づいた実が目立ってくる。株元がかなり衰弱している。

(6) センダン（センダン科） 古名 あふち

西出入口付近に植えられているが、近くの園路沿いにはさらに大きな木がある。初夏には紫色の花が咲き、秋には実が黄色に色づく。

(7) ヒオウギ（アヤメ科） 古名 めばたま

園内の至る所に生えていると言っても過言でないほどである。オレンジ色の花も観賞に値するが、真っ黒な実もじつに美しい。この実の色から、「め



写真3 ヒオウギの実

ばたま」は黒や闇、髪など、黒い物の枕詞となっている（写真3）。

5. 万葉植物園で見られる動物について

動物は植物とは異なり、移動するので、万葉植物園で何種類を確認したかはそれほど大きな意味を持たない。ここでは、数種に限って報告することにする。

昆虫

（1）アサギマダラ チョウ目 マダラチョウ科

秋、渡りの時期にフジバカマなどの花に集まることはよく知られているが、ここでは5月にネジキの花に吸蜜に飛来したのを確認した（写真4）。

（2）シンジュキノカワガ チョウ目 コブガ科

幼虫の食草であるニワウルシ（シンジュ）に大量に発生する外来生物である。近年本県でもよく見られるようになってきた。ここでは2022年に初確認し、12月にも生存していたことから、成虫で越冬しているものと思われる。

（3）メスグロヒョウモン チョウ目タテハチョウ科

雄と雌で色や模様が大きく異なる。雄は他のヒョウモン類に似た黄色っぽい色彩だが、雌は名前のとおり黒っぽく、別種のように見える。

（4）タイワントビナナフシ ナナフシ目 ナナフシ科

ナナフシ類に共通する極めて細長い昆虫である。もっとも特徴的なことはその体色で、淡いクリーム色である。ナナフシでは珍しく羽を持ち、飛ぶことができる。

（5）キョウトアオハナムグリ コウチュウ目コガネムシ科

ハナムグリにしては大型の甲虫で、クヌギの樹

液などに集まる。雄にはよく似たシラホシハナムグリのような艶がなく、全体がビロードのようである。個体数は極めて少ない（写真5）。

（6）スジクワガタ コウチュウ目クワガタムシ科

一見コクワガタに似るが、雌や小型の雄の上翅には縦に筋が入る。近年、いわゆるクワガタブームで、子どもに限らず大人までもがクワガタムシの採集に熱心である。朽ち木を壊したり、トラップを仕掛けたりして、クワガタムシの生存を脅かしていることを憂いている。

鳥

万葉植物園では年間を通して次の26種の鳥類を確認している。

メジロ アオジ ヒヨドリ ツグミ シロハラ
アカハラ ジョウビタキ ルリビタキ ビンズイ
ハクセキレイ セグロセキレイ キセキレイ ヤマガラ
シジュウカラ エナガ コゲラ キジバト
ハシボソガラス カワラヒワ アトリ サメビタキ
コサメビタキ エゾビタキ シメ イカル ウグイス

上空を飛ぶものでは、6種類を確認している。

トビ ハイタカ オオタカ ノスリ ハチクマ
ハヤブサ

その他の動物

アオダイショウ シマヘビ ヤマカガシ ニホンマムシ
トカゲ SP. ニホンカナヘビ ニホンアマガエル
ウシガエル セトウチサンショウウオ クチベニマイマイ
イセノナマイマイ ウスカワマイマイ ニッポンマイマイ
ナミギセル ナミコギセル ヤマナメクシ ほかにムカデ ク

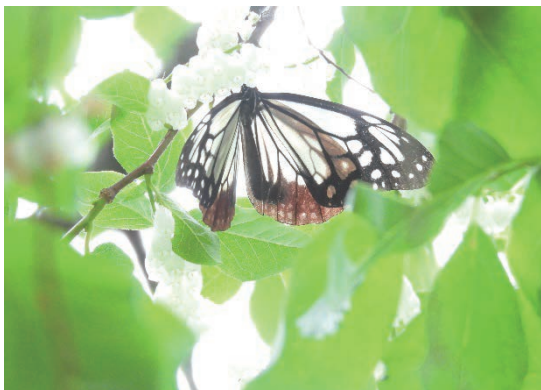


写真4 アサギマダラ



写真5 キョウトアオハナムグリ

モなどの中間も多く確認している。

6. 今後の課題

(1) 散水

特に夏季の散水には苦勞する。電源の投入、揚水ポンプの始動、ホースの運搬などの作業に、時間と労力が必要なのである。さらに、散水栓が1箇所なので、散水できる範囲に限られる。そのため、前述のような環境で栽培されている水生植物の管理が特に気がかりである。これは改善すべき最優先課題と思われる。散水設備が充実し、できれば池や湿地を作り、その水循環など、水環境が改善されれば、植物にも、水辺に生きる生物にもより良い環境を提供できるようになり、生物相のより一層の充実が期待できる。

(2) 柵

通路と植栽域を区別するために設けられている柵は、老朽化が著しく危険でもある。理想としては柵を無くすことが最善であるが、来園者の安全確保や、植物の管理上必要なのであれば、必要最低限の高さのものに改善すべきである。また、木製のものや、竹製のもの、ロープを張ったものなど様々で統一感に欠ける。順次改修が望まれる。

(3) 通路

通路には花崗岩（みかげ石）が敷かれている。雨天時などにはぬかるみを歩くことなく快適に散策できる配慮であろうが、一方でとても滑りやすく危険なこともある。また、階段については、東側のものはコンクリート製であり、昇降に支障のないようできているが、花崗岩製の中央のものや、西側のものでは段が高すぎたり、低すぎたりで、そうっていない。

(4) 除草、剪定

万葉植物園は万葉植物のみを栽培展示する植物園ではない。万葉集が作られて時代もそうであったように、数多くの植物のなかに「万葉植物」が生えていたのであろう。よって、そのような植物とともに生きる姿を来園者には観賞してもらいたい。しかし、散策に支障をきたし、危険であったり、極端に美観を損ねたりする場合には、適切かつ最

小限の除草、剪定を行い、できるだけ自然の植生は保全したいと考えている。よって、樹木は庭木のような剪定、整枝をするのではなく、その植物が持つ樹形が保たれるような枝打ちが望まれる。またその適切な時期を見極め、植物の生育にストレスがかからないような配慮が必要であろう。ただし、万葉集の時代には生育していなかった外来植物については、積極的な除草が必要である。

(5) 万葉のアピール

植物園の名称に「万葉」を冠しているのだから、今よりさらに万葉集との関わり深め、来園者の興味関心に働きかけるものにしなければならない。そのためには万葉歌やその解説などの掲示をさらに増やしていく必要がある。過剰に大きく立派なものではなく、簡易的なものでもいいから、全ての万葉植物の付近にはそれが詠まれた万葉歌の紹介でできるような手だてが必要である。石碑、高札型の立て札、私製の解説など様々であるので、それも順次統一感を持たせながら充実させていきたいものである。

(6) 万葉植物の充実

園内には植えられたり自生したりしているのに、万葉植物園で見られないものも多くある。たとえば、カラタチ、ケヤキ、テイカカズラ、カナムグラ、スベリヒユなど多くの種類の植物が、周辺では見ることができるともかわらず、万葉植物園では見られない。よってそれらの植物を植栽し、さらに万葉植物園を充実していく必要がある。「おもひぐさ」と呼ばれたナンバンギセルは数年前までは見られたと聞くが、少なくともここ4年間は種を蒔いているにもかかわらず、その花を見ていない。ニワトコも枯死して久しい。一方、タチバナやクワの幼木は成長しつつあるし、イチイガシも種を蒔いている。今後も少しずつ万葉植物の種類を増やしていき、来園者の期待に応えるよう、万葉植物園のさらなる充実を図りたいと思っている。

シンポジウム「紀伊半島をめぐる海の道と文化交流」講演記録

川島秀一・中園成生・穂積裕昌・寺前直人・蘇理剛志・萩野谷正宏

本稿は、和歌山県立紀伊風土記の令和3年度秋期特別展「海に挑み、海をひらくーきのくに七千年の文化交流史ー」の関連事業として実施したシンポジウムの講演記録である。

シンポジウムは、「紀伊半島をめぐる海の道と文化交流」と題し、紀伊半島沿岸における縄文時代から近代に至るまでの海の道を通じた日本列島各地との交流の歴史と特色に注目し、これを広く周知する目的で開催した。内容は、民俗学及び考古学を専門分野とする4名の講師による講演、当館職員による特別展関連の報告、コーディネーターとして櫻井敬人氏を迎えた討論で構成され、次のプログラムにより実施した。

日時：令和3年11月21日（日）10：00～16：30
場所：和歌山県立紀伊風土記の丘
内容：

講演1「カツオ漁と紀州人」

川島秀一（東北大学災害科学国際研究所）

講演2「古式捕鯨時代の紀州と西海の交流」

中園成生（平戸市生月町博物館 島の館）

講演3「伊勢・志摩・熊野の海人の実像を追う」

穂積裕昌（三重県埋蔵文化財センター）

講演4「海と生きた縄文・弥生時代の人々ーかれらが海に乗り出した理由ー」

寺前直人（駒澤大学）

報告「紀伊半島沿岸における海の生業と文化」

蘇理剛志・萩野谷正宏（当館）

討論 コーディネーター：櫻井敬人（太地町歴史資料室）

本稿は、上記シンポジウムのうち、4名の講師による講演録を掲載したものである。なお、講演録は、蘇理・萩野谷が当日の記録を基に文章化し、講師が加筆修正した。

カツオ漁と紀州人

川島秀一

はじめに

ただいまご紹介いただきました川島です。私は、宮城県気仙沼に先祖の墓がありまして、そこに移住した川島家初代の元禄8年（1695）の墓には、「紀州牟婁郡田辺住 川島清左衛門」とあり紀州田辺の出身です。私の家は皆さんと同じ紀州人でもあるんです。川島家の始祖伝承では、カツオ漁とは関わりなく、わが先祖は気仙沼に来たときには六十六部だったと伝えています。このように、私自身が紀州と非常に関わりがあるので、若い時からそういう思いで紀伊半島を歩いてきた経緯があります。また、私はかつて気仙沼市史編纂室に18年ほどおりましたので、その過程で紀州とのつながりについて幾つか気になることができました。

（1）紀州海民の他国出漁

まず川島家の墓から4年前、元禄4年（1691）です。このころ気仙沼の唐桑にはすでに紀州からカツオ一本釣り漁が伝わっていますが、気仙沼市大島にある駒形家文書に、そのころ借家をした者の書上が残っています。この記録の中には「（紀州）日高の郡、印南之者に御座候」ということが書いてあって、カツオ漁でやって来て大島に住むことになった事が分かります。

印南の漁民については、どういう動きをしたか興味があったんですが、どちらかというと鯉節との関わりの方が強いと思っています。例えば、印南の角屋甚太郎（初代：生没年不詳）が土佐清水まで行って、ここで「臼磔（うすばえ）」というカツオの漁場を発見したとか、カツオ一本釣りを伝えたという話があります。その後、二代目甚太郎が土佐の宇佐に鯉節を作る方法を伝えたという事績も残っています。二代目夫婦は、土佐から印

南へ帰ってきた後、宝永4年（1707）に起こった大津波で死亡してしまいます。その子孫の与一は心中事件を起こして、印南の印定寺では供養の十夜法要を旧暦10月6日から15日間やっていましたが、その時には二代目夫妻の位牌も出して供養するという事で、調査に行ったことがあります。いま二代目甚太郎の墓は無いんですが、境内の宝永地震津波供養碑がその墓代わりにされて、心中事件を起こした与一と奉公人のオサナを供養した比翼塚というのが寺に残っています。

印南のカツオ漁にまつわるモノでどういうものが残っているかといいますと、高知県土佐清水市戎町という、つい2、30年前までカツオ一本釣り船の漁船員を輩出した町があります。その路地裏には「地藏さん」と呼ばれる石仏がありまして、貞享2年（1685）に紀州日高郡印南浦の与太助が建てたという記録がハッキリ残っています。

初代甚太郎が発見した「臼磔」という漁場は、土佐清水市松尾の近くにあります。ここのカツオ一本釣りの漁師さんに話を聴くと、今でも「臼磔」には潮が集まってそこにキビナゴが集中して来るのでカツオの良い漁場だと言っています。初代甚太郎はそこを発見したのですが、後になって松尾に印南の角屋与三郎という角屋五代目の弟にあたる方が住み着いて、松尾を繁栄に導きました。今でも松尾に与三郎の墓が残っておりまして、地元の人々は皆「旦那さんの墓」と言って慕っています。

印南からのカツオ漁や鰹節を通しての移住の事例は他にもありまして、例えば千葉県千倉には印南から来た土佐与市の墓があって、墓碑銘は文化12年（1815）になっています。また印南ではないんですが、私の住んでいた気仙沼にも土佐節与兵衛の墓というのがあります。この人の事績は墓碑銘にも書いてあって、土佐与市よりもっと後の時代の人で、房総半島の千葉県勝浦市の興津から来て土佐節を定着させたということが書いてあります。

ただここで注意されるのは、この「与兵衛」というのは通称なんです。さきほどの土佐与市にも実名があって、「与市」もある意味通称なんですね。

また土佐清水市戎町にあったのは印南の「与太助」というんですが、おそらくこの「与」の字には何か職業を伝えるという意味合いがあるのではないかな。これらの人々に共通して「与」の字が付いて、しかも実名でもない訳ですから、そういうことを感じております。

（2）紀州海民の東北出漁とその対応

紀州でも印南から南にかけての一带は、とくに他国出漁が盛んな所です。もともとは上方の漁民の方が他国出漁としては早いです。江戸時代になってからすぐ、摂津佃村の漁民が江戸湾に来て今の佃島を作るとか、和歌山でも北部の漁民の方が早い動きをしています。カツオに限りませんが、加太の漁民が九十九里浜へ行きますし、湯浅の漁民が房総の方へ行き、広川から銚子の外川へ行くなど、そうした動きがまず紀州の北部の漁村から起こってきます。それから、印南とほぼ同じ頃に潮岬にかけての一带でとくに動いてきます。

三陸に来たのは、三輪崎から浦神にかけての「三輪崎会合」と呼ばれた集まりの漁民です。「潮岬会合」は寛永14年（1637）に成立しており、周参見から潮岬を経て下田原までの間の19ヶ浦が会合に参加して、年に3回ほど潮御崎神社に集まっていろいろな取り決めをして、地先専用の漁業権をここで強調するわけです。それとは別に、「田辺会合」は江川から日置まで6ヶ浦で、「三輪崎会合」が浦神から三輪崎まで7ヶ浦で組織されます。ここでの取り決めはカツオ漁が中心なのですが、とくに餌イワシに対する規制が中心だったようです。外来の船を地先の海から追い出すことが目的ですが、イワシを獲るにも3月3日から9月9日までは網ではなくタモを使うことなど厳しい規律がある訳です。そこで、なぜ三輪崎の漁師が三陸へ漁場を求めたかということを考えますと、やはり南（串本）の方には行き難かったことが大きな原因があると思っています。

延宝5年（1677）には紀州の漁船が三陸沖にやって来ますが、その後あちこちで訴訟を起こしました。宮城県石巻市狐崎の平塚家文書を読むと、紀州と三陸との漁法の違いがハッキリ分かる記述

があります。すなわち、紀州船には14、5人乗っている、それから餌イワシは棒受け網で獲って、生きたイワシでカツオを獲っている。船に米をたくさん積んで中海でカツオを釣っているとあり、そのためにカツオが岸に寄り付かなくなっていると牡鹿半島の狐崎の漁師が藩に訴えています。一方、仙台藩の漁船には、だいたい10人位しか乗っていない。また、1日に2、3人が乗り替わって、陸の仕事、田畑や村役をして交代で船に乗っていて、専門の漁師ではないのです。そういう大きな違いがあって、狐崎のある中海へカツオが来なくなった。しかも、紀州の漁師は生きたイワシを積んで沖で漁をする積極的な漁法ですが、この頃の三陸の漁は「鯉待居（かつおまちおり）漁」と言ってカツオを待って獲っていたという大きな違いがありました。

また、この紀州船は三陸でクジラも獲っていました。三輪崎会合には太地浦も含まれますが、その漁師たちが北へ北へと漁場を開拓していったのです。そのために訴訟が起きる訳で、一番の原因は、宮城県牡鹿半島の遠嶋の漁師は「寄り鯨」とか「流れ鯨」など自分たちの浜に寄って来たクジラを獲ったんですが、紀州の漁師たちが沖でクジラを獲り始めると、浜で拾ったクジラに手負いの傷があるからそれは自分たちの物だと主張して、売上げの半분을紀州船に請求されたことなどが訴訟のきっかけになりました。ただ、牡鹿半島の漁師たちが紀州漁師を排斥しようとした理由には、突き殺されたクジラから出る油が浦々に流れて、海藻やタコ、アワビなどが根付かなくなったこと、それから塩田で塩を作ったので出島（いずしま）とか水浜にあった塩竈に油が着いて塩が作れなくなった、またクジラが浦々に追い込んだイワシを獲っていた遠嶋の漁師は、鯨取りのためにその恩恵に預かることが出来なくなったなど、様々な理由で反対をし始めた訳です。これらの理由の中で私が一番興味のあるのは、明治44年（1911）に青森県八戸市鮫町の東洋捕鯨が漁師たちの焼討ちに遭った事件で、その理由がこの鯨油流出の問題と、イワシを追い込んでくれるクジラを獲ること

が許せない、ということでした。234年経っても、同じような沿岸の漁師と捕鯨との関わりがあった訳です。

さて、その鮫町ですが、ここに「鯨石」というクジラの形をした石があります。この石は2011年の震災でも流されずにありましたが、説明板は流されて、以前あった説明にはこういう昔話がありました。昔、鮫の沖に毎年姿を現すクジラがいて、それを「八戸太郎」と呼んでいた。そのクジラが熊野灘で銚子を打たれ、ようやく鮫の海岸にたどり着き息絶えて、そのまま石になったと語り伝えられる、と書いてありました。

「熊野灘」とあるのはあまりにも具体的すぎて、私はやはり伝説ではないかと思ってあまり気にも留めてこなかったのですが、後で『鮫地区の民俗』を読むと、説明板を書いた山代屋十三代の西村家というのが紀州の三輪崎の出身だとあって、元禄の初めには一戸、家を構えて盛岡藩から蔵番になったとありました。ご存じのように、三輪崎は捕鯨の盛んな所で、この西村家は何か捕鯨と関りがあったために、あえてこの昔話に「熊野灘」と入れたのではないかと。こうした伝承の中にも、いくつか注意すべき点があると思います。

岩手県でも、すでに寛文年間の古文書には伊勢から10人の漁師を抱えてカツオを釣っています。これは宮城県よりも早いんですが、鯉節を「伊勢節」として作っています。ここでは漁法だけではなくて鯉節の製法を伝え、殿様にも献上しています。青森県八戸市には松橋家という廻船問屋がありましたが、そのお墓には「紀州尾鷲村」とハッキリ書いてありまして、東北の北部にも紀州との関りがあったと思われます。

先ほどの牡鹿半島の訴訟が、具体的にどう決着したか分かりませんが、牡鹿半島にも尾鷲出身の平右衛門という人が、貞享4年（1687）に江ノ島（女川町）にいた後、寄磯（石巻市牡鹿町）に定着して、渡辺家という大きな家を作って、近代以降もカツオ船を抱えた家になっています。

もう一つ、私の住んでいた気仙沼市唐桑町にも、「紀州様の御百姓を抱え込んだ」という記録

が鮪立の鈴木家文書に残っています。カツオ一本釣りを「釣り溜め」といいますが、どんどん釣り上げた魚を船に溜めるという意味で、仙台藩の船数をかぞえた記録にも船の型として「釣溜」という名が出てきます。地元の漁師は手習いに真似て、餌イワシの桶を立てて行ったのですが、鮪立では紀州の漁師を積極的に受け入れて「末代之重宝」にしようと抱え込みました。しかし、紀州の漁師は1艘に14、5人が乗って、それを最大5艘抱え込むので一度に70人の漁師に飲食を与えるのですから、それが村の疲弊につながるという批判がありました。ところが鈴木家では、そういう反対を押し切ってカツオ一本釣り漁を習おうとする。先ほどの牡鹿半島の方とは捉え方が違うんですね。そちらでは、沖でカツオを獲れば中海では獲れなくなるので反対するんですが、鮪立では春と夏にはカツオを獲っていなかった、しかも紀州の漁師たちは遠海で、冬に自分たちが獲るメヌケ延縄の漁場に乗り出して釣るので何ら障りは無いと言うのですが、周りの者が妬みでもって反論されています。

春夏は獲らずに秋に獲ったということは、唐桑町小鯖の漁師である小山亀蔵さんが書いたカツオ漁の体験記に、「秋になると嵐をかける(荒模様の)日が多くなりますが、カズナムラ(鰹の群)は岸近くを通るようになるために秋に獲っていた」とあります。紀州の漁師が来るまでは、この秋に沿岸近くまで来るカツオを獲っていた、しかも秋には海の深い所を泳ぐので、水面に浮き上がらせることをするのです。これはエゴエといって、女川町の漁師さんから教わった言葉ですが、カシキというご飯炊きをする14、5歳の若者が餌イワシを投げながら呪いの唱えごとをするというので、私も何人かの明治生まれの漁師さんからエゴエについて聞き書きしています。その後、機械船になって高知や三重のカツオ一本釣り船が三陸へやってくるようになって、以前は秋になるとカツオが深く潜って泳ぐので、「鳥付き」といってカツオの群を鳥で見つけることが出来なくなります。今でこそソナーで11月いっぱいにはカツオ一本釣り

が出来ますが、それまでは10月になると漁を切り上げて高知や三重へ帰郷しました。

それから、最近もう一つ考えたいと思っているのが、この『陸前唐桑の史料』では、鈴木家が批判されたので子どもと一人前の百姓でない者、要するに周縁にいる者にまずカツオ漁を習わせたとあります。私は当初、これは周囲に反対されたので子供らに習わせて、ゆくゆくは唐桑に定着させようと思ったのですが、このこと自体が紀州の習俗というか、組織のあり方としてあったのではないかと思っています。『旧藩時代の漁業制度調査資料』を読みますと、「十歳以上二至レハ炊分釣ト称シテ見習」わせていたという記録があります。これは、カツオの漁場にさえ当れば、釣る技術はそれほど難しくなかったということを示します。カシキも3年目位になると竿を持たせられますが、それだけ技術が要らなかったことと、カツオ漁自体が短期決戦型の漁で、だいたい30分もしないうちに上げてしまいますから人数は多い方がいいし、船はできるだけ大きい方がいいという特質があります。そのために、子供の頃から習わせておくということが大事だと思うようになってきました。静岡県焼津のカツオ漁では、赤ん坊が産声を上げた時から、ゆくゆくは乗組員になるようにカツオを配っていたという話も聞いています。

それだけ、カツオ漁は乗組員の確保というのが大問題でして、カツオ船が多くなればなるほど競合してきます。当たり前ですが、漁がある方の船に人は動きます。今でも高知の一本釣り船などは、故郷に戻って来てまずすることは来年の乗組員を探すことです。一番大変な苦労をするのですが、以前もそれは同じだったと思います。そのために前金を渡して船に乗ってもらうことも行われたようです。岩手県大船渡市でも最初にお金をもらって乗っていたのですが、地元の近世文書によれば、これを「身ノ賃」と呼んでいました。ここでは、大漁を祝い込む正月の予祝行事として子どもたちが「前金勘定」と語って金を貰って歩いたそうですが、子供たちが集まるということは乗組

員も集まるということで非常におめでたい、その年の大漁につながる行事だったんです。そういうことは気仙沼にもありました。福島県相馬市でも、正月二日に男子が「身の錢くれとくれ」という行事がある位に、乗組員の確保は昔から重大な問題であります。

今回の特別展でも展示物された房総の「マイワイ」といわれる祝い着は、三陸沿岸では「カンバン」といいます。カンバンは、大漁があった年に船頭と船主とでやり取りして新たに作ります。乗組員たちはそれを着て、正月の参拝などに全員で行きました。この風習は三陸から磐城あたりに分布しますが、そうすることでこの船は去年大漁をしたということが分かるのですね。一種のデモンストレーションでもありますから、そうすることで乗組員の確保にも効果があったといえます。

こうして、三陸にカツオ漁の技術が伝わった理由はさまざまあると思いますが、単に豊かな漁場があるだけではなくて、背景にある森林資源が重要だったと思います。鰹節を作るためには燃料として薪を非常に消費します。それから水です。リアス式海岸など紀州と同じ地形は、水の確保に非常に有利でした。それからカツオ船を造る船材も、すぐ後ろの山で調達することができました。明治時代の三陸における一般的なカツオ船は8～10人乗りでしたが、明治41年の記録では唐桑にそのクラスの船が224艘あり、それだけカツオ漁が盛んでした。気仙沼町では、船や網を船元に貸した代わりに水揚げは全部うちで引き受けるという、問屋仕込み制度が明治時代に確立しました。

気仙沼湾外の鹿折村では、生イワシのための船曳き網が発達します。この船曳き網もいろいろな変遷があって、昭和8年の津波以後の新網の導入は広島県音戸から仕入れますが、音戸はもとも紀州網が伝わった所です。おそらくは海南市の塩津からだと思いますが、三陸のイワシ網も間接的にですが紀州網を習ったかたちです。岩礁が多く地曳網ができないので、沖捕りの船曳き網が盛んになりました。ただそういう深い湾だからこそ、大型船も係留できるという利点がありました。

その後、機械船が導入されると紀州との関りがまた深くなります。早い時代には房総の船や、尾鷲の船も気仙沼にやってきます。ただし、気仙沼の方もただ待っていたのではなくて漁船誘致をしました。気仙沼にはカツオ船団を迎える利点があります。気仙沼の両脇の湾、志津川湾と広田湾ではイワシが揚がること、氷の確保や漁船の修理、食糧、燃料、乗組員の娯楽などが揃っていました。東日本大震災の年も、船籍をみると宮崎や高知、三重などで全体の半分ありました。要するに、気仙沼はカツオで持っているということで、生鮮カツオの水揚げは20年以上日本一になっています。

(3) ケンケン漁の発達と技術伝承

ただ、この機械化によって資本力のある業者だけが三陸沿岸では残って、小さな浜や村で保有していたカツオ船がダメになってしまいました。そのことは、紀州の方でも同じ現象になっています。ただ、その状況の中で耐えたのが、周参見や田並など枯木灘に面した漁村で行っていた曳き縄漁、つまりケンケン漁なんです。

ケンケン漁は、ハワイから来たと言いつつも、もともとは曳き縄漁の一種な訳です。それがかなり技術改良が行われたと思います。なぜ「ケンケン」と呼ぶのか？というのはいろんな説がありまして、ケンケン鳥の羽根を疑似餌にしたとか、水面をピョンピョン、ケンケンのように跳ねる様とか、漁具一式をそう呼ぶのですが、意味の特定は難しいとされています。串本町田並は、美浜町三尾と同じく「アメリカ村」と呼ばれていますが、こちらはハワイへの出稼ぎがあって、戻ってきた人たちは地元でコペ（コーヒー）を伝えるなど、モダンな生活をしたことで注目されます。田並の人たちも、もとはオーストラリアの木曜島周辺で真珠貝を採っていましたが、次第に日本人が排斥される中で、次に目を付けたのがハワイでした。もともとは農業移民としてサトウキビのプランテーションへ働きに行くつもりだったのが、中筋五郎吉が「ハワイではカツオが喰ってる」と言ったことで、ハワイでの漁業が始まります。ハワイでは昭和40年ごろまでカツオ一本釣りをしたそ

うですが、波が荒いので、日本では左舷釣りが一般的ですけれども、鰻の方に集中して船尾の方で魚を獲ることがあったそうです。この田並の人たちが、ハワイで船じたいを変えてしまいます。それはヨットにヒントを得て、日本型漁船にデッキを張り、センターボードを吊り下げた三枚帆にした「ケンケン船」を日本へ持って帰ってきました。

だから、ケンケン漁というのはある程度、日本人によって技術アップがなされた訳です。擬餌針もそうで、擬餌針には真珠貝を使うことが多いんですが、もともと田並や周参見の人たちはダイバーの経験をしていて、真珠を加工する技術も持っていたので、それを疑似餌に用いることで飛躍的に漁が向上したということです。以前、周参見で中村重治さんというケンケン漁師さんの話を聞いたことがあります。その方の話では、9月彼岸から12月までは一人で対馬に行き、ヨコワというクロマグロの幼魚を獲って、その後は一人乗りの船で福島沖まで行っています。それから銚子、大船渡にも行っています。そして、漁の後は浜名湖の新居や舞阪で水揚げをする。ここはカツオの消費が高知市に次いで全国2位の場所です。そうしたカツオが高く売れる場所に持って行ったそうです。疑似餌にはやはり白蝶貝を使ったそうですが、ある時、対馬の比田勝に行き、兵庫県の船が潜行板を使っていたのを見て、それを導入しました。

潜行板を先に導入したのは、田並より周参見の漁師たちでした。周参見では研究会を組織して潜行板自体も作っていきます。漁師さんはこれに自分たちで色を塗ったりするんですが、周参見で一手に作ったものが全国に広がっていきます。潜行板の流通もとても興味深いもので、当初ケンケン漁が真っ先に広まったのはかつての潮岬会合の村でした。会合自体は明治初めに解散しますが、地域のつながりは伝統として残って、浜ごとにこれを受け入れていきます。さらにここに潜行板が付くと、戦後になってかなり広い範囲に受け入れられまして、串本の船主は昭和38年に銚子の漁業組合に対して小型漁船に潜行板使用の浮き曳縄

漁法を指導したということで、銚子の組合長から感謝状を受けています。

銚子で話を聞きますと、外川の漁師さんなどは灘（沿岸）の方は曳縄で、沖の方は一本釣りで住み分けをしていると仰っていました。房総の鴨川市浜荻で聞いた時には、一般にケンケン漁という呼び名は定着せずずっと「ひっぱり」と呼んでいました。それでは、房総の方ではケンケン以前に曳縄があったんじゃないかと思って調べてみたら、鴨川市天津ではイタメンという、とても小さい同じ原理の板を使ってメジカを獲っていました。これは兼高さんという方が土佐清水に研修に行った時に覚えて持ってきたそうで、ただこれを使ってもそれほど漁獲量が上がる訳でもなく商売にはならなかったといひます。潜行板がきてようやく商売になったという話でした。ですから、漁法というものはいつも一方的に伝わるものではないということが分かってきました。

おわりに

最近思うのは、技術についてはよく「伝播」という言葉を使いますが、この「伝播」という言葉は自然現象に任せてばらまくような雰囲気があるのですが、じつはそこに一人一人の工夫と導入の動きがあった。「伝播」というと空間的にとらえてしまうのですが、「伝承」は時間的な言葉なんで、「伝播」を「伝承」という言葉で置き換えながら一つ一つの漁法を見ておく必要があるのではないかと思います。ケンケン漁もカツオ一本釣り漁もそのまま漁法が伝わった訳ではないです。伝わらない所もあるし、喜んで積極的に導入した所もあるという、双方向性を捉える必要があるのではないかと思います。

今回のテーマである「海の交流」でいうと、これは私が研究テーマとしてカツオをやろうと思ったきっかけなんです、私が「気仙沼から来た」というと三重県や高知県の漁師さんはすぐにこちらの意図を分かってくれました。実は、カツオを通しての婚姻関係もありまして、今回の震災後に、気仙沼に住む孫を亡くしたという漁師さんに三重県志摩市の和具で出会いました。遠方にも被災者

はいですね。それくらい三陸と紀伊半島との関りは大きいのです。昔の和具は、男は一本釣り船に乗り、女は海女さんになって、男は10か月ぐらい家を離れて港町で遊んでいたことも、奥さんたちは知っているわけです。

私がある時、海女さんたちの小屋に行くと、「気仙沼から来ました」と言っていた時には、お婆ちゃんの海女さんが「ああ、それならうちの旦那の子供かも知れないね」(笑)って言われたんですよ。「とてもいい男だったよ」と言われて、私もまんざら悪い気はしなかったんですが(笑)、その一言で三陸と紀州との海を通じたつながりのことがよく分かった、という出来事がありました。

時間になりましたので、この辺で終わりたいと思います。有り難うございました。

古式捕鯨業時代の紀州と西海漁場の交流

中園成生

皆さんこんにちは。私は日本の西の果て、長崎県平戸市生月町からやって参りました中園と申します。川島先生は東の方から、私は西の方から来ているという事実が、紀州人の広範な活動を表していると思います。今日は紀州人の捕鯨についてお話しさせて頂きたいと思います。

(1) 日本捕鯨史における紀伊半島周辺漁場と西海漁場の位置づけ

日本の捕鯨を自然環境からみた場合、やはり日本列島の海の豊かさというものがあると思います。北から南まで列島が伸び、太平洋、日本海、瀬戸内海などの多様性に富んだ海の環境が、世界有数の漁場の基盤になっていますが、それらの海には、最大の哺乳類であるクジラも多く生息していて、夏には北の海で餌をたくさん食べ、冬には南の海に下って子供を産み育てたりして、また北に帰っていきます。そのように列島の沿岸を南北に往來するクジラを日本人は昔から捕ってきました。

日本の沿岸で捕れるクジラは、今はミンククジラやゴンドウクジラ、ツチクジラという比較的小型のクジラが中心になっていますが、江戸時代にはセミクジラやザトウクジラがたくさん捕られて

いました。またコククジラは沿岸に来るので、中世から瀬戸内あたりでは捕られていて、伊勢湾で捕鯨が始まった頃にも捕られています。ナガスクジラは、江戸時代の突取捕鯨や網掛突取捕鯨ではなかなか捕れないクジラで、泳ぎが非常に早くて深く潜ることもでき、音にも反応しないので網に追い立てる事もできません。しかし、近代捕鯨になってノルウェー式砲殺法が導入されると、専らこれを捕るようになります。あとマッコウクジラは西海漁場には来ず、紀州や太平洋岸の漁場でよく捕られていました。

世界で産業化した捕鯨(捕鯨業)をみた時、北大西洋では、最初はヨーロッパから始まってアメリカに移っていきませんが、こうした欧米捕鯨業文化は18世紀~19世紀には全世界に拡大しており、この段階ですでに資本主義と結びついて積極的に捕獲を行いながら、漁場を拡大していつています。ただこの段階の欧米捕鯨業はまだ帆船や手漕ぎのボート、手投げ鉈を使うなどの技術的制約がありました。しかし19世紀以降に始まったノルウェー式砲殺捕鯨では、資本主義と機械力・科学力が一体となって近代捕鯨業が成立して、世界を席卷していくことになります。

一方、日本では、それとは別個の形で捕鯨業が成立していきます。16世紀後期から始まり20世紀初頭まで古式捕鯨業が行われますが、その後も、古式捕鯨で確立した流通や、クジラ食に対する嗜好などがベースとしてある上に、近代捕鯨業が導入・確立していつています。

日本における捕鯨の時代区分は大きく四つからなります。最初は、産業化する以前の「初期捕鯨時代」、次に産業化して人力で行われた「古式捕鯨業時代」、ノルウェー式砲殺法を行う「近代捕鯨業時代」、それに昭和63年の商業捕鯨禁止以降の「管理捕鯨時代」が加わりますが、最後の時代は近代捕鯨のように捕りっぱなしではなく、資源量に気を配りながら捕るという形に変わっています。今日お話しする紀州の関係では、古式捕鯨業時代の前期と中期が中心となります。

古式捕鯨の漁法には大きく「突取」、「網取」、「銃

殺」、「砲殺」の四つのカテゴリーがあります。この分類は水産学で使われる主漁具という概念から捉えたもので、おもに何を使って獲物を捕っているのかで分類しています。鉾などで突いて捕る漁法が「突取」です。「網取」は、断切網とか定置網など網で捕る漁法です。ここで一つ厄介なのが、従来「網取式捕鯨」という言い方がされてきた漁法で、この言い方では網で捕るとよく誤解されるのですが、実際には、網で絡めて捕るのではなく、網でクジラの自由を奪って泳ぎが遅くなったところで鉾を突く突取に属する漁法です。網はあくまで抵抗具として補助的に使い、捕る道具はやはり鉾なので、最近「網掛突取法」と言っています。「銃殺」と「砲殺」はどちらも火薬で発射する火器を使いますが、発射装置が手持ちか、船に台座で固定しているのかで分けています。今日お話しします紀州の捕鯨では、「突取」に属する突取法、網掛突取法が関係しています。

（２）古式捕鯨業時代前期－紀州系突組の西海漁場進出－

古式捕鯨業が最初に始まったのは戦国時代の事です。『西海鯨鯢記』という史料では、元龜年中に三河国内海の者が7、8艘の船で、師崎付近で突取捕鯨を行ったとあり、伊勢湾に面した知多半島南端の師崎あたりで操業が行われています。『西海鯨鯢記』には、その漁法が紀州に伝わり、そこから西海に伝わったと書かれています。

突取法が九州方面に最初に伝わったのは元和2年（1616）とされますが、どこに伝わったのかははっきりと分かりません。場所が分かる記述としては、寛永元年（1624）に紀州藤代（藤白）に住む藤松半右衛門という人が船10艘で平戸の度島（たくしま）に来たとあります。翌年も紀州の與四兵衛という人が、度島の北にある的山大島（あづちおおしま）に来たとあります。これらが、紀州系の突組（突取法を専らおこなう鯨組）が九州北部の平戸付近に来た事を記した最初の記録とな

第1表 日本捕鯨の歴史概要

時代区分	時代の画期	実施された漁法(捕鯨法)		主な捕獲対象 ※太字は特に重要な対象	消費、流通における特徴	主な文化要素
		主要な漁法	その他			
初期捕鯨時代	縄文前期 (BC4000)	突取		不明	[縄文]鯨底土器 [縄文～古墳]鯨骨製品 [中世]鯨油、鯨肉	
			断切網			
古式捕鯨業時代	前期 元龜年間 (1570～73)	突取	断切網	背美鯨 座頭鯨、克鯨 槌鯨、抹香鯨	流通圏の拡大 ・鯨肉目的〔紀州、土佐〕 ・鯨油(灯油)目的〔西海、安房〕	
	中期 延宝5年 (1677)	網掛突取	突取 断切網 定置網	背美鯨、座頭鯨 長須鯨、克鯨 槌鯨、抹香鯨	完全利用の確立 農薬用鯨油の需用拡大 藩による鯨油一括購入	捕鯨図説、鯨供養 鯨伝説、鯨唄
	後期 弘化年間 (1844～48)	網掛突取 (改良)	突取、断切網 定置網、銃殺 各種砲殺	長須鯨 槌鯨	鯨肉需要の拡大	捕鯨図説、鯨供養 鯨唄
近代捕鯨業時代	前期 明治32～39年 (1899～1906)	沿岸型ノル ウェー式砲殺	その他砲殺 銃殺	白長須鯨 長須鯨 、座頭鯨 鰯鯨、槌鯨	鯨肉中心	ナショナルリズム
	後期 昭和9年 (1934)	工船型ノル ウェー式砲殺	沿岸型ノル ウェー式砲殺 その他砲殺	白長須鯨 長須鯨 、抹香鯨 鰯鯨 、 ミンク鯨 槌鯨、ゴンドウ 鯨	〔工船型〕戦前は鯨油中心、戦 後は鯨肉中心 冷凍鯨肉	捕鯨オリンピック 鯨保護
管理捕鯨時代	前期 昭和63年 (1988)	工船型ノル ウェー式砲殺 (調査捕鯨)	沿岸型ノル ウェー式砲殺	ミンク鯨 槌鯨、ゴンドウ鯨	鯨肉高級化	商業捕鯨モatorium 調査捕鯨 小型沿岸捕鯨
		工船型ノル ウェー式砲殺	沿岸型ノル ウェー式砲殺 定置網(混獲)	ミンク鯨 、 ニタリ鯨 鰯鯨		商業捕鯨再開

ります。

『西海鯨鯢記』で面白いのは、さまざまな銚の形が描かれている事です。ここに並んでいるのは銚の発展段階といいたいでしょうか、銚がどんどん進化している状況が分かります。初めに登場するのは銚先が外れる離頭銚で、師崎辺りで使われた銚ですが、これは東に伝わって、房総半島のツチクジラ漁などでも使われています。次に登場するのが、「返り」という先端から反対向きに突き出たトゲが、左右対称になっている固定銚です。これは紀州の捕鯨を描いた屏風『捕鯨図屏風』(大阪市歴史博物館蔵、1624年頃)に出てきますが、銚先が柄に固定されています。次に返りが左右非対称の銚が出てきます。これには「デンチウモリ(殿中銚)」と書いてあり、明暦年間に大村の深澤組で使うようになったものだと記されています。この殿中銚は、九州の方から紀州・尾張などに逆輸入されています。「大萬銚」というのは殿中銚が大型化したもので、吉村組という平戸の突組が導入したとあります。このように、離頭銚から固定銚ができ、さらに左右対称の銚先から非対称の銚先になり、さらに大型化していくという流れがあるのが分かります。

捕鯨が最初に行われた伊勢湾周辺では、室町時代になると伊勢方面から京都へ鯨肉が流通していた事が史料から分かります。つまり捕鯨の専門化以前から、伊勢湾では鯨肉を得るための何らかの動きがあって、そうした状況のなかで組織的な鯨組が発生してきたと思われるのです。『張州雑志』が編まれたのは18世紀後半ですが、当時の師崎の捕鯨の中に、古い時代の突取法の要素が残っていました。離頭銚の使用もそうですが、獲れた鯨を運搬している様子を描いた場面では、鯨の上で大漁を祝って酒盛りをしている近くに赤い部分があり、そこに柱が横に渡してあります。これは船にクジラを固定する仕掛けで、クジラの胴体に横方向に穴をあけて柱を刺し通して固定するやり方です。後にこれは、包丁で鼻を切って縄を通し、柱に縛って固定する方法に変わりますが、それ以前の古い方法が描かれています。

『張州雑志』の師崎の解体の場面では、めいめいに肉を切り取っていて、組織的な解体方法ではない印象があります。そうした師崎の突取法が、後に房総半島に伝わったと考えられます。同地では醍醐組が長く操業していますが、江戸湾の入口にある深い海溝で餌を食べるツチクジラを獲っていました。醍醐組では網掛突取法を導入しなかったのですが、それはツチクジラが深く潜るので網を仕掛けることが出来なかったからです。

師崎から西の方、紀州方面の状況について、「捕鯨図屏風」に描かれた捕鯨の様子を見ると、左右対称の固定銚を使っています。この場面で面白いのはクジラが汐を吹く様子で、絵では斜め前方に吹っていますが、これはマッコウクジラの吹き方です。また口の中に歯が描いてあるのもこのクジラの特徴です。九州方面にはマッコウクジラがいないので、この絵は紀州の捕鯨の様子を描いたものだと考えられます。この屏風ではクジラを解体する様子や運ぶ様子も描かれていますが、屋根も無いところに大きな竈が二つ据えられ、何かをぐつぐつと煮ている様子も紹介しています。これはクジラの皮を細かく切って、釜で炒って鯨油を作る様子です。

九州の方では、紀州の突組が平戸付近で捕鯨を行い、対馬や壱岐の方でも操業しています。紀州系突組の操業が一番確認できるのが、五島の中通島にある有川湾で、ここでは1630年代から40年代に18組の突組が操業していますが、その殆どが紀州系で、出身地として藤白、湯浅、広、古座など紀州の地名がたくさん出てきます。これらの突組は、有川湾の沿岸に納屋場という拠点を造って、その前の海で操業しています。

ただずっと紀州の突組だけが西海で操業したのではなく、寛永2年(1625)には與四兵衛組が平戸の北の的山で操業したという記録がありますが、翌3年には平戸の平野屋作兵衛が度島で操業するようになっていきます。この動きをどう解釈するかですが、紀州系突組が2年来た後、平戸の突組が出来てすぐ捕鯨ができたのかは疑問です。それについて考えた時に一つ思うのは、今のプロ野球と同じで、オーナー

が替わっただけなんじゃないかという事です。つまり出資者が平戸の平野屋で、紀州系の突組を丸ごと買収したんじゃないか、そう捉えるのが一番分かりやすいかなと思っています。

寛永4年(1624)になると、平戸の方から宮之町組、明石組、吉村組などが平戸周辺で操業し、山川組に至っては平戸を離れて壱岐で操業するようになり、一挙に平戸系突組が多数展開してきます。どうしてそういうことが可能だったかという、この頃の平戸にはオランダ商館があり、オランダや中国と盛んに貿易をしていて莫大な利益を上げていたので、それを資本として捕鯨に投資したんじゃないかと思います。興味深い事に、当時のオランダ人は世界で一番クジラを獲っていました。彼らがどこでクジラを獲っていたかという、北極海にあるスバルバルという所に拠点を設け、帆船やボートで海に出て、捕らえたクジラを陸へ持って帰ってきて油に加工するということをしていました。彼らが獲っていたのもセミクジラとほとんど変わらないホッキョククジラなので、もしかしたらオランダ人が、平戸の人に「クジラは儲かる」というサジェスションを与えていたのかも知れません。

面白いのは、西海漁場ではクジラの解体の時にはロクロという人力ウインチを使ってまず皮を剥ぐんですが、この技術は紀州や土佐には無いんです。ですから捕獲技術は間違いなく紀州から来ているんですが、解体技術については他の系統があるのではないかと思います。そのように考えていろいろ見ていると、オランダ人は帆船の滑車装置を使って引っ張りながらクジラの皮下脂肪を剥いでいる事が当時の捕鯨を描いた絵から確認出来ます。これは後のアメリカ捕鯨でも同じです。だからクジラの解体法については、オランダ人が皮を剥いだ方が早いということをお教えたのかも知れません。あと面白いのは、平戸オランダ商館の日記の中に、寛永9年(1632)に商館員が江戸に上った時、平野屋作兵衛の召使が鯨油を積んだ船で江戸に来て、その売ったお金を商館員が借りたという話が出てきます。平野組は前述したように度島

でクジラを獲っていた記録があるので、平戸など西海漁場で捕った鯨油をわざわざ江戸まで運んだ事が分かります。江戸時代初期の西海漁場では、鯨油の生産に重点を置く形で捕鯨が成り立っていたのです。

当時の突組の編成を吉村組の『新組鯨覚帳』で見ると、人数がだいたい300人位、鯨船が17艘位でやっている事が分かります。また陸上には油納屋と呼ばれる施設が2棟あって、鯨油生産が中心だったことが分かります。吉村組の捕獲数は最低4頭、最高28頭で、平均14頭ですが、その後の網組になるとこれの2倍以上となり、多い時には50頭位獲っている組もありました。

突組の頃の紀州と西海との連絡についても、『西海鯨鯢記』に記事があり、「鯨舟の行くこと一昼夜に百里、往年紀州の住人喜多嶋庄右衛門と申す者、五島の大宝より紀州若山に船水夫を選びて帰船に遣わす、三百六十里ほどの回路を一七日に往還す」とあります。これは非常に早い記録ですが、おそらくは紀州の鯨取り達がたくさん平戸の突組に雇われて紀州と西海の間を往復していて、なかには鯨船ごと雇われる場合もあったと思われます。大宝というのは五島南部にある福江島の西の果てにあるので、そこから和歌山まで鯨船で往還したことが分かるのです。

当時、西海の鯨組に紀州の漁民が雇われたことが分かる史料が、寛文元年(1661)の「指上ケ申五嶋行鯨突羽指共之口書」(那智勝浦町蔵)で、いま展示されているので是非ご覧ください。この史料は明暦・万治・寛文年間ごろ(1658～1661)に、五島灘などで操業する突組に雇われた三輪崎・宇久井の漁民の一覧です。ここに多く出てくるのはハザシ(羽指)という各船の指揮官を務める役として雇われた人達です。つまり、1630～50年代に西海の突組で指導的な役割を果たす人材は紀州から雇われていた事が分かります。この史料では「平嶋」と書かれていますが、ここに出てくる突組は全て平戸系なので、「ヒラトウ(平戸)」と呼んだのを書き間違えたのかと思います。

当時、西海で最も盛んに捕鯨が行われていた場

所が壱岐で、東部の前目の漁場が日本一、北部の勝本の漁場が第2位と言われていましたが、ここでも紀州系突組が操業していました。『熊野太地浦捕鯨史』に掲載されている「鯨組作法如先銀子持口相口物之事」という史料に出てくる鯨組名を見ると、平戸系とか大村系とか西海の突組の組主名が並ぶ中に太地の和田忠兵衛が出てきます。この史料は、寛文4年（1664）に壱岐で操業する鯨組の間で、このようなクジラの捕り方をした場合にはどのような分け方をするという事を細かく取り決めたものです。

（3）古式捕鯨業時代中期一網掛突取法の導入一

ただ、そのように西海で活躍した突組も段々と衰退していきます。理由としては、クジラを10頭鉬で突いた場合でも獲れるのは2、3頭で、残りの7頭は逃げてしまいましたが、逃げたクジラも鉬傷を受けていて途中で死んでしまうからです。さきほどの川島先生のお話でも、沿岸の人たちが傷ついたクジラを拾ったことが出てきましたが、無駄にクジラを殺してしまっている状況もあったようです。そういった状況を打開するために編み出された漁法が、「網掛突取法」だったと考えられます。

延宝5年（1677）に紀州の太地浦で網掛突取法が発明されたという事実は間違いありません。太地の網掛けでは、クジラをグルッと包囲するように網を掛けるのが特徴です。『紀州熊野浦捕鯨図屏風』を見ると、仕留めたクジラは船で浦に持ち帰り、ロクロを使って浜に引き上げていますが、『熊野浦捕鯨図巻』を見ると、解体で皮を剥ぐ作業にはロクロを使っておらず、包丁でめいめい切っていることが分かります。また陸上には壁の無い簡素な建物があり、そこで鯨油を製造していますが、西海のやり方とは随分違っています。もしかしたら、紀州藩などに納める分の油は鯨組が（先に紹介したような施設で）作り、それ以外は肉を問屋に売り出し、そちらで加工する流れがあったのかもしれませんが。

土佐の方でも、天和3年（1683）に紀州から網掛突取法が伝わっていますが、土佐の方でもクジ

ラの網掛けは包囲するように行われています。『捕鯨図』を見ると、クジラは浜にロクロで引揚げられて、皮を引っ張っている様子も少し見えますが、あまり効率的ではないように見えます。

一方、西海の網掛けでは、クジラの進行方向に弓なりに三重に広げ、音でクジラを追い立てて網に掛けるのですが、グルッと包囲はしない形です。網掛突取法が西海にどのように入って来たのかについては、大村藩の『郷村記』という史料にいくつかの説が書かれています。一つは、大村の深澤儀太夫という人が延宝6年（1678）に五島魚ノ目でクジラを掛け捕る事をやったという記録です。もう一つは、貞享元年（1684）に深澤儀太夫が大坂に行った際、熊野の網組の話聞き、熊野の方に行っているいろいろ子細を見てから、壱岐勝本浦で始めたという話です。この『郷村記』の記述について、延宝6年と貞享元年のどちらが正しいのか、以前から見解が分かっていたのですが、考えられるのは、発明されて直ぐにそれをそのまま導入するのは難しいと思われるので、前年、太地で網掛突取捕鯨が始まったことを噂で聞いた深澤儀太夫が、当時有川で行われていたイルカの断切網漁用の網を転用して、クジラにかぶせて捕る試行的な漁を延宝6年に始め、その後太地の漁の情報を収集して貞享元年から本格的に始めるという、二段階で導入された事が考えられます。

西海漁場でこの網掛突取法をどのように行っていたのか、生月島を例に簡単に紹介すると、クジラが来たのを確認するため、山見という小屋をあちこちに配置し、発見すると狼煙をあげて生月島で待機する人々に知らせました。そうすると多数の勢子船が海に出て、クジラが島の前に来ると、北の方にある網代に向かうよう、音を立てて追い立てていきます。網代では、弓なりに網が張ってあります。なお当時、生月島で操業していた益富・御崎組の編成は600人位で、西海の標準的な網組は3セットの網を用いているので「三結組」と呼ばれていました。クジラが網代で網をかぶると、そのまま網を破って逃げていきますが、隣の網との間は細い縄で繋いでいるだけでわざと切れやす

くなっていました。切れた残りの網は回収し、繋ぎ合わせて網を復活させて、すぐに次の網掛けが出来るようにしていました。クジラが被った網も解体する時に回収して修繕しました。

網のかかって動きが鈍ったクジラに鉋を打ち込みます。鉋は、基本的にはクジラを傷つけるのではなく、伸ばした縄を船に括りつけ、船をクジラに曳かせて疲れさせるための道具です。そうして泳ぎが遅くなったクジラに、剣という道具を刺して深手を負わせていきます。そして腹腔に達する傷を負わせて海水が入り込むと、肺を圧迫するので、クジラは窒息死するのだと言われています。そうしてクジラがほとんど動きを止めた所で、ハザシがクジラに取りついて鼻の辺りに包丁で穴を開け、穴に縄を通して、2艘の船の間に渡した柱に縄を括りつける「持双掛け」を行います。師崎でやっていた、帆柱を突き刺す方法よりは随分と合理的になっています。そうしてクジラの体を確保した所で、これ以上苦しませるのは忍びないという事で、念仏を3遍唱え、「三国一や、大背美捕りすまいた」と叫んだと言っています。

捕れたクジラは、解体するため納屋場に運ぶことができます。納屋場では海岸に護岸を造り、その上にロクロという人力のウインチをたくさん設置して、三方からクジラに掛けられるようにしています。この辺りが紀州や土佐の設備と異なるところです。ロクロで引っ張りながら包丁で切れ目を入れて皮を剥いていきます。その後その他の部位も順番に処理して、切り分けた肉は納屋場に運びます。納屋場は、大納屋、小納屋、骨納屋など、扱う部位と加工の仕方が異なる施設で構成されていて、鯨油を製造したり、塩漬けの肉を作ったり、骨も細かく切ってから煮て油を作り、残った骨も砕いて肥料の原料にしました。

製品のうち、鯨油は家の明かりの灯油や、田んぼに撒いて農薬として利用されました。肉は食べますが、当時は白身（皮下脂肪）の方が好まれたようです。ちなみに油分を好んで食べる習慣は江戸時代に日本人に広まったようです。天ぷらなどもそうですが、昨日私は大阪でかすうどんを食べ

てきました。あの美味しさはやはり出汁の上に浮いた油ですね。そういった油を賞味する食習慣の中で、鯨肉も皮下脂肪の部分が食べられるようになったと思います。

骨から油を煮出した後の骨粉も、煙草や菜種の肥料として使われました。骨はカルシウムなので、日本のような酸性土壌では土壌改良に非常に有効な肥料だったのです。鯨油はウンカを退治するための農薬として重要でしたが、クジラは日本の農業を支える非常に重要な資源にもなっていました。またスジは綿打ちの弓の弦に、ヒゲはバネの用途に使われ、カラクリ人形のゼンマイ、袴の肩の突っ張った部分、また花魁の髷の型にもクジラひげが使われていました。クジラが遊里文化にまで貢献していたというのは興味深い話です。

鯨肉の流通では、漁場で捕れたものを海路で運んで、陸揚げをして内陸に運ばれるという状況がありました。初期には鯨肉は畿内方面の高級食材として流通したのですが、その後、庶民の味として広く普及していきます。鯨肉の需要が鯨油の需要より大きくなったことで、明治時代に捕鯨が不振になった時、鯨肉に適したナガスクジラとかイワシクジラなど筋肉質のクジラに需要が生じたことで、捕鯨は息永らえる事ができました。その後、近代捕鯨業に移行出来たのも、鯨肉の需要があったからです。私が聞いた話では、和歌山県南端の串本には近代捕鯨の基地があったのですが、貨車に氷を積んで鯨肉を他所に出していたそうです。日本の近代捕鯨の導入は、古式捕鯨の頃に作られた鯨肉の需要や流通が元になって進んだ所があるのです。

食文化でいうと、代表的なクジラ料理としてすき焼きがあります。江戸時代に生月島で作られた『鯨肉調味方』という鯨肉料理のレシピ本がありますが、この中に、鯨肉は酒で溶いた味噌、醤油につけて鋤焼にしてもよい、という記述が出てきます。実はこれが鋤焼という言葉の初出になります。しかしここには、古い鋤を熾火の上に渡して鯨肉を焼く料理だと書いてあり、今でいうと鉄板焼きのような料理です。但しこの頃には、現在

の鋤焼と同じ作り方の「煎焼（いりやき）」という料理も作られていました。

古式捕鯨業時代の後期になると急速に不漁となり、とくに弘化年間（1844-48）には壱岐で捕れたクジラが激減していますが、そういった状況の中で古式捕鯨が不調になっていく状況があります。その原因となったのが、アメリカの前近代捕鯨（古式捕鯨業）だと考えられます。アメリカでは帆船を母船としてボートを降ろしてクジラを獲って、解体は舷側で行い、加工は船上で行って、出来た鯨油は船槽の大樽に入れて、それが一杯になると母港の東海岸へ帰るという操業形態を取っていました。日本近海での操業が盛んになった事で、日本の古式捕鯨業はだんだんと厳しい状況になっていったのです。

おわりに

最後に、紀州の鯨捕り達の果たした役割についてまとめたいと思います。古式捕鯨業時代の前期、突取法が伝播していく中で、紀州系突組の人達は尾張から突取法を導入し、外洋の大型クジラの捕獲を可能にしました。固定鉗を使うようになったのは、セミクジラなど大型のクジラを狙うようになったからで、離頭鉗だとクジラの厚い皮下脂肪の表面に刺さり、引っ張るとすぐに抜けてしまうので、根元の茎の部分が長い固定鉗を使う必要があったと思われます。

そのように鉗を発展させたのは紀州の鯨捕り達だったと思いますし、それをさらに土佐や西海漁場に伝える役割も果たしています。ただ、突取法を導入した西海漁場では、平戸の商人たちが突組の経営に携わるようになる中で、漁具や鯨油の生産設備の改良などを行い、捕鯨業をさらに発展させていったという流れもありました。

さらに古式捕鯨業時代の中期になると、網掛突取法が登場します。これは太地浦で発明された画期的な漁法で、世界にこれと同じ漁法はありません。これも紀州から土佐や西海に伝わって、西海では深澤組が最初にこれを導入しますが、網掛けというアイデアを生かしながら独自の網掛けのスタイルを作っていきます。

なぜそのように網掛けの方法が変わったのかというと、紀州では網の製造とか麻苧の網を使った技術が確立していたので地元でできたのですが、西海は当時、漁業の後進地域だったので、大型の苧網の製造や運用の技術がまだ十分ではなかった。だから瀬戸内海辺りから人を雇ったのですが、具体的には広島県の田島あたりから雇って網のパートを任せたので、イワシとかタイとかを獲る網の技術を転用して鯨網の製網や運用を行い、独自の方法を作りました。その漁法（西海式網掛突取法）が西海各地に伝わり、効率的な解体や加工を行う納屋場と組み合わせることで、西海は日本一の漁場へと発展していきます。そのように見えてくると、日本の捕鯨業の種を作ったのが、紀州の捕鯨漁民だったという事が分かります。

これで私の発表をおわります。ご静聴ありがとうございました。

伊勢・志摩・熊野の海人の実像を追う

穂積裕昌

はじめに

ただ今ご紹介にあずかりました三重県埋蔵文化財センターの穂積です。海人と書いて「アマ」、海人の実像ということでお話します。

私は、三重県の伊賀という山国の出身ですが、小学生のときに特別列車で行く夏海水浴という行事があり、和歌山県の湯浅海岸へよく行きました。学生時代には、和歌山市木ノ本の車駕之古址古墳の発掘調査に参加しました。また、長崎県大村湾岸にある伊木力遺跡の発掘調査に参加した際は、縄文時代中期の阿高式系という鯨の脊椎骨を敷いて作った土器が出土しました。土器の底にその圧痕が残っているんですね。私はあまり泳げませんが、こうした海浜部の調査には比較的好縁がありました。それではよろしくお願いします。

まず、スライド写真は陸側から見た神島、答志島、菅島です。鳥羽湾は、こういう島々に囲まれている非常に波穏やかな所です。今回は、伊勢、志摩、熊野の3つの地域をお話しさせていただきますが、そういう海の特性や漁業などとの関係を

お話したいと思います。

(1) 伊勢国の潟港と海人の動き

まず、最初は伊勢です。スライドは伊勢の海から昇る初日の出を撮った写真です。昨夜は、和歌山市加太の民宿に泊まったのですが、加太という、大嘗祭のときに、アワビ、サザエを供献した漁村として大変伝統のある地域です。現在、漁村の民宿としては1軒しか残ってないそうですが、たっぷり加太の食文化も堪能しました。その宿のご主人がおっしゃるには、「我々のところは夕日が綺麗やね。朝日は出えへんけど」。しかし三重の海は逆ですね。写真のように朝日が出る。ヤマトから最も近い朝日です。ヤマト王権が東へ向かうのは、この太陽、朝日を求めたのかなと、私なりに解釈しています。

次は伊勢湾の地図です。知多半島があり先端が師崎、その北方、湾の最奥部にアユチ（年魚市）潟、味蜂間海という汽水域が広がっています。現在の熱田神宮や名古屋城のあるあたりまで台地になっており、近くまでずっと湾入しています。江戸時代は、熱田の宮から三重県の桑名までは七里の渡しで、東海道も海で通じていました。非常に遠浅の海岸ですから、漁業としては貝類やボラなどが中心になってきます。

愛知県側では、愛知県を代表する弥生遺跡である清須市の朝日遺跡では骨角器も出土しますし、知多半島では塩を作る遺跡もあります。三重県側では、桑名市で中縄貝塚、蛸塚貝塚、蛇谷貝塚などの貝塚が発見されており、特に中縄貝塚では骨角器や各種の土錘も出土しています。貝塚といっても古墳時代がメインで、貝類はマガキが中心です。ところが、鎌倉時代ぐらいからはヤマトシジミとハマグリが中心になります。木曽三川の木曽川、揖斐川、長良川のうち、桑名を流れているのが揖斐川ですが、河川の堆積が進み、古墳時代当時よりも陸化が進んで海がどんどん遠ざかりつつあることがわかります。桑名の赤須賀漁港といえば、ハマグリです。揖斐川河口はプランクトンが豊富なのか桑名のハマグリは大きいです。ハマグリには、在来のハマグリとチョウセンハマグリ

二種類があり、縄文時代の貝塚からも出ます。桑名は普通のハマグリです。ハマグリは殻がやや左右非対称、チョウセンハマグリは左右対称気味です。桑名のハマグリは大きいので、お椀に1個だけでの十分です。ちなみに私は、素人が美味しく食べるにはしゃぶしゃぶが一番かと思います。スライドのように食べるともう、凄い美味ですね。こういったものを、桑名の人々はたくさん食べていたことが、中縄貝塚の調査からわかってきます。その中縄貝塚からは、愛知県の濃尾平野と同じような骨角器が出ていますので、ハマグリなどの貝を採取するだけでなく、沿岸や河川の漁業、当然、アユも遡上しますから、内水面の漁業もセットであったのだらうと思います。

残念ながら、志摩半島は別ですが、現在の伊勢湾西岸では、漁具などが出土する遺跡は少なく、やはり貝塚が形成されないと骨角器や鉄器などはなかなか残りません。そういった意味では、実態が不明の部分が多い。もっとも、土製品の錘（おもり）は出土していますので、網漁をしていたことがわかります。それ以外のことが今一つ分かっていない。ただ、志摩半島と異なる点は、伊勢湾には平野が伴うことで、水田も非常に多いということです。

例えば伊勢国の旧河曲郡域をみてみましょう。ここでは、鈴鹿市を流れる金沢（かなさい）川の河口部に潟地形が復元でき、私は「河曲津」と仮称しています。潟には、胃袋の瘤状潟と、細長く帯状に連なる帯状潟があるのですが、河曲津の基本は帯状潟で、そこに小さな瘤状潟がセットで存在したのではと考えています。そして、河口部を見下ろすように、2基の前方後円墳を含む岸岡山古墳群があり、北方には画文帯神獣鏡という5世紀後半頃の鏡が出土した塚越古墳群があります。金沢川とその支流の田古地川の河口部には、集落遺跡もたくさんあります。岸岡山には須恵器を焼いた窯もあり、その須恵器は知多半島、渥美半島、それに伊勢湾岸に広く流通しているんですね。

一方で当地は、穀倉地帯として水田も非常に発達しています。古代の河曲郡には海部（あま）郷

がありますが、奈良県の平城宮から出土する木簡では、海産物ではなく、つき米、ついたお米ですね、これを送っていたことが分かっています。河口部の遺跡からは土鍾も出土しますので、海産物生産も行っていたと思いますが、それだけではない。複合的な生産体系を取っていたと思います。

現在の鈴鹿市南部を流れる中ノ川河口部には、同じように帯状潟と瘤状潟で形成された仮称「庵芸津」が復元でき、周囲に、三角縁神獣鏡が出土した赤郷古墳や、多くの武器類が副葬された経塚古墳があります。さらに南側の津市北部、志登茂川河口部の仮称「窪田潟」では、現在の三重大学の地にある鬼が塩屋遺跡では関東系の鬼高式土器が出土しており、海を介した交流がわかります。潟の最奥部にある六大A遺跡では、準構造船、つまり古代船も見つかっています。六大A遺跡では、東日本屈指の量となる韓式系土器や初期須恵器、それに朝鮮半島などで多く出土するような送風管とみられる筒形土器も多数出土しています。また、出土した準構造船の堅板は、準構造船部材の中では屈指の大きさで、大きな船が港津の最奥部まで乗り入れていたことが分かります。

六大A遺跡では土鍾はたくさん出土しているので河口部の汽水域で網漁は行っていたと思いますが、骨角器などは出ておりませんので、志摩のような専門的漁業集団というものは存在しなかった。むしろ、鉄器加工の痕跡や、韓式系土器、初期須恵器などから、いろいろな物品を作り、流通させる拠点のひとつとして、渡来人も一定程度いただろうと考えております。

さらに南側、松阪市にある西肥留遺跡からは、尾張・三河・志摩半島とも共通する骨角器が出土しており、伊勢湾をぐるっと囲む形で共通する漁労文化が存在していたことがわかります。今回の展示で固定銚と紹介されている翼状のかえしをもつ銚です。このタイプの銚は、尾張の朝日遺跡や高蔵遺跡、東三河の瓜郷遺跡など弥生時代から古墳時代にかけての遺跡や、渥美半島の保美貝塚、鳥羽湾口の大築海島にある大築海貝塚、それに鳥羽市石鏡の白浜遺跡からも出土しています。

そして、松阪市宝塚1号墳の船形埴輪。これは後で熊野との関連で取り上げますが、刀や蓋（きぬがさ）をつけた船が出土しています。

さらに、松阪市佐久米大塚山古墳では、金銅装の冑が出土しています。この冑は、大阪府堺市の大山古墳、いわゆる仁徳陵古墳ですとか、千葉県木更津市の100 mを超える前方後円墳・祇園大塚山古墳、大阪府岬町の淡輪古墳群など国内で10例ぐらいの類例しかありません。どれも錚々たる古墳です。それがわずか40 m程度の小さな佐久米大塚山古墳からも見つかっている。

なぜこのような古墳からこのような冑が出土しているのか、このことを解く鍵が『万葉集』にあります。持統上皇が孫の文武天皇へ位を譲ったのち、亡くなる3か月前に、三河へ行幸します。その時、乗船した場所が円方（＝形的・的潟）です。上皇が乗船するわけですから、ここがヤマト王権にとっての東の外港、つまり東国へ乗り出す時の港であり、おそらく持統上皇より以前から整備が始まっていて、佐久米大塚山古墳の被葬者はその港湾管理に関わっていたのではないのでしょうか。付近には服部氏と麻績氏という伊勢神宮の古くからのマツリである神衣（かんみそ）祭に関わった豪族や、磯部という集団が存在しました。

海浜部から櫛田川を遡った多気町にも、その磯部との関係が想定される磯部上神社（式内社）があります。近傍の石塚谷古墳では、魚と首に紐が付いた鳥、つまり鵜飼いを表現した銀象嵌の大刀が出土しています。6世紀末から7世紀頃のもんです。岐阜県関市の小瀬鵜飼と岐阜市の長良川鵜飼の鵜匠さんは宮内庁式部職で、現在もアユを皇室に献上されているそうですが、その鵜匠さんにこの大刀の実測図をお見せたところ、「あっ！鵜じゃないですか。しかもこれ、水中で魚を狙ってる鵜ですよ」と教えていただきました。伊勢では、このような内水面の漁業で鵜飼も行われていただろうと考えられます。

『日本書紀』雄略3年には、斎王・拷幡皇女（稚足姫皇女）と阿閉国見、別名を磯特牛、この「磯」というのは、「磯部」の磯ですね。それに盧城部

連武彦とその父・枳莒喩らに関わって、盧城川（雲出川の古名）で鵜飼の真似事をしたとするくだりがあります。これは古代では一志郡になるのですが、その付近で鵜飼いをしていると。先ほどの鵜飼の表現のある石塚谷古墳は櫛田川の隆起ですが、伊勢ではこのような鵜飼にかかわる伝承もあります。

ところで、松阪市の阿坂というところは、古代には一志郡に属していたのですが、『古事記』には「阿耶訶」（アザカ）でサルタヒコが比良夫具に手を挟まれて溺れたとあり、その文末に「島之速贄を献る時に、猿女君等に給うぞ」とあります。「贄」とは、天皇家に供献する食材ですね。新鮮な食材で、山のものもあれば、海のものもある。「島」とは志摩国の「志摩」と同義で、志摩から贄を供給したことの起源譚となっています。

（２）海の国志摩の海人と海産物生産

これからいよいよ志摩の話になります。志摩国は、元々は志摩郡の一郡だけだったのが、ある時に答志郡と英虞郡に分かれて、それぞれ郷が属していました。レジュメにも書いてありますが、ここでは木簡を取り上げます。志摩国に関連する木簡について、藤原宮や平城宮からみつける木簡は大きく３種類に分かれます。１番目は地名、人名、品名がすべて書いてあるもので、「調」と記されたものがある。「調」と書いて「みつぎ」とも読みます。人名、地名、品名も全部あるものは調の木簡と考えられます。調は、律令期の都の役人の俸給などです。

一方、それとは別に贄というものがあります。天皇家の食前に載せられるものです。特殊なもので、その木簡がおそらく２番目、３番目だと思いますが、特に３番目、これは地名も何も書いていませんが、各種のアワビが出てくるんですね。これは志摩の贄木簡ということで一致しています。なぜ志摩のアワビと分かるのかというと、平安時代の文献である延喜式の中で、その旬に送られる各種のアワビがほぼ志摩のアワビであり、それらと木簡の名前に共通性があるため、これは志摩の木簡だろうとわかるのです。

次にエビで、蒸しエビや焼きエビというのもあります。実は、カニであれば、古事記に応神天皇の記事で越前のカニがでてきますが、古代の文献でエビはあまり出てきません。出雲国風土記に少しエビの記述がありますが、エビはあまり出てこない。ただし、木簡に蒸しエビ、焼きエビが、地名も一切なくあるのですが、これも私は志摩ではないかなと思います。生きていても冬であればなかなか死なないエビ、そうです。イセエビです。和歌山かもしれませんが、この辺りもしくは志摩から送られているのではないかと思います。

問題は２番目の、国名が未記載で、地名、郷名＋品名の記載のある木簡。これについては、調の木簡という説と贄の木簡という説がありますが、大阪大学の市先生がおっしゃっていますが、平安時代の延喜式の段階では調の品目であるが、木簡が書かれた奈良時代の段階では、これは調とは書かれてないので、贄だろうということです。この３種類の木簡が志摩にはあるのです。ちなみに、紀伊の木簡は、少し書き方が志摩とは違います。

それぞれの地域に何が出ているかは資料にまとめておりますので、ご覧いただければと思いますが、志摩の海産物は非常に海藻の名前が豊富です。各種の海藻、海苔もありますね。魚類はタイ、カツオ、クエ、コノシロ、スズキなど。また塩漬けや干物があります。貝類では、内膳式、延喜式に出てくるものには、「味漬」のアワビや「玉鰩」、「御取鰩」、「夏鰩」などが書いてあります。平安時代の文献と奈良時代の木簡ですので、当然書き方は変わっているけども、各地のアワビがあるということでは志摩ではないかということであります。サザエですとか、イガイとか色々なものがあり、アワビでもいろいろな種類のアワビが出ている。ほとんどがアワビですね。サザエも若干ありますが、志摩では少ない。逆に紀伊の牟婁郡は結構サザエがあります。先ほどのお話した蒸しエビや焼きエビ、それからナマコなども志摩から送られるものとして出てきます。なお、ナマコは先ほど紹介した古事記の「島の速贄」に、ナマコだけが喋らないために口が裂けるという話があります。

志摩は、答志郷、和具郷、石可郷、神戸郷、伊椎郷ですね。それから甲賀郷、船越郷、神戸郷、それから二色郷はまた後でとり上げますが、神武東征伝説話で登場するところです。このように木簡の地名と、古墳などの分布は結構重なってくるんですね。それを今から少し具体的に見ていきます。

答志郷と和具郷の関係は非常に難しいのですが、答志郷というのは答志島ですが、和具郷も答志島にあります。志摩半島にも和具があり、先ほどの話でも取り上げました。しかし、木簡には英虞郡の和具が出てこない。一方、答志郡の和具が出てきますので、奈良時代の木簡の和具は、恐らく答志島の和具郷の方をさすと思われています。では答志郷はどこかということ、和具の東、答志島の東端に答志という場所があるので、そこである。それから北側の桃取ですね。それから神島、小築海島などの島嶼群で答志郷であったのではないかと私は考えます。石可（石鏡）というところには、専門的な漁業集団がいたと思われる鳥羽市白浜貝塚がありますし、現在、伊勢神宮にアワビをたくさん奉納している国崎というところがありますが、これがおそらく神戸郷だろう。木簡は全く出てきません。

まず、答志郷ですが、小築海島では小築海貝塚でアワビ、サザエを中心に、漁具が一定量出てくるので、現在は無人島ですが、「海人族」の本拠地の一つであったと考えられます。桃取では和同開珎が出ていますので、伊勢湾ルート上の重要拠点ということです。それから藤原宮木簡で、さきほど民俗学の川島先生がカツオの話をされましたが、「堅魚」の木簡がありますので、それも獲っていたということになります。

次に和具郷、答志島の和具を中心に、対岸の菅島や坂手島も含めて和具郷だろうと思われています。和具のおばたけ遺跡では、円面硯とか鉄製刀子、紡錘車、各種貝類も出土しています。しかも倉庫が見つかったので、贄とか調貢納に関わる重要拠点の一つだろう。郡衙説もありますが、私はそれについては疑問です。丘陵上には岩屋山古

墳という非常に大きな横穴式石室をもつ古墳があり、志摩の族長のような存在ですね。この古墳の下におばたけ遺跡があります。藤原宮木簡にも「和具」の人物とし「嶋直」の名が出てきます。調は海藻類、藻、カツオ、贄（地名+品目）として各種の海藻類と貝類、タイなどが知られています。

次に石可郷です。現在の鳥羽市石鏡を中心とした地域とみられますが、石可郷も西方の生浦湾周辺も含まれると思われます。重要なのは、木簡でのアワビ、先ほど地名のない木簡のアワビはおそらく志摩だろうとお話しましたが、たくさん貢納さてるはずなのですが、実はそれほどアワビの木簡がないんですね。ただ、平城宮木簡で「麻生割鰯」と書いてある。これは「麻生」（おう）は郷名表記はないけども、地名から生浦湾付近と考えられ、おそらくこれも贄木簡だろうと思われています。それから白浜貝塚では、非常にたくさんの骨角製の漁具とかアワビ、マグロ、カツオ、漁具、土器も出土しています。この地域には、志摩半島で唯一の家形埴輪が出土した大吉北古墳がありますし、平城宮木簡にも調、贄として、いろいろな種類のタイが存在します。それからアワビですね。

なお、鳥羽市の大村島からも弥生・古墳時代の遺跡が見つかったので、色んなところに海人の拠点があった。発掘したらそれなりのものが出てくるだろうと思います。

次に鳥羽市贄遺跡、これは石鏡郷になるのか、どこになるのかが微妙ですが、非常に重要な遺跡です。贄遺跡は、縄文・弥生時代の遺物もありますが、5世紀末から古代にかけて一つの画期をもっており、皇朝銭、ベルトの部品や飾り、大刀金具や、漁具も出土しているのですが、これは贄を作るための志摩国の御厨ではないかと私は考えています。というのも遺跡のある安楽島は昭和期に干拓をして現在は陸地化していますが、かつては島であり、隣接して駅家郷という陸上交通の拠点があるためです。さらに志摩の各地から海上交通で入ってきてやすいということで、「美濃」刻印須恵器という官衙で用いる特殊な遺物が出てきます。

神戸郷と駅家郷は、鳥羽市国崎がおそらく神戸

郷ではないかと思います。その場合、奈良時代の「志摩国輸庸調」、つまり租庸調の庸の納入台帳があり、そこでは調を貢納しています。

伊椎郷、これは現在、伊勢神宮内宮別宮・伊椎宮にあるのですが、貝類を記載した木簡は出ていません。小海遺跡などの製塩遺跡が多数ある。平城宮木簡には、スズキ、コノシロ、タイなどの魚と、海藻類が中心です。

英虞郡は、甲賀郡、名切郷、船越郷、神戸郷、それからこの辺はあまりよく分かっておりませんが、二色郷などがあります。

甲賀郷は国府と国分寺が置かれたところですが、木簡がほとんど出てきません。古墳は、志摩市おじょか古墳、上村古墳、塚穴古墳で、顕著な武器副葬や馬具が認められますが、漁具はあまり出てきません。ですから、漁民との関わり、海の立地からの関わりはありますが、それを統括する首長の古墳だろうと考えています。具体的には、おじょか古墳の九州系の羽子板形と呼ばれる横穴式石室です。だから非常に武器類の副葬が目立ち、甲冑もあれば刀もある。余談ですが、おじょか古墳の石室に入るときは、足から入り首から出てください。そういう芸当ができるのであれば試してみてくださいね（笑）。上村古墳は、熊本県の古墳との共通性が副葬品に認められるものがあります。平城宮木簡にその地名が一つ候補のものがありますが、この国府のある甲賀郡こそ先ほどお話しした地名の書かれないうち木簡が調製されたのではないかという説があります。ただ甲賀郡がないだけではなく、アワビの木簡は実は先ほどの「麻生割鯨」以外はほとんどありません。ということは、やはり志摩全体からアワビは貢納されているのではないかと、私自身は考えています。

名錐郷は、志摩市大王町塚原古墳で埼玉稲荷山古墳などと兄弟鏡となる画文帯神獣鏡が出ています。大王町畔名には、海を見下ろす2基の前方後円墳である泊古墳と鳶ヶ巣古墳があり、泊古墳出土の銀装三葉文楕円形杏葉は熊本県大坊古墳出土品などとの共通性が指摘されています。この北側の向こうに、おじょか古墳が位置します。また、

地蔵貝塚では、鹿角製刀剣装具を副葬した海岸の埋葬が認められます。海岸の埋葬人骨は、鳥羽市白浜貝塚、志摩市西殿遺跡でも認められ、大紀町芦浜遺跡、南伊勢町座佐遺跡も可能性がありますので、どうも点々と分布しているのだろう。海人集団との関わりがあるのではないかと考えられます。志摩市大王町塚越貝塚は、翼状のかえしの持つ銚や、刀子柄や刀装具などが出土しています。

次に船越郷です。こちらでは、宮山古墳を中心とした礫浦古墳群があり、平城宮木簡ではカツオ、ナマコの記載があります。宮山古墳で重要な遺物は鉄製の釣針、大型のもので、おそらくサメを獲るものと考えられます。まさに海人の族長のよう。ところが、漁具だけではなく、金銅装の環頭大刀という非常に重要な副葬品も出土している。

それから二色郷です。大紀町錦は、神武東征説話の中で神武が上陸する熊野荒坂津、「丹敷浦」の有力候補地で、新宮とかにも候補地がありますが、錦からは三角縁神獣鏡や、子持ち勾玉、初期須恵器、韓式系土器が出ています。平城宮木簡には、ここからカツオ、タイなどが送られていることがわかります。

道浮郷、平城宮木簡に「道後郷堅魚」の贅木簡があり、カツオが送られています。その故地がどこにあるのかというのは、今のところそんなにまだ限定されていない。あまり関連する有力な遺跡がわかっていません。贅湾の「道方」の地名が残り、展示でも紹介されている南伊勢町アララ遺跡などがありますが、表面採集資料であり遺跡の現状がよくわかりません。

（3）太平洋東西交流の要衝・熊野をめぐる海上交通と海人

もう時間が残り少なくなりましたが、最後に太平洋の東西交通の要所である、熊野をめぐる海上交通と海人についてお話しします。まず、現在休止していますが、熊野市に残る二本島祭を紹介します。この祭りでは、装飾豊かな関船2隻が競漕しますが、その関船の船上には鉾やカサブキ（キヌガサ）などが建てられており、宝塚1号墳の船形埴輪と非常に似ています。熊野では、点々と遺

跡があり、かつ潟というか、港になるようなところとセットとなっており、そのうちの一つ道瀬潟からは、関東系の鬼高式土器が出ています。

熊野と船の関係を考えるうえで重要なのは、仏教説話集の『日本霊異記』下巻に出てくる説話です。ここに熊野の村の人が山の中に入って船を作り、半年後、船を曳くために再び山に入ったとの記載があります。熊野は雨が多いことから大木が多く、山と海の距離も近いため、やはり船を造っていたことがこの説話からも窺われます。

『万葉集』には、「眞熊野の船」、あるいは「熊野船」と詠み込まれた歌があります。熊野船とは何か。このうちの一つ「眞熊野の船」を詠んだのは山部赤人で、前後からこれは播磨国で詠まれた歌ですが、眞熊野の船が播磨にまで運航していたことがわかります。一方、「御食つ国 志摩の海人ならし 眞熊野の 小舟に乗りて 沖辺こぐ見ゆ」は、聖武天皇が伊勢に行幸した際に詠まれたもので、これは伊勢の海だろうということです。

このような熊野船の伝統を伝えるのが、二木島祭りの関船です。宝塚1号墳船埴輪では蓋の縁辺に穴が空いていますが、二木島祭り関船もカサブキと呼ばれるキヌガサの縁辺に穴があり、そこに吹き流しが結ばれています。また、宝塚1号墳の船形埴輪と同じように、長刀なども立ちます。そのように見ていくと、まったく時代が異なりますが、両者の装飾が非常に似ていることがわかります。この二木島にはそれぞれ室古神社、阿古師神社という二つの神社があり、その祭礼が二木島祭りです。

『日本書紀』持統6年の5月条に、阿古の仮宮に行幸したことが記されています。これは志摩国の地名で、持統天皇1回目の東国行幸です。なお、先ほどお話しした持統上皇が的潟から船に乗って三河に渡ったのは2回目です。さて、この1回目の行幸時、贄を貢進したのが紀伊国牟婁郡の人、阿古志海部河瀬麻呂です。阿古志は、阿古師神社の阿古師と一緒にですね。贄を納めたので、10年間の調と雑用を免ずる、ということも記されており、このことも重要です。つまり、贄と調の互換

性について書かれているわけです。持統天皇の行幸に際して、牟婁郡の人が協力している。もしかすると、河瀬麻呂の故地が現在の熊野市二木島周辺にあったのではないかとも思われます。また、木簡では、紀伊国牟婁郡関係の木簡にはちゃんと贄が明記されているものがあり、「磯鯛」「鯛」「細螺」が牟婁郡から送られています。

(4) まとめと展望

最後に、熊野市津ノ森遺跡を紹介します。三重県熊野市にある七里御浜は、熊野川から運ばれた砂が北側に堆積し、地形が高くなっています。このため、ここに流れてきた志原川と産田川は出口が狭窄され、内側に滞水して形成された「大前池」などの潟湖群が河口部に存在します。今は埋め立てられたものも多いのですが、本来は点々と帯状潟に瘤状潟が団子櫛のように連なっており、市腹側の奥部には熊野型甕を出土した東里遺跡が、また産田川の奥部には弥生時代から古墳時代の土器や、滑石製模造品が出土した津ノ森遺跡があります。この津ノ森の「津」とは港のことで、森とは「杜」だと思います。『日本書紀』に「熊野の有馬村」という地名が出ており、これをイザナミの葬礼に関わる花の窟とする意見が多いのですが、私はこの津ノ森遺跡から奈良時代の暗文土師器が出ていますので、多分にこの熊野地域屈指の拠点遺跡である津ノ森遺跡を意識したものではないかと考えています。これだけ砂が堆積し、潟湖の奥に入ると、本来はもっと水があり、大きな船も停泊可能な、熊野灘沿岸地域屈指の泊地としてなっていたのではなかろうかと考えています。当地は、海と山の距離が非常に近い熊野地域にあって、海浜部に平地があり、交流の拠点だったとみられます。

ちょうど1時間経ちました。詳しい結論については予稿集に書いてありますので、お読み下されればと思います。このように伊勢・志摩・熊野の、それぞれの特性に応じて専門的な漁業集団だったり、あるいは海上交通の拠点であったり、あるいは海産物に限らない複合的な生産体制をとる集団があったりということで終わりたいと思います。どうもありがとうございました。

第2表 古代における志摩国の海産物貢進一覧

	種類	海藻・海草類															魚類																			
	品目	滑海藻	撫滑海藻	乾若海藻	海藻根	角俣菜	名止毛・奈豆米	伊祇須・小凝菜	名乗菜	紫菜	赤乃利	布乃利・鹿角菜	加自米	海松	深海松	大凝菜	多比荒	多比鰺	多比鰺	鯛楚割	都焉荒鰺	堅魚	堅魚鰺	荒伊委之・伊委之	牟津荒鰺	近代鰺	近代荒鰺	鈴口味鰺	益口口鰺	益口口鰺	雜魚	雜魚楚割	雜魚鰺	雜鰺	鹽漬雜魚	
主計式	調庸	○			○	○	○			○		○	○		○							○											○	○	○	○
	中男作物																			○		○												○		
	御贄旬料																															○				
内膳式	御贄節料																																			
	年料御贄														○																					
	民部式	交易雜物														○																				
木簡	答志郷(手節里)					○		○						○			○	○					調													
	和具郷	○			調			○	○									○					調													
	千口(受力)郷				調																															
	麻生																																			
	伊可郷		○		○			○				●						○	○			○														
	目加(甲加)里				調																															
	伊雜郷				調													○	○				○				○		○							
	名錐郷		?		調	調						○										調		○	○			○								
	船越郷														●							○														
	道後郷														調							○														
	二(仁)色郷																		○			○										○				
	志摩国																					○														
	推定志摩国	○	○																			○														

	種類	貝類																							塩	その他								
	品目	鮫	鮮鮫	味漬	腸漬	蒸鮫	玉鮫	御取鮫	夏鮫	玉貫鮫	滑海藻纏鮫	酢鮫	焼鮫	加吉鮫	腸蒸鮫・腹蒸鮫	割鮫	比焉鮫	宇尔井作鮫	鰯腸	鰯黄腸	耽羅鮫	雑鮫	鮑鮫	さざえ	貽貝鮫	貽貝腊	塩	熬海鼠	焼海老	蒸海老	雑魚味物			
主計式	調庸	○						○															○				※							
	中男作物																																	
内膳式	御贄旬料		○	○	○	○	○	○	○																○									
	御贄節料																																○	
	年料御贄																																	
民部式	交易雑物																																	
木簡	答志郡	答志郷(手節里)																								○	○	○						
		和具郷																									○							
		千口(受力)郷																																
		麻生																○																
		伊可郷																																
	英虞郡	目加(甲加)里																																
		伊雑郷																																
		名錐郷	○																						調									
		船越郷																																調
		道後郷																																
志摩国																																		
推定志摩国					○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			○		○						△	△		

※神亀六年『志摩国輸庸帳』

海と生きた縄文・弥生時代の人びと ーかれらが海に乗り出した理由ー

寺前直人

はじめにー海と私ー

こんにちは寺前です。今日は縄文時代、弥生時代あるいは人類が海と関わりだした頃の物言わぬ考古資料を使いながら、かれらが海に乗り出した理由について話していきたいと思います。

結論はシンプルでして、三つの理由を考えています。一つ目は、水産物といった食料を獲得する目的です。これは貝塚などからみつかる資料から詳しく説明されてきました。二つ目は、海を介した交易です。縄文時代、弥生時代のモノの分布を見ていくと、今風に言うと経済活動、多くのものを手に入れて、それを運ぶことによって利益を上げ、商業のような活動をイメージするとわかりやすいでしょう。三つ目は有益な技術や情報、あるいは人材と接触して、それを習得し広げるというような現在でいうところのサービス業であったり、留学であったり、そういった目的でも海を介した人の移動というのはあるではないかと考えています。この三つ視点から、具体的な考古資料を読み解いていきたいと思います。

とは言っても私は奈良県の海のないところの出身でして、大阪には学生時代、助手、助教の時代に十数年住んでいましたけども、住んでいたのは大阪の池田市です。海とも縁遠い場所です。現在も東京の多摩地区に住んでおり、本当に海になじみがない、縁遠い生活を送ってきました。ましてや、今日のメインテーマであるに漁業に関してはほど遠い生活を送ってきました。まあ、一步引いた視点で客観的に資料を紹介もできるのかなということで、話を進めていこうと思います。

(1) 海の幸を求めて

これは日本地図を反対にした、南を上にした地図です。これが私の今日のお話の答えでして、弥生時代以降の海を介した人々の動きを考えておいてこの中国大陆に近い、朝鮮半島に近い下のエリアと、そこからみると遠くなる白い点線のエリア、この紀伊半島を含む白い点線のエリアという違い

について考古学的に整理するのが、今日の話の中心になります。

人類と海の関係はいつ始まったのか、どういう風に確認できるのか。2016年に沖縄本島南側に位置する南城市のサキタリ洞窟で、23000年前にさかのぼる旧石器時代の釣針が見つかりました。こういった釣針を使った釣りが旧石器時代にあったのではないかっていうことが指摘されています。ただ、この場合は海に出ていた、海岸で釣りをしていたのではないかということもありますので、もう少し新しい時期、縄文時代から見ていきたいと思います。

まず、漁具です。縄文時代早期あたりから各地でさまざまな漁具が確認できています。日本列島は酸性土壌ですので、動物の角や骨、鹿の角なんかはすぐく多いのですが、骨角器はあまり残りません。貝塚だとよく見つかるのですが、一般の遺跡だとなかなか残らない。神奈川県横須賀市吉井第1貝塚からは早期に属する釣針あるいはその未製品、それからヤス、魚を突き刺す道具ですね、そういったものが見つかっています。

あるいは、日本海沿岸になりますけども、石川県の能登半島の中でも先端にあります能登町真脇遺跡では入江がありまして、発掘調査で大量のイルカの骨が見つかっています。こういった入江を利用した追込み漁が行われていたのではないかと、イルカ、クジラは音に敏感であるという話がありましたけれども追込み漁を行っていたのではないかと。そして石製の刺突具がたくさん見つかっています。つまり、モリ、ヤスといったもので大型の魚類、海獣、あるいはイルカ、クジラなどが狩猟・漁撈の対象になっていたのではないかとという証拠が見つかっています。神奈川県横浜市の称名寺貝塚でも、バンドウイルカやアシカの骨が見つかっています。

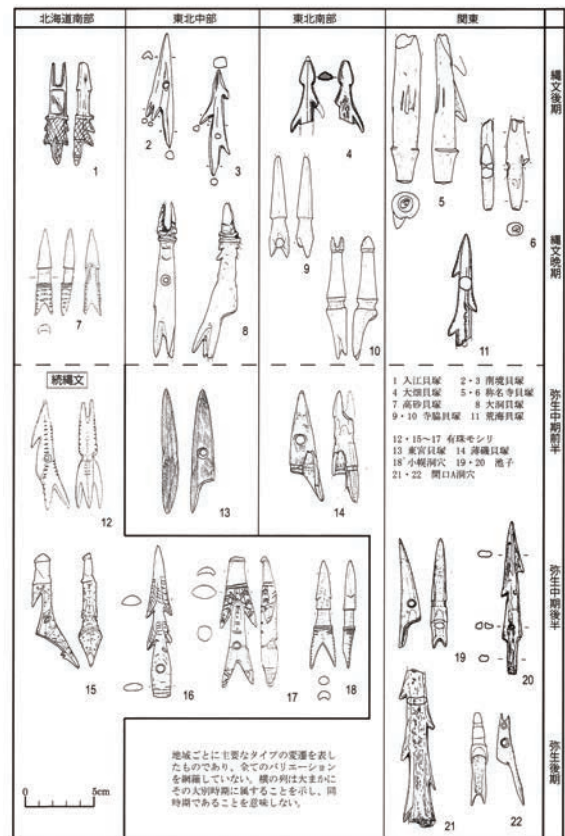
ちなみに、縄文時代にイルカを食べていたんだよという話を駒澤大学（東京の世田谷区にあります）で話をする際、学生にクジラやイルカを食べたことありますかと質問すると、関東圏の学生の8割はクジラを食べたことがあるが、イルカはほ

とんどいないという感じでした。ただ面白いことに、伊豆出身の学生はイルカを食べたことがある人が、発掘合宿のお土産にイルカの干物を持ってきたこともあります。紀伊半島と東との食文化のつながりというのは、そういった点でも面白いですね。

さらにおもしろい魚骨もみつっています。三陸海岸の面する宮城県南三陸町の大久保貝塚というところから、マグロの背骨にズバッと尖頭器、尖った石の鏃が突き刺さった状況で見つかっている事例があるのです。これは弓矢ではなく、モリの根挟み、アタッチメントの部分は鹿の角なんかが使われているのですが、その先端に硬い、骨角器より鋭い打製石器がはめ込まれてモリ先にするという道具です。こういう道具が縄文時代の東日本を中心に広く使われていることがわかっています。このように道具が突き刺さっている骨が見つかったと、どの道具でどの獲物をとっていたかということを知ることができるのです。これは、縄文時代の晩期の段階ですね、弥生時代の前段階の資料です。

また、これは骨角器になりますけども、モリ類にも色々ありまして、片方にカエリの部分がついて（第1図）、よくみると側面に穴が開いていますよね。これが回転式離頭鏃と呼ばれるモリ先です。この孔にロープを通して結びつけ、モリ先が柄から外れても体内に突き刺さると90度回転して抜けにくくなり、獲物が船を引っ張ることで潜れなくなり、徐々に弱らせるという、歴史時代の鯨漁のようなやり方を、すでに縄文時代の人々が行っていたということが読み取れます。また、現在、横浜市ユーラシア文化館におられる高橋健さんは、北海道のさらに北側のオホーツク文化の研究をされており、その成果を紹介します。

これは20世紀の民族誌の記録です。これはアムール川からサハリンの先住民のシロイルカ漁を聞き取り調査した時のスケッチでして、8人乗りぐらいの手漕ぎの船からモリを打ち込んで、浮きを付けたモリでイルカが逃げられない、潜れないようにして、徐々に弱らせてから、さらにモリを



第1図 東日本における縄文時代から弥生時代の銚頭変遷

撃ち込んで、最後に手繰り寄せるという一連の流れを示しています。

面白いのは、8世紀のオホーツク文化、北海道の北部からサハリン等に広がるオホーツク文化の遺跡、根室市の弁天島遺跡から見つかった骨製の針入れに、同じようなモリを使ったイルカ漁の風景が刻まれて描かれていました。手漕ぎの細長い船の中に6人ぐらいの人なののでしょうか、モリを打ち込む人がいて、既に2本モリ打ち込まれ、そしてイルカと船の間はロープでつながっている。そういった状況を描写した絵画が1200年前に遡る出土品で確認できるのです。このように非常に民俗例と類似する漁撈のスタイルが、考古学的にはオホーツク文化、さらには縄文時代に確認でき、とくに東日本には数多く確認できるのです。

みなさんご存じのとおり、縄文時代の遺跡は青森県三内丸山遺跡や千葉県加曽利貝塚といった著名な遺跡があるように東日本がすごく多い。土偶や集落の規模は東日本が圧倒的に多く、恐らくそういったことにも起因していると思うのですが、

東日本に発達した漁撈具が広く認められています。しかし、考古学者は使った人たちの生の声をインタビューすることはできません。では、どのような方法で広がりや背景を検証するかというと、出土したモリ先の形、作り方を細かく分類します。モリにソケット状に柄と繋がる部分があり、モリ先の穴にロープを結ぶ部分があるというデザイン、さらに作り方や形態で細かく分類した上で、高橋健さんによる分類（第1図）では、縄文時代後期から晩期、弥生時代中期前半、中期後半、後期というように順番に並んでいるのですが、東北地方や東日本に多い形、デザインがそれぞれの地域で影響しながら変化していくことがみてとれます。特にこの議論で大切なところは弥生時代になると、東海地方、三重県鳥羽市の白浜遺跡などに東日本的な回転式離頭銚が登場するということが、モリ先のデザインの変遷で指摘されています。考古学者がここから何を読み解くかということ、東日本の人がだんだんと南に南下してきたのか、移民として、今回紹介された「旅漁」ではないですけども、紀伊半島に来ているのかという考え方があります。もう一つは、さきほど紹介した高橋さんの考えなのですが、各地でこのデザインの伝統はずっと継承されているので、本日の午前中にお話にありましたが、和歌山の技術を五島列島の人たちが知って学び、自分達でアレンジして取り入れた。そうした技術交流を高橋さんは説いておられます。

それから今回の展示資料にもありますが、縄文時代とほぼ同じデザインの回転式離頭銚がサメ用やマグロ用として展示されていますけども、こういう資料との比較から、骨角器の用途を議論できるというのも大切です。その意味で本日午前中の発表は、私自身楽しく聞かせてもらいました。

さて、回転式離頭銚の左下の部分ですね。白浜遺跡のものも刻み目があるのが見てとれると思います。また、回転式離頭銚でも、日本海ではちょっと漁撈の道具が違います。鳥取県鳥取市の青谷上寺地遺跡、あるいはその周辺で特有の回転式離頭銚のデザイン。あとですね、この日本海沿岸や長崎県域では結合式釣り針という、大きな釣り針を

作る為に鹿の直線的な鹿角のカーブをうまく生かしてパーツを作り、それらを縛り付けて一つの釣り針にする。そういう作り方をしている釣り針が縄文時代の長崎県とか西部九州で流行します。これが、朝鮮半島、そして弥生時代の西日本の日本海沿岸、島根県とか鳥取県まで広がっていくことが分かっています。考古学的に言うと、弥生時代に入ってくる中で、漁撈の道具というのは、日本海側の西日本と、太平洋側の東日本から、白浜くらいまで、紀伊半島の陸地くらいまで、大きく見ると地域差があるようです。今日はもうこれ以上話しませんが、アワビおこしの道具や、網の重りに使われた土錘、石錘のデザインの違い、これらも各地で差があって、それぞれを重ねていくと、海を行き来した人々の技術交流、これを考古学者は、単に伝播と言ってしまうのですが、本日午前中の民俗学でのお話がありましたように実態は複雑な人と人との交流があったと思います。それらに気づかされたのも、今回の学びです。

（２）財を求めて－交易の海－

では、実際に彼らはどういう手段で海に乗り出したのでしょうか。あるいはいつから沿岸を離れて海に乗り出していったのでしょうか。その証拠として、考古学者が重視しているのは、伊豆の神津島で採取できる黒曜石が、旧石器時代に本州島で使われているという事実です。神津島は、現在は下田から約56kmの沖合にあります。ただし旧石器時代は氷河期ですので、今よりも海水面がずっと低く、すなわち陸地は広がっている。このため56kmよりは短い距離と考えられていますけども、海水面が最大値で低下していても、海が間にあったことは海進から確実ですので、この流通する黒曜石を入手し使っていた人々は、泳いでいたという可能性もなくはないのですが、合理的に考えると船を使っていたと考えられます。ただ、現段階では旧石器時代の船というのは日本列島では見つかっていません。堤隆さんは、この時代は大型動物がいた時代ですので、木を切り抜いた丸木舟ではなくて、アムール川流域の動物の皮を使ったようなカヌーを使ったのではないかと想

定されていますが、この辺りはまだまだ今後の研究が必要な分野になります。

縄文時代に入ると、船が日本各地でたくさん見つかっています。その中で今一番古い船としては、千葉縣市川市の雷下遺跡で残存長 7.2 m の丸木舟です。放射性炭素同位体分析の結果、縄文時代早期に遡る船であるということが判明しています。こういう船が日本各地で見つかっており、いずれも縄文時代では長さ 6～7 m くらいですべて基本的に丸木舟です。

ここで古代中国の話に移ります。弥生時代に併行する頃の中国では、お墓に入れる明器の中に、船の形をした明器が見つかっています。中国といってもチワン族自治区の内陸部の遺跡で見ついている例なので、内水面利用の船の可能性のある意見もありますが、ちょっと面白い事例です。男性の姿がフィギュアとして造形され、4 人が 2 列に並んで、おそらく「エイヤー、エイヤー」と声をかける。それぞれに穴が空いているため、おそらくここに有機質で作られたオールが差し込まれていたとみられます。

船のサイズは甲板に表現された人との比較でいうと、全長は 20 m 前後で、最大の幅は 4.5 m ぐらいと考えられますが、丸木舟の船体に構造物をつける準構造船ではなく、複数の木材で船底をつくる構造船であるとみられます。

また、漢代の『南州異物志』という書物には、帆の記述があります。すでにこうした先進的な船を有していた中国社会との交流がはじまる弥生時代のことを次の考えていきたいと思います。

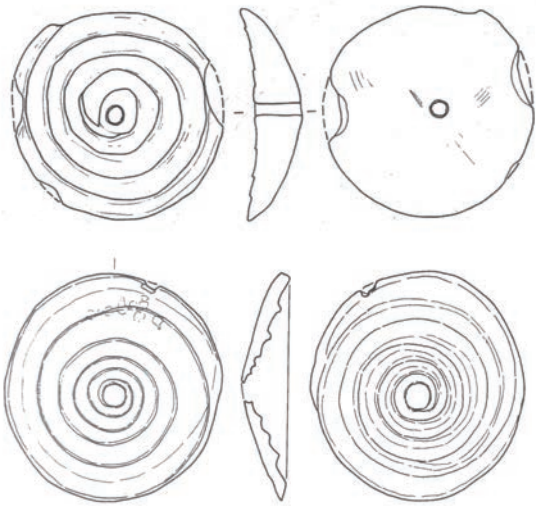
まず、弥生時代になると準構造船のパーツ、舷側板の破片などが各地で見つかっていき、相伴土器の評価の問題がありますが、鹿児島県では弥生時代前期の終わりに遡る資料が見つかりますし、中期前半に遡る資料としては滋賀県、静岡県浜松市などでも報告例があります。

準構造船とは舟底は一木で作られており、この点は丸木舟と変わらないが、その端部に波をよける舷側板などが取り付けられ容量が増した構造を有する船のことです。

ですので、船の構造は縄文時代、弥生時代、古墳時代、最後の古墳時代の船はもう一つ分かっていないところがありますが、徐々に発達していったとみられています。先ほどの穂積さんの話でも、古墳時代の船の破片の紹介がありました。実は私の故郷でもある奈良県広陵町で大型の準構造船が内陸部にもかかわらず見つかっていますが、それは古墳の周濠からなのです。お葬式に使う本物の船として、本物の船のサイズの舷側板や縦板などが見つかっています。

これが三重県宝塚 1 号墳で見つかっている船形埴輪にも写し取られていたということですね。こうした古墳時代の船の具体像についても考古学的にも論じることが可能になってきています。

もう一つ、縄文時代の船の役割や海に出た目的を考えるために大切なのが、特定の場所でしか取れないヒスイや南の海でしか採れない大型の貝が日本列島の各地に流通しているということが分かっています。一番分かりやすい例として、北海道の礼文島の礼文町船泊遺跡の事例を紹介しましょう。礼文島は日本列島の最北部の離島です。船泊遺跡は、縄文時代後期に大量の貝製品をつくっているムラなのですが、墓からは非常に大きいヒスイの大珠が見つかっています。ヒスイはご存じのとおり、新潟県糸魚川地域でしか採れないので約 1000km を超えて北海道の離島である礼文島にもたらされていたのです。ここにヒスイを持ってくるためには、必ず海を越えて運ぶ必要があります。実はヒスイよりもっと遠くから礼文島にもたらされたモノがあります。それが渦巻状の貝です（第 2 図 1）。イモガイという大型の巻貝の螺旋部を使った装身具です。それからタカラガイも見つかっています。こうしたイモガイやタカラガイは鹿児島、南西諸島、伊豆や小笠原といった暖かい海でしか生息しないのですが、これらの貝あるいはそれを用いたアクセサリーが北海道礼文島で縄文時代後期に見つかっているのです。こういった実例をふまえると、縄文時代の人々は単に食料を求めて危険な海に乗り出していたではなく、どうも、こういう遠隔地の貴重なアイテム、



第2図 イモガイ製装身具（上）と模倣石製品：縮尺不同
 1 船泊遺跡（北海道礼文町：縄文時代後期）
 2 日高遺跡（群馬県高崎市：弥生時代後期）

財を手に入れ、あるいは交換するためにも海を越えていたのではないかと考えられます。

それから、北海道や北東北という遠いエリアにも縄文時代において結構な数の南の海で採れる貝を使った貝輪などの装身具が見つかっています。この貝輪で面白いのは、北海道や東北の人たちは南海上の貝輪を手に入れるだけではなく、粘土を使ってその貝自体を写し取る、あるいは石を使ってその貝を真似た製品を作るということをやっているのです。

これは何が重要かという、たまたま南から北海道に漂流した人が身に着けていた貝輪が出土したのではなく、北海道や東北の縄文時代の人々は貝輪などを偶然手に入ったというよりは、意識して入手したかった、入手できなかった場合はそれを模倣するほどにこの南海産のアクセサリーを入手したかったという風に考えることができるのではないのでしょうか。南海産の貝は、白くて分厚くて宝石のようにきれいですよね。

このように南海産の貝製品を他の素材に写し取るという行為は、弥生時代の特に関東の資料にもみられます。石製で作ったり、あるいは土製で作ったりしているのです。具体的には群馬県のお墓で出土しているもの（第2図2）、茨城県の住居から出ているものがあります。

この延長線上に日本海沿岸の北陸、山陰で採れ

る緑色の綺麗な石である碧玉製や緑色凝灰岩といった貴重な素材をもちいて作る古墳時代前期の腕輪形石製品の存在も位置づけられます。古墳時代の腕輪形石製品は、皆さん博物館で見たことある人がいると思いますが、こういう風に見てくると、実は縄文時代以来の南海産の貝輪に対する憧れをベースに、古墳時代になると碧玉という、これまた、今度は日本海で採れる貴重な石材を作っているのです。

このような祖型への憧憬と模倣の連鎖が縄文時代から古墳時代、東日本から西日本へとつながるのではないかと考えています。すなわち、古墳時代の腕輪形石製品は、縄文時代の海を介した交流の一つの帰結として好まれるようになった、このようなイメージを抱いています。

議論が前後しますが、弥生時代に併行する時期の北海道と弥生時代の青森県にみられるイモガイ製の腕輪とその模倣品です。一番上のものは、北海道の伊達市有珠モシリ遺跡のお墓から見ついている大型のイモガイを分割し、穴を開けて紐で結んだ腕輪です。このモデルとなったものが、本日まで発表の中園先生がおられる長崎県の佐世保市宮の元遺跡の出土例です。イモガイはとれるのは、佐世保よりもっと南です。

それが北海道の墓に副葬されているということは、結構前から分かっていたんですけども、最近、北海道大学の高瀬克範さんの研究でこのような形をしたイモガイ製腕輪を模した石製品が、弥生時代中期の集落である青森県田舎館村の垂柳遺跡にあるということが分かったのです。

南の海と北海道が結びついて、そこで新しい価値観を生み出していったという縄文・弥生時代の海を介した人々の交流というのが、とてもダイナミックだったということを考える上で、面白い事実だと思います。

海に出る。イルカやマグロを捕まえたり、そして南海産の貝やヒスイを手に入れたり、想像するとやっぱり危険ですよね。海の危険さというのは、皆さんもよくイメージできると思います。

別の意味の危険さが印象的な興味深い資料が、

最近報告されています。それは瀬戸内に面する岡山県笠岡市の津雲貝塚で、調査自体は戦前の京都大学の調査ですが、最近残された人骨を観察したところ、左側の人物はサメに襲われた手足がない人物の存在が明らかになっています。サメに襲われるという体験は、大阪にあるユニバーサルスタジオジャパンにでも行かない限り、我々は現実的ではありませんが、こういう資料を見ても、海への危険に過去の人々は直面しており、それでも海に乗り出したという決意が読み取れます。

その決意の背後に関して、民俗学や人類学と考古学を結び付けて優れた縄文時代研究の成果をあげた渡辺仁さんが、次のような興味深い議論をされています。それは縄文時代の階層制を論じるなかで北米大陸の先住民、それからアイヌの人たちの事例を踏まえた仮説です。まず、いわゆる海獣やカジキ漁といった大型魚を捕るというのは、実はコストパフォーマンスがあまり高くない。民俗例的にいうと、危険度に対して手に入れられるタンパク質源としてはそれほど効率的ではない。それでも人々は海にのり出す、あるいはこれまたタンパク質を得る目的では危険ではなはだ非効率なクマを捕まえようとしている。これは単なる食料カロリー源を得るための活動ではなくて、それをなし遂げたことによって得られる尊敬や名誉、そういうものが重視されて、まさに一部の縄文人のエリートがそれを行うのだと考えられたわけです。あるいは危険を乗り越えて困難を達成することがエリートの条件だったんだといった議論が1990年代に行われています。

そして、渡辺さんは海に乗り出すということは、大型魚とか危険な大型魚を捕まえるとただけではなくて、遠方の財を手に入れるってということも危険を伴うけども、成功すれば栄誉や名声を手に入れることができる。そういった枠組みで縄文社会と捉えるべきだと提言をなされているのです。縄文社会が階層的であったということ見解については、むしろ現在は否定的に捉える研究者が多いですが、私は渡辺さんの提言の前半部分、すなわち海を介した活動は危険だからこそ名誉と名声をも

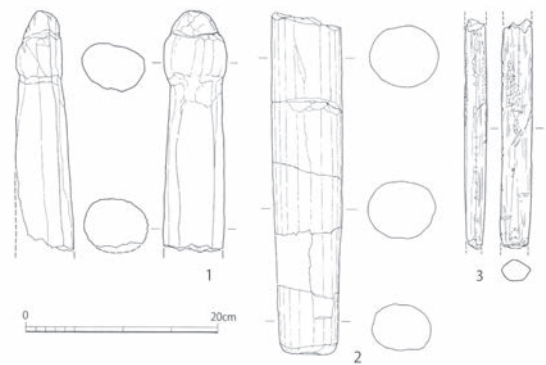
たらすんだという展望は、今回の展示そしてシンポジウムのテーマとリンクして、人類にとっての海に乗り出す意義、あるいは海へ挑んだ人々の内的な動機ということを考えるうえで、すごく重要なヒントが隠されているのではないかと思います。

（3）技術と情報、人材を求めて

その上で私の専門とする弥生時代のことを最後に考えてみます。

弥生時代は、朝鮮半島から海を越えた伝承が盛んになった時代です。農耕の技術の伝承、取捨選択があり、それが東から西に伝わっている。これはよく教科書的に示されている理解です。一方で、その反対方向、東から西への伝承もあったのではないかと、とくに考え方や思想、信仰の影響があったのではないかというのが私の考えです。その中で大事になるのが、儀礼です。

これは縄文時代の石棒です（第3図）。一般的には男性器を模したなんていわれますけども、ここで重視したいのはこの石棒というのは縄文・弥生時代を通して最大の石製品であるという点です。木製ではもっと大きいものがありますが、住居などの材を除き、人工物としては一番大きいものであり、2mを超える巨大な石棒が長野県で見つかっています。あるいは東京都町田市の忠生遺跡、縄文時代中期の住居から見つかっている石棒は、長さが約1.8m、重さ約60kgで、火を受けてばらばらで見つかっています。このように東日本では石棒が火を受けてばらばらにするという儀礼の仕方が流行するのですが、このお祭りのスタイルが、紀伊半島を介し、沿岸とは限りませんが、



第3図 弥生時代前期の石棒類（立野遺跡：和歌山県すさみ町）

東から西へ弥生時代に水田稲作を始める時期に伝わっているということが分かっています。

和歌山県すさみ町の立野遺跡からは弥生時代の前期前後、まさに水田稲作を始めるその時、農具とともに、石棒、それも火を受けて表面が発泡しているものが見つかっています。この石棒は、御坊市堅田遺跡やみなべ町徳蔵地区遺跡でも見つかっています。三重県の尾鷲市でも少し小さいサイズですが見つかっていますね。これらが、例えば大阪湾沿岸の田井中遺跡、神戸市の大開遺跡、この2つは近畿地方でも最も古い環濠集落ですが、ここでも石棒が見つかっていて、さらに大開遺跡の石棒の中には火を受けた状態でばらばらになった例もありました。こうした状況を見ると、水田稲作の始まる時というのは、東から西に和歌山の紀伊半島の沿岸を含めて、水田稲作が西から東へ動くだけではなくて、東から西へと精神文化の交流もあったのではないかと思います。

西の水田の技術を学び、故郷である東へそれを持ち帰り、定着させる。これは今風にいうと漁師さんが伝えたというイメージできませんが、東西を往来する集団の中には、そういう新しい生業に注目して持ち帰った人がいると思います。一方、向的に勝手に西の技術が東に機械的に伝播するのではなくて、お互いに技術を学び、いいところを学ぶ、盗むような交流がある中で、逆に東から西へと精神文化が逆方向に影響を与えたのではないかなというのが、私の研究視点です。

考古資料というのは無口ですが、より人の交流に具体像に迫れる可能性があるのではないかと考えています。考古学研究も海を介した交流の分析に寄与するところがあるのではないかとこの提案をもって、本日の私の報告を終わりたいと思います。ご清聴、どうもありがとうございました。

【図版出典】

第1図：高橋 健 2017「骨角製漁具の発達と交流」『海に生きた人びと』平成29年度春期特別展図録、大阪府立弥生文化博物館 p. 94・第2図、第2図1：礼文島教育委員会 2000：p. 290・図5-4-10-158、第2図2：群馬県埋蔵文化財調査事業

業団 1982『日高遺跡5』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書10：p. 125・第75図、第4図1・2・3：和歌山県文化財センター 2013『立野遺跡』近畿自動車道紀勢線事業に伴う発掘調査報告書：p. 49・図35

令和3年度 紀伊風土記の丘 年報 第49号
紀伊風土記の丘 研究紀要 第11号

発行日	令和5年3月31日
編集発行	和歌山県立紀伊風土記の丘 和歌山市岩橋1411 TEL 073-471-6123 / FAX 073-471-6120
印刷	株式会社 土井印刷